

日本ジャーナリスト会議編

Japan Congress of Journalists

証言でつづるJCJ50年の歩み
1955～2005

ジャーナリスト
として生きて生きる

橋本 進／板垣まさる／宮崎絢子／横井久美子／土橋俊雄／吉岡吉典
隅井孝雄／坂巻克巳／奥田史郎／岩切 信／山崎晶春／太田武男
茶本繁正／斎藤茂男／清水英夫／吉川嘉治／河野慎二／田邊順一
酒井憲太郎／田悟恒雄／大野 博／松田 浩／本多勝一／早乙女勝元
高木敏子／柴田鉄治／小中陽太郎／吉田ルイ子／今井 彰／天野弘幹
藤野 豊／高田昌幸／大谷昭宏／亀井 淳／守屋龍一／岩井善昭
矢野英典／大西五郎／林 豊／山本 進／田沼祥子／門奈直樹
丸山重威／別田鐵造／小島 修／荒川恒行／林 豊／小石雅夫
能條伸樹／中里 仁／斎藤 誠／大波一郎／田川 実／古田俊暁
木村豊彦／近田洋一／清水雅彦／浅賀 茂／古木民夫／古住公義
木野本弘／羽原幹男／土井弘高／今岡重夫／蓮井孝夫／伊藤和人
白垣昭男／杉見徳明／島田三喜雄／官林祐治／小寺松雄／蔵原輝人
串部満夫／中根碩哉／清水克郎／茂木章子／四宮晴彦／竹内希衣子
高科憲邦／山田寿彦／安藤 健／杉山正隆／加藤 剛／今井精一
土倉 敬／徳吉 裕／秦 正流／伏木田照澄／原 寿雄

ジャーナリスト として生きる

証言でつづるJCJ50年の歩み
1955～2005

日本ジャーナリスト会議編

刊行にあたって

二〇〇五年——戦後六〇年、JCJ創立五〇年。この画期となる年が、実は恐ろしいほど国の進路が危うくされ、私たちの命と暮らしが脅かされる一年になったのではないか、そう思われてならない。

9・11総選挙後の特別国会では、政権勢力が三分の二という多数をたのみに、まともな審議もせず、テロ特措置の延長、郵政民営化法、障害者「自立支援」法など、次々に成立させた。

小泉首相は、五回目の靖国参拝を強行。アメリカとの間では在日米軍基地の再編と強化をめざす計画に、該当する自治体の意見も聞かず合意した。

自民党の改憲草案は九条二項を書き換え、日本を「戦争ができる国」に変えるものとなっている。

加えてサラリーマン大増税、消費税一〇%への引き上げ、医療・年金制度の改悪、米国産牛肉の輸入再開など、生活破壊の政策が推し進められようとしている。

メディアを巡る状況も深刻さが増している。「ピラ配布弾圧」事件の続発、報道・表現規制、「共謀罪」の新設など、言論・表現や内心の自由を侵す、憲法改悪を先取りする事態が進行している。

私たちJCJは、どう立ち向かうか。改めて責任の重さを痛感している。

ここに編んだ『ジャーナリストとして生きる——証言でつづるJCJ五〇年の歩み』は、いわゆる過去の思い出をノスタルジックに開陳したものではない。それぞれが時代の状況に立ち向かい、社会や政治の事象を見すえ、その後にある真実は何かを探り、世界と日本の動きを透徹し、より良い方向へ変革しようと奮闘した記録である。

地方で、部会で、集会で、仲間や友人とともに語り合い、自分たちの持てる職能を發揮し、「国民の知る権利」に応え、平和と文化の発展に貢献すべく活動してきた、貴重な記録である。

熱き思いの溢れる本書が、これからの時代を担う若い仲間を送るエールの一冊ともなれば幸いである。必ずや現在の困難を乗り越え、未来へ挑むエネルギーが汲みあげられるだろう。多くの人が読まれるよう願ってやまない。

二〇〇五年二月八日

『ジャーナリストとして生きる』刊行委員会

もくじ

刊行にあたって

I 時代の流れとともに

連帯を模索した頃	橋本 進	12
「汪溪さんを囲む」婦人記者懇談会	板垣まさる	13
本物の男女共同参画になるか！	宮崎 絢子	15
ベアテさん	横井久美子	16
妨害から守った旗揚げ講演会	土橋 俊雄	17
「高杉発言」決定版伝えた機関紙	吉岡 吉典	19
昔、AAJAがあった	隅井 孝雄	20
一〇枚のはがき	坂巻 克巳	22
確実な情報源——「JCJ内報」	奥田 史郎	24
存亡かけた「時代を見ずえる」集会	岩切 信	26
六月集会のはたした役割	山崎 晶春	27
『志』だよ！JCJ	太田 武男	30
石原都知事の退任を求める	茶本 繁正	31
ジャーナリストとはなにか	斎藤 茂男	33

II 国際情勢の渦のなかで

初めての海外旅行	清水 英夫	36
ラテンアメリカ変革の鼓動	吉川 嘉治	37
本田良介さんと「皇帝」	河野 慎二	38
モンゴルで会った二人の友	田邊 順一	40
一九八一年I O J総会の思い出	酒井憲太郎	41
砂漠での国際連帯	田悟 恒雄	43
「中ソ対立のあおり」か	大野 博	44

III J C J賞——波紋を広げて

般若苑の野外舞台上	松田 浩	48
「戦場の村」とイラク戦争の間 <small>あいだ</small>	本多 勝一	50
「東京大空襲」を語り継ぐ	早乙女勝元	51
「二月八日」へのこだわり	高木 敏子	53
ジャーナリスト精神の発見	柴田 鉄治	54
J C J賞と名古屋の連帯	小中陽太郎	55
写真は愛情の表現	吉田ルイ子	57
「埋もれたエイズ報告」を作って	今井 彰	58
受賞式で話したかったこと	天野 弘幹	59

十年書き続けた『「いのち」の近代史』	藤野 豊	61
この「居心地の悪さ」はなぜ	高田 昌幸	62
黒田新人賞受賞者と墓前で	大谷 昭宏	63
「自分」にきびしく問いかける	亀井 淳	65

IV 志高き先輩たち

斎藤茂男さんに取材されて	守屋 龍一	68
秦さんに大記者の気概	岩井 善昭	69
三人の先輩の話	矢野 英典	70
J C Jへ導いてくれたCBCの二人の先輩	大西 五郎	71
仲築間氏インタビュー	林 豊	72
「老いの繰り言」	山本 進	74

V それぞれの出会い、きずなから

言論出版の自由と私	田沼 祥子	78
『沖縄言論統制史』出版のころ	門奈 直樹	79
出会い、そして仲間たち	丸山 重威	80
「イチゴ会」の痕跡	勿田 鑛造	83
豊かな人間山脈の背骨	小島 修	84

広告の第一号会員	荒川 恒行	85
放送部会のバックアップで	林 豊	86
茜色をめざして	小石 雅夫	88
時代の逆流を食い止めたい	能條 伸樹	89
地方の記者として	中里 仁	90
あの時の「なぜ？」を抱えて	齋藤 誠	91
いつまで新聞記者やっとなるんか	大波 一郎	92
「もう一つのH」に四苦八苦	田川 実	93

VI 支部・部会活動——地域、分野に根をはって

北海道	密度濃い交流集会在弾みに	古田 俊暁	96
北海道	平和への希求	木村 豊彦	97
埼玉	THANK YOU	近田 洋一	98
神奈川	基地取材、泊り込み交流も	清水 雅彦	99
新潟	本社会議室と居酒屋で	浅賀 茂	100
東海	毛利さんを追いかけて	古木 民夫	101
京都	京の放送の灯を守って	古住 公義	103
関西	名称にこだわりながら	木野本 弘	104
広島	支部活動に残る三冊の本	羽原 幹男	105
広島	J C Jに余生をかけた兼井亨さん	太田 武男	107

岡山	支部機関誌第一号に思う	土井 弘高	108
香川	「干潟の止まり木」	今岡 重夫	110
香川	美しい水が川下に流れるように	蓮井 孝夫	111
北九州	戦争を憎み酒と女性を愛し	伊藤 和人	113
福岡	どうしたら会員が増えるのか	白垣 詔男	114
日経	都知事選と「平和箱」版画	杉見 徳明	115
日刊工業	最盛期には二〇名の会員	大野 博	117
東京新聞	「名古屋の壁」に挑む	島田三喜雄	117
新聞協会	ある先輩への手紙	官林 祐治	119
赤旗	美しい人と人との力	小寺 松雄	121
写真	第一線の人々、自由な雰囲気	蔵原 輝人	122
広告	先輩に教わるということ	串部 満夫	124
広告／東海	三上事務局長との貸し借り	中根 碩哉	125
出版	「裏方作業」で得たもの	清水 克郎	126
放送	放送部会の今と、思うこと	茂木 章子	128

VII 働く人々、市民と連帯して

「再び戦争をしない国」求め	四宮 晴彦	130
「J C Jふらっしゅ」の輪	竹内希衣子	131
歴史を動かす事業を地道に	高科 憲邦	132

市民と向き合える場に	山田 寿彦	134
「書く」ということ	安藤 健	135
他団体と連携を強めた活動を期待	杉山 正隆	136
報道職場復帰めざしJCJへ	加藤 剛	138
機関紙活動で「着眼大局」	今井 精一	139
メディアの役割に大きな力	土倉 敬	141
今ならまだ遅くない	徳吉 裕	142

VIII 若きジャーナリストたちへ

若きジャーナリストたちへ	秦 正流	146
戦争なき新時代への挑戦を	伏木田照澄	147
やるべきこと果敢に	原 寿雄	148

装丁／藤森瑞樹
 保存写真提供／蔵原輝人
 カット／最上勝孝（元河北新報）

- 日本ジャーナリスト会議の目的
- ① 真実の報道を通じて世界の平和を守る
 - ② 言論・出版・表現の自由を守る
 - ③ ジャーナリスト相互の親睦をはかり、結束を固める
 - ④ ジャーナリストとしての識見を高め、生活の向上をはかる
 - ⑤ 世界のジャーナリストと連絡、協力、交流をはかる
 - ⑥ 不当に圧迫されたジャーナリストを支持、援助する



I

時代の流れとともに

With the flow in the age

連帯を模索した頃

— J C J 結成前夜 —

橋本 進

(代表委員・元中央公論)

横浜事件再審請求人の一人、故・小林英三郎氏（事件当時、改造社員）が、J C J の前身、日本ジャーナリスト連盟（ジ連）の事務局長をされたことを知ったのは、私が再審支援運動（一九八六年）に加わってからしばらく後のことだった。謙虚な人柄の氏は、ジャーナリスト運動の大先達なのに、先輩ぶった振舞いなど、一切なさらなかったからだ。

私は一九四八年に中央公論社入社だから、ジ連に参加して小林さんの知遇を得ていても不思議はない。しかし、その頃の中央公論社の状況では、新入社員がジ連に顔を出すことははばかられた。前年に同社嶋中社長・戦犯反証問題をめぐり労資紛争が発生、大野欣

一、清水英夫、海老原光義（のち J C J 副議長）氏ら進歩派社員の退社、関連して畑中繁雄『中央公論』編集長の退社となり、退社反対のジ連や印刷出版本部と同社是对立関係にあったからである。

だから私は出版ジャーナリストの企業を越えた連帯など知らず、もっぱら編集部の中だけで仕事をしていた。前期レッド・ページとしての第一次『日本評論』事件（一九四八年一〇月）、改造社・壁新聞事件（四八年一二月）、第二次『日本評論』事件（五〇年三月）における編集者追放に際しては、胸を痛めつつも何の支援行動もとれなかった。

朝鮮戦争期のレッド・ページはジャー

ナリストの連帯を打ちこわし、新聞、出版、放送等の記者・編集者は孤立・分散に追い込まれた。しかし暴庄のもとでいつまでも身をすくめてはいられない。どんな形でもジャーナリストの連帯を再構築しよう——そんな動きが生まれてくるのは、当然の成り行きだった。先輩ジャーナリストたち、吉野源三郎（J C J 初代議長）氏らは、新聞、出版等のジャンルを越えて「プレス人会」「知識人の会」で顔を合わせていた。改造社の小田切進、東洋経済新報の雨宮浩一氏や私など、いわば青年編集者は「出版編集者懇談会」（編懇）結成に努力した。

一九五二年六月九日、神田・教育会館で発足集会、五二社、一一四名という記録が残っている。残念なことに私にはその会の記憶ははなはだあいまいで、それ以前のたぶん結成準備集会の様子のほうが、脳裡に刻まれている。池島信平（文春）、畑中繁雄（日評）氏ら先達の参加を得、駿河台の雑誌記念館で集会をもった（小田切氏と私で

司会)。五二年三月一五日だった、と思う。というのは、参加者の数人が張込み刑事に不審尋問をうけたからだ。警察は共産党系の3・15記念集会とやらんだらしい。——そんな世相の時代だった。

「編懇」につづいて「経編懇」（経済編集者懇談会）が発足した。労組では講談社らの四社懇（五二年一月）が七社懇になり、出版労懇（のち労連）へ発展した（五三年四月）。懇談会ばかりとなった。今後どんな嵐に見舞われようと挫けない組織づくりのために、徹底した話し合いと一人ひとりの合意・納得を基盤にしようとの考えが、その背景であった。占領下の日本は、国際的に隔絶された存在だった。国内的にも孤立分散していたジャーナリストにとって、国際連帯など夢みたくない話であった。そんな状況だったから、四四年に始まる世界ジャーナリスト集会への代表派遣から日本ジャーナリスト会議結成（五五年）への展開は、それまでの閉ざされた暗鬱の空がいつきよに

輝く青空にひらけたようなインパクトを与え、私たちは胸を高鳴らせた。それから五〇年。かつてのような暴圧による分断はない（その復活への警戒は怠たれないが）。しかし激しい長時間労働や企業間競争、売上げ至上主義等々、さまざま要因によって、ジャー

ナリストの各企業への分断・沈滞状況は深刻である。戦争国家か平和国家か。戦後民主主義最大の岐路に際し、志あるジャーナリストが、ジャンルや企業、さらには国境を越えて連帯の輪をひろげ、強めていきたいと、しみじみ思う。

「汪溪さんを囲む」婦人記者懇談会

—J C J 創立のころ—

板垣まさる
(元共同通信)

中国のお客さんの中に数十人の女性が並ぶ記念写真、懐かしい顔ぶれだ。五〇年前、一九五五年の四月一五日に、創立間もない日本ジャーナリスト会議の女性会員たちが開いた「汪溪さんを囲む婦人記者懇談会」である。

にこやかに写っている汪溪（ワン・ケイ）さんは、この時、中国通商使節団随行者団主席として来日した人民日報国際部の女性記者。ジャーナリス

トの国際連帯、組織統一を願ってスタートしたJ C Jは国際交流に意欲を注ぎ、中でも日中交流には当初から力を入れていた。この記者団についてもJ C Jは歓迎会を先に開いているが、これとは別に同業の女性同士で話したいと、女たちが計画したものだ。手許に残るメモなどの資料によると、会場の産経会館「新東京グリル」に集まったのは総勢九九人。呼びかけは「日本ジャー



汪溪（ワン・ケイ）さんを囲んで（塩沢寿美子さん提供）

ナリスト会議婦人記者有志」とあり、朝毎読三社はじめ日経、産経、共同、RKB毎日、岩波、中央公論、東洋経済、講談社、新女苑などの女性会員達が手分けして受付、会場、接待、写真、

司会、進行、会計の各係を担当。歓迎の辞は前年秋の婦団連訪中団に随行して訪中したばかりの共同通信の山主敏子さんが引き受けた。このほか当時在京の日本婦人記者会メンバーの殆どに呼びかけたようだが、案内状は四日前の日付だから準備期間もあまりなかったのだろう。事務局と協力して準備にあたった私は、とにかく慌ただしく、当日は肝心の内容はそっちのけで、進行にミスがないよう気を使ったことを覚えていいる。

この報告が翌五月一日付の共同支部機関誌「ジャーナリスト」に載っていた。筆者は当時欧米部の塩沢寿美子さん。これによると、席上一同の興味を引いたのは婦人記者の数や男性との比率などを具体的に説明された婦人ジャーナリストの活動についてで、例に挙げた人民日報の場合「婦人記者は全体の三分の一ないし二分の一を占め、また婦人の部長ないし部長級の者はその三分の一から四分の一に達している」という話や、汪さん自身がお子さんを託

児所に預けて来日したが心配ないと聞き、当時二児を持つ共働きの母だった塩沢さんは「女性には全く羨ましい話」と書いている。

事前に用意した質問事項の中に「婦人解放の成った中国にも、なお婦人問題はありますか。ジャーナリズムの上ではどのように取扱っていますか」とあり、塩沢さんも「日本同様封建制度のもとに苦しんだ中国から婦人記者が記者団の団長格で訪れたということは、日本の婦人達や、同業の婦人記者にとっては驚きであるとともに非常に興味深い問題だった」と書く。当時の女性たちの関心の在りかや大きさがよくわかる。これだけ沢山の女性記者達が集まったのは戦後初めてであり、その後もあったかどうか。ちなみに、当時から三〇年程のちまで日本の新聞界で女性記者は一%に満たなかった。

JCJ運動スタートの時点で、職場や年代を超え、力を合わせた女性たちの活動があったことを、感慨深く思い出している。

本物の男女共同参画になるか！

宮崎 絢子

(代表委員／元テレビ東京)

わたしとJ C Jの付き合いは多分もう四〇年ぐらいになるうか。テレビ東京に入社してすぐ、二〇〇人解雇の争議となり、その中でJ C Jを知ってすぐ入会したと記憶している。私に最初

に入会を勧めてくれた江上茂さんは残念ながらもこの世の人ではない。当時新入り会員の私は職場の会員から会費を集めるのが役割で、ノートを持っていつも職場を廻っていた。記憶も定かではないが会員も二〇名近くはいたように思う。

しかし、それから十数年の歳月の間にいつのまにか職場の仲間は居なくなり、支部は消滅、個人の繋がりとなってしまった。そしてその後さらに十数年たって、放送の会員たちと放送部会

を立ち上げ、現在は放送部会の仲間とともに楽しく活動している。

J C Jの問題点は、女性の会員が非常に少ないということである。二一世紀に入ってようやくジャーナリズムの現場に女性が増え、その活躍はめざましいものがあるが、現役の若い女性たちはなかなかJ C Jの活動に参加してくる状況にはなっていない。

一九六〇年代から九〇年代にかけてのずうっと長い間、マスコミの雇用状況をそのまま反映して、ジャーナリズムの現場には女性は少なく、出版部会にはそれでもかなり女性がいたが、新聞放送ともに女性会員はほんのわずかであった。

しかし、増田れい子さんや関千枝子

さん、松井やよりさんや、吉田ルイ子さんなどなど、J C Jの活動を通して素晴らしい女性たちに出会えたことは、本当に幸せだったと思っっている。様々な困難におつかった時、彼女たち先輩の女性の励ましは私にとってどんなに大きな支えであったかは計り知れない。

先輩女性達のJ C J評は厳しかった。亡くなられた松井やよりさんなどは、早くからアジアの女性の問題に取り組んでおられたこともあって、「J C Jは女性の問題にまったく理解がない！」と悲憤慷慨しておられた。関さんもいつも会う度に「J C Jに女性の視点をもっと入れたい、何とかしたい」と話し、私もJ C Jに女性部会を作ろうと一時色々働きかけ女性の準備委員会を作って講演会を開いたこともあったが、それぞれの職場で孤軍奮闘している女性会員には余裕がなく、その後の活動は続かなかった。現在は女性会員もすこしずつ増え、J C Jの運営にも女性会員の力は欠かせないものになっている。



ニューヨークで開かれた世界女性会議のオープニングセレモニーに参加したときの横井久美子さん=右端。その左は宮崎絢子さん(2000年6月5日)

ベアテさん

ニューヨーク滞在中、ベアテ・シロタ・ゴードンさんに

会う機会があった。

彼女は、日本国憲法草案に、男女平等の条文を明記したことでよく知られる女性である。
ニューヨークの日本クラブの会場に、

これからのJ C Jがいかに本物の男女共同参画になるか!

憲法二四条が攻撃されている今、男性にとっても女性にとっても本当に望ましい、お互いの力を十分に發揮し合い、尊重しあい、対等平等に差別のない社会を実現させてゆくか! J C J

の会員一人一人が心して取り組んでほしい課題である。

戦後六〇年、日本国憲法が出来て五八年、ようやく憲法二四条の精神が人々の生活の中に根付き始めた今、いち早く刈り取ろうという動きの危険な深いねらいを、私たちは決して軽んじては

ならないと、今強く思っている。

憲法九条の不戦の誓いは、憲法二四条の両性の平等、憲法一条、一四条の基本的人権によって支えられているのであるから。

横井 久美子 (会員・シンガーソングライター)

白髪にフワリとした赤いロングドレス姿で現れたベアテさんは、とても気さくな雰囲気の方で、流暢な日本語でこれまでの人生を話した。彼女は、一九二三年に、ウィーンに生まれ、五歳の時、山田耕筰の招聘により東京音楽学校に赴任する父とともに来日し、少女時代を東京ですごした。

一九四五年、GHQ民政局のスタッフとして再来日し、二二歳の若さで、憲法草案作成にたずさわった。そして、その後もジャパンスエイティのディレクターとして棟方志功の招聘など、日米の文化交流に尽くしてきた。

「私は、日本の女性が幸せになるには、何が一番大事か考えたのです。明治憲法には一字もなかった女性や児童の権利を新しい憲法には入れたいと考えました」

戦前から日本の女性たちも、男女平等、女性の参政権を

求めて粘り強くたたかってきた。平塚らいてうが「元始、女性は太陽であった」とうたいあげたのは、明治四四（一九一一年）のことだった。だからこそ、ベアテさんも人類普遍の原理として男女平等を、憲法草案に書き入れることができたのだろう。

「現憲法は押し付けられた憲法だと言う人がいますが、逆に、日本がこんなに素晴らしい憲法を持っていることを、

もっとほかの国々に知らせてくださいね」

国内外の先輩たちの熱い願いと勇気に感動し、私は、二世紀へそれを引き継がなければと、胸をいっばいにして、その会場を後にした。

（二〇〇〇年六月二十七日付・東京新聞「本音のコラム」から）

妨害から守った旗揚げ講演会

— 六〇〇年「安保批判の会」 —

土橋 俊雄

（新聞OB会代表委員／元読売・新聞監査委員）

私は生え抜きの会員だが、これといっ

た活動はしてこなかった。ただ、たまに一九五九年から六〇〇年にかけて新聞労連の委員長をしていた時期、あの歴史的な六〇〇年安保闘争に正面から取り組んだ折に、その立場からJ C J活動に関わったことがある。

『日本ジャーナリスト会議の40年（上）』にもあるように、J C Jは六〇

年安保闘争時に、学者・文化人らの

「安保批判の会」の生みの親となって、その運動を進めた。また、安保闘争やマ場の六〇〇年五月・六月段階では『ジャーナリスト』号外——「安保特集・臨時号」を計二〇回、延べ二二万部も発行して、国会を取り巻く大衆行動を大いに励ました。私はこれらの運動に、大いに関わったのである。

その頃新聞労連の書記局は東京・京

橋の田口ビル四階にあった。奥の一室をJ C J事務局に提供していたが、そこが「安保批判の会」の連絡事務所にもなった。会議室は共用だったから互いにツーカーの状態で、機動力のある労連が、しばしばJ C Jの手足となって動くようないでもあった。



「安保批判の会」の旗揚げ講演会（一九五九年一月二六日、神田共立講堂）を、右翼の妨害から守って成功させた時、私は集会警備の総責任者を務めた。支援要員は総数一〇五人で、新聞労連の二五人をはじめ出版労協、全印総連、日放労、社会党、共産党、



「ジャーナリスト」号外4号1面 (1960・5・19)

平和共闘、東京地評、日中友好協会などから駆けつけて配置についた。警察が傍観する中、防共挺身隊の右翼二十数人が入口正面のスクラムに殴り込んできたが、ハネ返した。この時私は、右顔面に全治二週間の打撲傷を受けた。告訴したが、神田警察は動かなかった。

旗揚げ講演会は一三〇〇人を集めて見事に成功した。この日、新安保体制の危険性を訴えたのは石川達三、亀井勝一郎、堀田善衛、滝沢修、深尾須磨子、田中寿美子、西川景文氏ら一〇人の著名人であった。

年が明けて六〇年、「安保批判の会」を中心とする、安保批准反対請願大会（一九六〇年四月四日、日比谷公会堂、二〇〇〇人参加）の時も、私は集会の整理と警備、デモの誘導等の責任者を務めた。この時は吉野源三郎、石川達三、千田是也、加藤周一氏ら識者一四人が訴えた。私は「静かなデモ」といわれた請願行動のやり方や注意事項、歩くコースなどを説明した。

結びの大会宣言は劇団民藝の宇野重吉が読み上げた。私は東大の日高六郎教授と共に請願デモの先頭を歩いて参加者を国会へ誘導した。情勢逼迫の五月、私は「ジャーナリスト」安保号外のかんりの号の整理編集に携わった。整理記者と労連の機関紙

部長を経験していた私は、労連・地連の号外やチラシを作るかたわら、JC J号外の編集も手伝った。労連の福本熙書記局員も一緒だった。一体、幾晩徹夜したことか。ある時はあかつき印刷に飛び、ある時は機関紙印刷所に走った。酒も結構飲んで、馬力をつけてやった。

〈注〉以上の詳細については、新聞OB会の合同文集『オレンジの旗』第二集——一九九四年刊——の「続・六〇年安保のころ」に書いた。



1965年1月25日 (1) ジャーナリスト (第93号) 1965年1月25日 第93号 JAPAN CONGRESS OF JOURNALISTS 日本ジャーナリスト会議 1965年1月25日

ジャーナリスト THE JOURNALIST

第2回アジアジャーナリスト会議を成功させよう

「高杉発言」問題に関する声明

「高杉発言」問題に関する声明は、本会議の重要な議題の一つとして、本会議の決議を経て、本会議の機関紙「ジャーナリスト」に掲載された。本会議は、この問題について、以下の通り意見を述べた。

「高杉発言」は、本会議の決議と一致しないものであり、本会議の機関紙に掲載されるべきではない。本会議は、この問題について、以下の通り意見を述べた。

「高杉発言」は、本会議の決議と一致しないものであり、本会議の機関紙に掲載されるべきではない。本会議は、この問題について、以下の通り意見を述べた。

百万円募金を目標に 本部長大幹事会行動方針を決定

本部長大幹事会行動方針を決定し、百万円募金を目標とする。本会議は、この問題について、以下の通り意見を述べた。

「高杉発言」は、本会議の決議と一致しないものであり、本会議の機関紙に掲載されるべきではない。本会議は、この問題について、以下の通り意見を述べた。

一九六五・一・二五「ジャーナリスト」

「高杉発言」決定版伝えた機関紙

吉岡 吉典
(元赤旗支部・参院議員)

ジャーナリスト会議とかなり深くかわりあったときがあった。ベトナム、日韓のたたかいが広がっているところだった。「赤旗」では、「一般新聞との切磋琢磨」ということが重視されていたので、ジャーナリスト会議は、そのためのよき圃場であった。

私は、そのころ日本と朝鮮との関係史に取り組んでいたが、その点でもいろいろと教えられることが多かった。だからよく事務所に入出しし、とくに機関紙「ジャーナリスト」にかかわり、原稿も書いた。そのころの機関紙は、権威を持っていたと思う。新聞の記事に著名な学者から問い合わせがくることがあったからである。

この機会にあらためて明らかにして

おきたいことがある。一九六五年一月七日、日韓会谈首席代表に就任した高杉晋一氏が外務省記者クラブとの会見で行なった、日本による朝鮮植民地支配を「我が国はいいことをした」と美化肯定する発言に関してである。この発言は、あわてた外務省が、オフレコにしたため、一般新聞では報道されず、「赤旗」の報道で明かるみにでた。

「高杉発言」は当時、政治外交上、また新聞のあり方をめぐって論議の対象になったものである。ジャーナリスト会議でも論議になったが、まず「高杉発言」の決定版を作り、発表しようということになった。その決定版が、一九六五年一月二五日付ジャーナリスト会議機関紙「ジャーナリスト」に掲

載されている。この発言内容は、当時の事務局長が苦勞しながら、十分な客観性を持つものにするため、可能なあらゆる方策を講じてまとめたもので、テープを起こしたものに近い、完璧なものとは私は思っている。今でも「高杉発言」について尋ねられると、私はこの機関紙「ジャーナリスト」を紹介することになっている。

そのころを思い起こすと、社を超えてよく論議しあい、小規模の勉強会も開いて学びあったものだ。単なる情報交換でなく、分析しあったことが懐かしい。私にとって、何人かで議論しあひ、勉強しあったことはたいへんありがたかった。

私がかかわったことをもうひとつ紹介しておこう。

平城で一九六九年九月に開かれた「反帝ジャーナリスト世界大会」にジャーナリスト会議の代表の一人として、鈴木四郎議長、朝日支部代表とともに参加したことがある。金日成主席が演説し—金日成礼賛の発言が次々飛び出

すという会議でびっくりした。実は日本代表団にも、引用のための金日成発言録（もちろん日本語訳）が届けられた。各国代表はそれによって発言したのだろう。それを強く求められたという代表もいた。私らは三人で協議し、「会場が平城というだけで、会議の中

身は、朝鮮とも金日成とも関係ないからそんなことはしない」ことにして、金日成には一言も触れない団長発言をすることにした。当たり前のことではあるがその会議では、むしろ特異の発言だったと思う。思い出は尽きない。

昔、AAJA（アジア・アフリカジャーナリスト協会日本協議会）があつた

隅井 孝雄

（代表委員／元日本テレビ）

* 取り上げられないアフリカのニュース

圧政、内戦、大量虐殺、飢餓、エイズ：果てしない苦しみが続くアフリカ大陸を救おうとの国際世論が改めて広がりはじめた。最近のサミットではイギリスのブレアー首相が支援の拡大を訴えた。アメリカではルワンダの大虐殺を伴った内戦をテーマにした「ホテル・

ルアンダ」という映画が話題となつているが、日本では上映すらされないというのでインターネットで署名運動が始まっている。主演俳優ドン・チードルが、今なお内戦の渦の中にあるルワンダの子供たちの悲惨な状況をアメリカABCテレビのニュースで伝えるのを最近見て、いてもたってもいられぬ思いだった。日本では国連親善大使の黒柳徹子が時々テレビでレポートする

以外、アフリカがニュースで取り上げられることがほとんどない。

* A A J A の高揚とあっけない瓦解

私はアフリカのニュースに接するたびに一九六六年前後のジャーナリスト会議が苦い思い出として蘇る。

その頃の J C J の事務所は京橋から通り一つ入った田口ビルに新聞労連と同居していた。私はジャーナリスト会議の会員ではなかったが、J C J の会議室で開かれる「A A ジャーナリスト協会日本協議会」(A A J A) の会合に民放労連代表として時々出席していた。労連の役員になりたての頃のことである。A A J A は一九六三年四月インドネシアのジャカルタで開かれたアジア・アフリカジャーナリスト会議に日本の代表を送ることがきっかけになって結成されたもので、J C J、新聞労連、出版労協、日放労、民放労連、映画共闘、機関紙協会の七団体が参加していた。

今では歴史の中にすっかり埋もれた

存在である非同盟の流れは、ネール、ナセル、スカルノ、周恩来らが手を結んで冷戦構造に対抗する新興勢力として、一九五〇年代歴史の舞台に登場した。A A J A はその延長線上で構想されたものだと思う。インドネシア、スカルノ大統領の主催、中国周恩来首相の強力なバックアップを受けて一九六三年四月ジャカルタで華々しく開催されたアジア・アフリカ・ジャーナリスト会議は A A 四ヶ国から一七〇人が参加した。次々に独立を達成しつつあるアフリカ諸国からも多くのジャーナリストが参加したことは言うまでもない。中には独立戦争の戦場から駆けつけた記者もいたと伝えられている。ベトナム戦争拡大などアジアでは厳しい国際情勢の中であつたが、アフリカにとっては希望に輝く時代でもあつただろう。日本からは共同通信の齋藤茂男さんら一三人が代表団を組んで参加したと記録に残っている。

しかしその三年後一九六六年インドネシアでクーデターによりスカルノが

失脚、アルジェで開かれるはずだった第三回アジア・アフリカ・ジャーナリスト会議は陽の目を見ることなく、新しい流れを生むかと思えた運動は瓦解した。

* J C J にも持ち込まれた混乱

日本では極めて不幸なことに A A J A を舞台に思想上の葛藤が起きた。実態のなくなった A A J A を、毛沢東が自らの文革に対する国際的支持を広げるため活用しようとしたのだと、今になって思う。A A J A の事実上の主体である J C J は、A A J A という枠で中国との交流を進めたが、一九六六年はそれも中止になった。そのことをめぐって A A J A の会議で延々と続いた議論に私は体のすくむ思いがしたこと今でも忘れない。

幻の訪中団の名簿には私の名前もあつたのだが、今思えば歴史の現場にたち会えなかったことは残念の極みである。文革を礼賛しない修正主義者は受け入れられないという電報が入ったという話を

聞いた。アルジェでアフリカのジャーナリストと交流する夢も絶たれた。その後J C Jは当時の小林雄一議長が辞任するという異常事態が生じたことは四〇年記念『ジャーナリスト運動の軌跡』に詳しい。

* アフリカのジャーナリストとの絆

あれから三九年、今では中国、インドネシア、ベトナム、カンボジアなど自由に行き来できるし、自由に取材できる。しかし日本のジャーナリズムに

とってアフリカは未だに遠い国、遠い場所である。その遠い場所で市民が抑

圧され、貧困と飢餓にあえぎ、少年が戦闘に狩りだされ、そして言論の自由が失われている。改めてアフリカに日本のジャーナリズムの関心呼び覚ます必要があるように思う。

アジアとアフリカのジャーナリストの絆を深めるという課題を復活させ、アフリカへの日本の市民の関心を広げることが出来ない相談なのか、いまさらのように思うのだ。

一〇枚のハガキ

坂巻 克巳

(出版部会／岩波書店)

一九六六年の春、大学生になったばかりの私は、ひよんなことから「ジャーナリズム研究会」という、六、七人からなるサークルに入った。もっとも、そこで行なわれていたのは「ジャーナ

リズム」の「研究」などでは全くない。そのころ激化し始めていたベトナム戦争、そして日米安保などについて『世界』掲載論文などをもとに学び、議論する、といったことだった。「ベ平連」

の署名活動に協力したり、大学祭に岡村昭彦氏、むのたけじ氏を呼んで講演会を主催したりもした。

このサークルではJ C Jの機関紙「ジャーナリスト」を定期購読しており、私も目を通していたから、その案内に載る催しには、何度か足を運んだ。そんな中で、今でも忘れがたい場面があるのだ。

それは、たしか一九六九年の「現代ジャーナリズム講座」(J C J主催)だったように思う。その少し前に『ニュースコープ』の田英夫キャスターの降板に続くようにして、同じTBSテレビの『婦人ニュース』が打ち切られていたのだが、そのアナウンサー来栖琴子さんが講師として発言したのだった。

私は、当時、政府の圧力でつぶされたと言われたこの『婦人ニュース』、特にそのベトナム報道などに注目していたので、打ち切りの経緯を少しでも知りたいと思ったのである。

その席で、来栖さんは、ちょっと悔しそうに、こう言われた。「あの時、

たった一〇枚でもハガキが来ていたら、つぶされなかったかもしれない」。エッ? と、私は、思わず耳を疑った。わずか一〇人の視聴者から「やめないうで」という声がテレビ局に届くことで、あの番組を守ることができたのか……。

もちろん、当時の田中角栄、橋本登美三郎氏らによるTBS幹部への「偏向」攻撃がすさまじいものであり、実際、TBSではテレビ報道部解体と大量人事異動が進められた事実を後に知ってみれば、それほど「甘い」状況ではなかったのかもしれない。そして、あれから四〇年近くたった今日では、パワーとなりうるハガキの枚数も、ずっと増しているの見るべきだろう。だが、にもかかわらず、私には、あの来栖さんの、おそらく現場の当事者としての経験と実感に裏打ちされた「一〇枚のハガキ」という問題指摘が、いまだに気になるのだ。

ほかでもない、つい最近の「ジャーナリスト」(二〇〇五年四月二十五日号)の一面に、こういう記事が載っている。

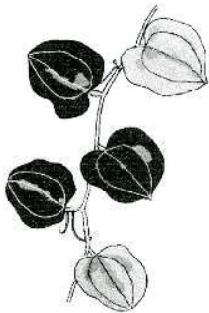
四月二日、JCJとMIC(日本マスコミ文化情報労組会議)が主催した「憲法メディアフォーラム」開設記念シンポジウムで、一般参加の女性が会場から質問したという。「こういう集まりではいつも『市民と一体となって』と言われるが、いつも帰りに思うのです。では、何をすればいいの」。

まさにこれは、古くて新しい問題なのだ。もちろん、各地で市民とジャーナリストが交流・議論する場を頻繁にもつのも大事だろう。だが同時に、視聴者・読者としての一般市民に向けて、——批判・抗議の類だけでなく——共感・賞賛・激励、さらには具体的な提案といったポジティブな「声」を、もっともメディアの現場に投げかけることを呼びかけるべきではないか。長く続いた番組や長期連載記事にかかわるような場合だけではない。むしろ、普段の個々の番組や記事に対し、もう少し日常的に「応援歌」が歌われてしかるべきではないか。

その際、電話・ファックス・手紙・

メールなど、多様な伝達手段をどう使い分けるのが効果的か。番組制作者や記事執筆者の胸に届き、明日からの仕事の糧になる「声」の条件とは何か——。メディアの「送り手」は、それぞれの過去の経験を踏まえ、「受け手」に向けて、もっと語りかけるべきではないだろうか。私には、それがこの国のメディアをもっと「良く」していく上で、——あるいは厳しい言い方をすれば、これ以上「悪く」しない上で——案外大事なポイントのように思えてならない。

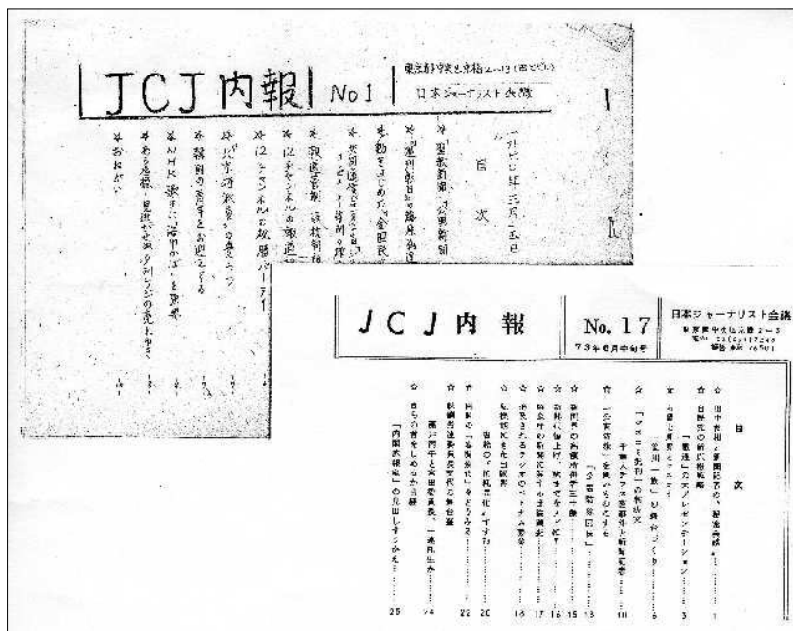
これまで、三十数年、雑誌と書籍の世界で「ジャーナリズム」関連企画をいくつか手がけてくる中で、ずっと頭から離れない問題のひとつは、そのこと、すなわち「一〇枚のハガキ」問題なのである。



確実な情報源——「J C J 内報」

奥田 史郎

(元中央公論)



J C J 内報

「J C J 内報」の第1号発行日は一九七〇年三月一五日で、B5判を横開きにホチキス綴じた形式である。その当時、J C J の事務所は中央区京橋二―一三「田口ビル」の三階にあつて、新聞労連の広い事務所脇に同居した形だった。私の勤務先（中央公論社）ビルの裏口から、下町特有の家と家のすさまの、人がようやくすれ違える程度の露地を二本抜けると、田口ビルのあの通りに出るといふ距離にあつた。

それで、当時の事務局長・三上さんから何かと呼び出される機会があつた。事務所には事務局員の木谷さんもいた。労連事務所に来た折にJ C J に顔を出す新聞関係の会員たちに紹介されることもふえた。そんな顔ぶれで何度か話

し合ううちに、内報がスタートしたのだった。メンバーは固定したものはなかった。実際に、のちに地方支部からの発信記事も載っている。

第1号の内容を紹介すると、☆「聖教新聞」「公明新聞」印刷の新聞社／☆『週刊朝日』の藤原弘達極秘テープ特種のウラ／☆動きはじめた「全国民背番号システム」／☆共同通信社では一月二十七日「システム推進会議」が発足：コンピュータ体制の確立にピッチをあげる／☆報道管制・取材制限の危険／☆12チャンネルの報道規制／☆12チャンネルの祝勝パーティー／☆「北京特派員」の憂うつ／☆韓国の青年をお迎えする／☆NHK 歌手に「海ゆかば」を強要／☆ある座標：見逃せぬ夕刊フジの売れゆき という具合だが、第1号が表紙（内容目次つき）と末尾の「おねがい」を入れても一枚というガリ版刷りである。だが、号を重ねるにしたがい、すぐにポリエームは創刊号の二倍、三倍になった。

それぞれは短くても、政財界・メデイ

アをめぐる裏話やデータ、そして別々に起こっているが見逃せぬ傾向や風潮への指摘などもある。内容は「だろう記事」ではなく確実な情報で、扱う人物もすべて実名である。J C Jの声明が載っている時もある。事務局では「J C J内報によれば」とつけて会員たちが記事を書く場合にいろんなところに利用されることを期待していた。実際に、そのような形で、情報源として転載・引用される機会や回数もけっこうあった。

七〇年内に第7号まで出し、七一年一月八日発行の第8号以降はタイプ印刷になった。その間に、大阪で万博開催、「よど号」乗っ取り事件、中国の人工衛星打ち上げ、韓国で詩人・金芝河の逮捕、公明党・創価学会の言論・出版妨害事件、七〇年安保反対闘争、歩行者天国開始、チリでアジェンデ大統領選出、三島事件などがあり、各地で公害が問題化していた。

いま私の手元にある内報のバックナンバーは、七五年二月発行、第20号ま

である。毎回ではなかったが、企画会議にも何度か参加したし材料もそれなりに提供したと思っているのに、いまパラパラめくってみると、私が書いたと確信できる記事は数えるほどしかない。やはり、月刊雑誌編集の仕事（とその合間）ではそんな第一級の内幕話やとっておきのデータが手に入るということではなかったのだろう。結局、私にとって「J C J内報」に関わった時期は、情報の真相や深層を教わり、情報の読み方や分析の仕方をさらに深く学ぶ絶好の機会となった。そして、新聞・放送・広告など、出版界以外の多くのジャーナリストとの人脈を構築するという何より貴重な体験をした。

最後に、第20号（七五年二月発行）の内容目次を紹介しておこう。

☆大手紙の地方進出と「部数競争」
 ……情報の中央コントロール体制強まる
 ☆新聞・電通社長の年頭語録／☆有力紙の新年部数、朝日七百万部をこえる 毎日とサンケイは減紙／☆日刊紙は四千万部を突破 新聞協会調査 新

聞の総発行部数と普及度／☆警察官僚と広告代理店の人脈：謀略と心理作戦でなにを狙うのか／☆「ニュースのエア・ポケット」：モロタイ島で発見された台湾兵・中村輝夫（スニーユーウ）のこと／☆同盟の第二新聞労連結成のうごき／☆組合分裂のための「局長賞」など廃止させる：福井新聞の場合／☆退潮傾向いよいよ進む大部数（マス）雑誌：婦人読者に地すべり現象？／☆自民党、ことしの広報活動方針（全文）／〈資料〉日本のミリタリーバランス／〈資料〉東京都同和事業の執行状況

情報量がますます増え、しかも確実さがさらに必要とされつつある今、それぞれの会員が「知り得た情報」を相互に利用できる「確実な情報源」とし、〈共通の知識〉として効率的に活かした経験から学べることは多いと思われる。

山田太一

○第二部 午後三時二〇分 再開
問題提起

「日本・現在の状況」加藤周一

○第三部 シンポジウム

「マスコミはこれでいいのか」

神島二郎 筑紫哲也 暉峻淑子 中野

孝次 斎藤茂男(司会)

〈午後六時 閉会〉

(会員券一〇〇〇円)

当日の東京は梅雨入りであいにくの雨。会場入り口では、雨傘を入れるためのビニール袋の準備もした。開会の午後一時前には、受付には行列ができてるほどで四二〇の客席は満席で、あふれた人の立ち見や通路に座る人も出るほどの盛況。女性や若者の姿が目立ったのもこれまでのJ C Jの集会にはなかった光景だった(参加者延べ五五〇人)。

成功の要因は、二ヶ月間の作業日程を機関紙に発表して、準備活動に多くの会員が参加したこと。作成したチラシは三千枚、チケット千枚、集会参加

者に配布するパンフレットも五百部作成したが、品切れとなった。

時、あたかも、前日の六月七日、中

曾根政権の自民党は国会に「スパイ防止法案」(罰則に死刑を含む)を提出、この集いを緊迫あるものとした。会場から発言を求められた秦正流さん(朝日新聞・元専務)が「スパイ防止法案は、言論・報道の弾圧立法であること

が明白であり、身体を張っても阻止する」と壇上から強く訴えた姿が忘れられない。

J C Jは、六月一九日、「国家機密法阻止の訴え」を発表、会員たちが市民集会の講師などに参加。秦さんは、八六年のJ C J規約改正で代表委員に就任。九四年に亡くなるまで、新生J C Jの牽引車の役割を果たされた。

六月集会のはたした役割

山崎 晶春

(出版部会/元小学館)

初の六月集会は戦後四〇年、J C J創立三〇周年の記念行事として一九八五年六月八日に日仏会館で行なわれたが、それは単なる記念行事としての位置づけではなく、J C Jの組織再生を賭けた、会員総がかりで討論を重ねてつくりあげた集会だった。

七〇年代後半から八〇年代当初のJ

C Jの運動は職能組織らしい活動がでさず停滞していた。八二年に事務局長が岩切信さんに替わり、ようやくJ C Jをどう立て直していくのか具体的な話し合いがはじまっていった。

「J C Jを再生させる運動に出版の人たちの力を」と荒川恒行さんに言われて、出版の仲間たちと企業単位では

ない出版支部（九三年から出版部会に改称）を結成したのが八二年七月である。本部の評議員会に参加した初めの頃、まず他の支部がどんな活動をしているのか聞きたかったが、それぞれの支部の実態についてあまり具体的な話は聞けず、むしろ抽象的な話に終わっていた。運動の活性化、組織の再生が議題の中心にあったが、その核心への討論にはなかなかいかなかった。本音を出し合える議論にしようと岩切事務局長は苦勞されていた。

それに反して出版支部の月一回の世話人会は生き生きとしていた。闊達な討論でそれぞれの企業職場の状況や出版界の動向、政治情勢などの意見が交わされ、役立つ楽しい世話会になっていた。例会も充実し、会員も増えていた。世話人一人一人が活動の足場をもっており、支部方針を豊かにするよう考えた活動をしていた。企業内でない組織方針の違いがあったと思う。

八二年に「戦後政治の総決算」を掲げて登場した中曽根政権は「日本を米

国の不沈空母にする」と日米軍事同盟を強化するとともに、憲法改正をもすすめようとしていた。こうした右傾化の流れに対して危機として鋭敏に受け止めている人たちはそれほど多くはなかった。

八三年秋の出版支部の例会で作家の中野孝次さんが、「欧州では大きな反核運動がもり上がりつつあるのに、日本ではそうならないのは、経済的繁栄にどっぷりと浸って、「平和」に狎れ親しんでいるからではないか。この光景は出版界にも見られる。「平和に狎れ親しんだ人々」に媚びる本ばかりを量産することに血道をあげているのではないか」と問題を投げかけている。「目減りはしても、日々の生活を保障してくれる企業に寄食して、いまだに中流意識を持ち、酒を飲み、テレビで野球を見るのに満足しているサラリーマン」これが八〇年代の庶民の実態だったと思う。

八四年六月の評議員会で、次期議長選出をめぐる議論のなかで、議長候補

とされていた評議員の斎藤茂男さんの発言が一気に討論の状況を変えた。

「議長を誰にするかという議論だけで今の職能組織であるJ C Jの危機は打開できない。再生への道をきり拓く上で私たち一人一人が何をなすべきなのか、まずJ C Jの組織と運動の総点検が必要」と問題提起された。

それを受け止めて、一〇月の臨時総会で「J C Jを今後どうするか」の話し合いになっていく。「J C Jはこれでよいのか」から「今、何をなすべきか」へ深められていった。マスコミの現状や政治の右傾化の深まり、こうした情勢の下でどのような運動で活路を切り開くか、職能組織としての位置づけについても明確にされていった。現実社会の状況、職場の実態に目を向け、どういふ運動が必要なのか掘り下げた議論になった。

当時私は小学館に勤めており、大型シリーズの編集長をしていたので猛烈に忙しかったが、その頃の文化的状況、思想的状況を広い視野から見つめなお

すよい機会だった。

この議論の到達点として、「いま、時代を見ずえる」六月集会所が位置づけられ、新たな運動のスタートを切ることになった。今、どういう時代に生きているかを掴み、現代社会の「状況」を考え、メディアのあり方を問い直す集会所にすることが共通の認識になった。

この記念事業の企画のために、岩切事務局長、齋藤茂男さんを中心に絵がかりの体制がつけられた。企画推進のプロデューサー集団が作られ、私もその一員として加わった。

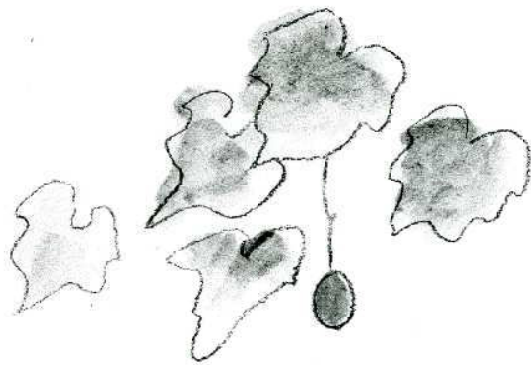
この八五年の『いま、時代を見ずえる』管理社会の文化・人間状況を総点検!』は三部構成で行なわれた。第一部は「一九三〇年代と今日」(千田是也、松本克平氏)、第二部「日本・現在の状況」(問題提起 加藤周一氏)、第三部 シンポジウム「マスコミはこれでいいのか」(神島二郎、筑紫哲也、暉峻淑子、中野孝次氏)であった。間に落語とシャンソンが入り、発言者も六名ほど用意された。開会午後一時、

終了は六時、会場を埋めた五五〇人を超える参加者は現代日本の言論・思想・文化の危機を鋭く問う問題提起や白熱した討論に引き込まれ、中途退席するものはほとんどいなかった。JCJ再生への出発にふさわしい集会所だった。

この集会所の成功を土台に「国家秘密法阻止」の訴えを発表し八六年三月に「出版人の会」、秋には「言論人の会」が結成され、その闘いを開始した。組織的には旧規約を改正し、議長、評議員制を替えて現在の代表委員、運営委員制になった。秦正流さんを代表委員に迎えて五名の代表委員構成になり、体制も整った。この年に企画委員会が置かれ、一二月集会所も位置づけた。代表委員の齋藤茂男さんを中心に企画委員八〇数名の委員会は毎月行なわれ、六月、一二月集会所のテーマを中心に検討してきた八八年の天皇問題の集会所や九四年の読売新聞憲法改正第一次試案を糾弾する「発言によるデモ」の集会所、セミナーも行なってきた。

市民との連帯も広がり、研究者、文

化人との関係も非常に深まった。私は九六年まで企画委員会を担当してきたが、この委員会は人と人とを結び、職能人としてお互いに問題意識を磨き、歴史認識を深めあう貴重な場であったと思っている。JCJの六月集会所の役割は実に大きい。



『志』だよ！J C J

太田 武男

(広島支部／中国新聞OB)

* 熱く「ヒロシマと憲法」

一九八二年以来七年間も休眠状態だったJ C J広島支部。一九八九年の夏、再建を目指し数人で準備会を発足させて「8・15不戦の夕べ」の再開を企画した。当時『世界』の編集長だった安江さんに「ヒロシマと憲法」の演題で基調講演をお願いした。安江さんに来ていただく以上は…と張り切って二五〇人近く座れる平和資料館ホールを会場に設定した。今から考えると「よくもこんな大きな会場を…」と冷笑されそうだが、会場にも「原点」の志をこたわった。

案の定、約半分が埋まる一〇〇人強だった。それでも安江さんは、大江健

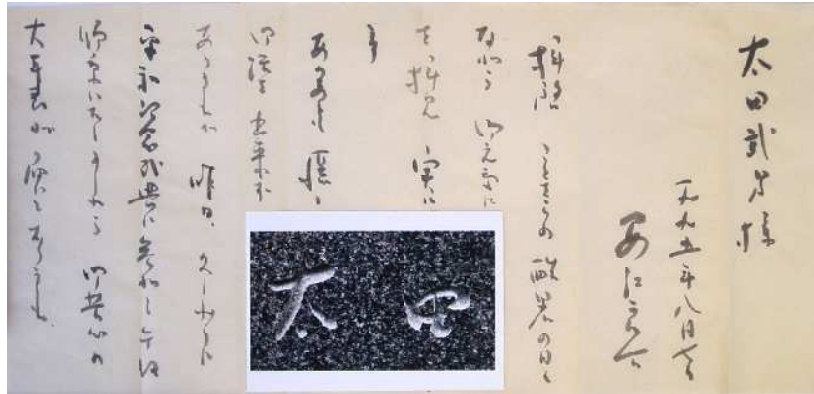
三郎さんと二人で手がけた「ヒロシマ・ノート」の取材エピソードを交えて二時間近くも「平和憲法の原点・ヒロシマ」を語って下さった。安江さんを開んでの懇親会で、期せずして女性から「J C Jを再建しましょう」と声が発せられ、私は背中をポンポンと叩かれた。「よし、いける」と確信になった。

二万円ほどだったろうか、「失礼ですけど…」と差し出した謝礼を「これは支部再建に使って下さい。私には会社の給料があるんですから…」と返された。きっぱりしたお言葉にJ C Jへの熱い思いを感じた。

翌九〇年六月、支部は、会員五〇人以上で再建できた。B5判二ページのワープロニュース「通信」(後に「ひろしま通信」に改名)を自前で出し始めてからちょうど一年後のことだった。

* 毛筆の宛名は表札に

支部活動も軌道に乗り被爆五〇周年を迎えた九五年、新聞社で出版部長を



安江良介さんの手紙と我が家の表札

していた私は、『年表ヒロシマ』へ注
 発刊を企画した。出版界にずぶの素人
 ここでも安江さんをはじめ岩波書店の
 皆さんに企画段階から編集・営業の両
 面で援助を頂いた。ノーベル文学賞を
 受賞した大江健三郎さんから『推薦の
 言葉』を頂いた。どれほどの部数が売
 れるものか悩んでいた私に、安江社長
 から「三〇〇〇部は大丈夫」の示唆も
 頂いた。五〇〇〇部発行して二〇〇〇
 部が売れ残った。

しかし、嬉しかったのは、「太田さ
 ん、この仕事ができるのはあなたの社
 社しかない。いいお仕事です」と励まし
 の言葉を頂いたことだ。JCJでの繋

がりが必要な形で仕事にまで…、ジャー
 ナリストの「志」で結ばれたJCJが、
 自分の中でこれほど輝いたときはなかつ
 た。
 発刊後に安江さんから祝いの言葉を
 添えた長いお手紙を頂いた。お手製の
 巻き紙に書かれた毛筆の宛名「太田」
 の二文字を、わが家の表札に刻印した。
 いまも私の「日々の支え」になってい
 る

〈注〉被爆五〇年の中国新聞記念事業。本体
 B5判一九四六号、別に事項二八〇〇件
 人名六四〇〇人の別冊索引つき、ケース
 入り定価三万円。中国新聞社一九九五年
 刊。

石原都知事の退任を求める

茶本 繁正

(代表委員)

「田中均という奴、今度爆弾しかけ
 られて、あつたり前の話だ」

翌日、この暴言を謝ると思いきや、
 開き直った。

「良識ある国民の不满、怒りだ。そ
 れが異様な形で表れたのは、あつては
 ならないことだろうが、今までの外務
 省の言動をみれば、ありえてむべなる
 かなだ」

前言は九月一〇日の街頭演説、翌日
 のは前言に関する記者会見での発言で
 ある。テロを認めないと言うが、テロ
 の必然性を肯定する事実上のテロ容認
 である。

改めて言うまでもなく、発言者は石
 原慎太郎東京都知事、やり玉に挙げら
 れているのは、日朝首脳会談の陰の推
 進役だった田中外務審議官。自宅敷地
 内に「国賊征伐隊」を名乗る者に時限
 発火装置を仕掛けられていた（九月一
 〇日）。石原発言はそのことについて、
 自分の所感をのべたものだった。

石原氏は政治家であると同時に作家
 である。テロがこの日本の政治、経済
 社会、文化のなかで、どのような弊害
 と惨事をもたらしてきたか知らない
 ずはあるまい。

戦前、テロは頻発した。



有事法制反対で熱弁をふるう茶本氏

首相浜口雄幸（昭和五年）、前蔵相井上準之助（昭和七年）、三井合名理事長団琢磨（同）首相犬養毅（同、五一五事件）、さらにクーデターではあるが、テロルを伴った二・二六事件（昭和十一年、内大臣齋藤実、蔵相高橋是清、陸軍教育總監渡辺錠太郎ほか）など。

そのテロルのはてに浮上したのがファッシズムと軍部独裁体制だった。

ジャーナリズムには徹底した言論統制が敷かれ、新聞は統廃合され、良心的出版社は潰されようとした。編集者が拷問され、殺害された、あの「横浜

事件」も発生した。

マスコミが片棒を担がされた戦争によって、国内外にいかにおびたらしい血が流されたか、これまた石原氏が知らないはずはなからう。アジア諸国にはいまなお深い傷痕を残したままである。

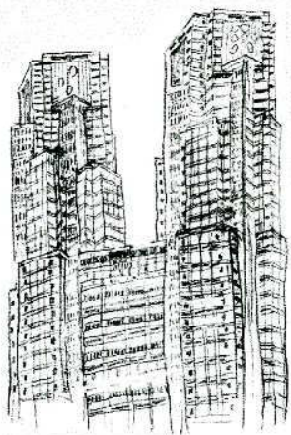
石原氏は八月の記者会見で、二・二六事件の青年将校たちが好んだという「昭和維新の歌」を披露、昨日の会見では、かつて社会党委員長を暗殺した少年の名を親しげに口にした（「朝日」九・一三付社説）という。

石原氏はどのような神経と歴史認識を持ち合わせているのか。度し難いというは、このことを言うのではないか。知事としての資格はもろろん、資質そのものを疑わざるを得ない。この国では、テロは戦後も続いている。ジャーナリズムの中でも、中央公論社の嶋中事件、朝日新聞社阪神支局襲撃事件など、いずれも死傷者を生じている。しかし、テロによってジャーナリズム総体が、後ずさりはしていない。ジャー

ナリストの使命感と勇気をみることができる。

私はJCJ代表委員としてではなく、一人のジャーナリストとして、一人の人間として、もっと言えば、かつて誤れる戦争に参加した年少の特攻隊員として、石原氏の知事退任を求めてやまない。

（「ジャーナリスト」二〇〇三年一〇月二五日付から）



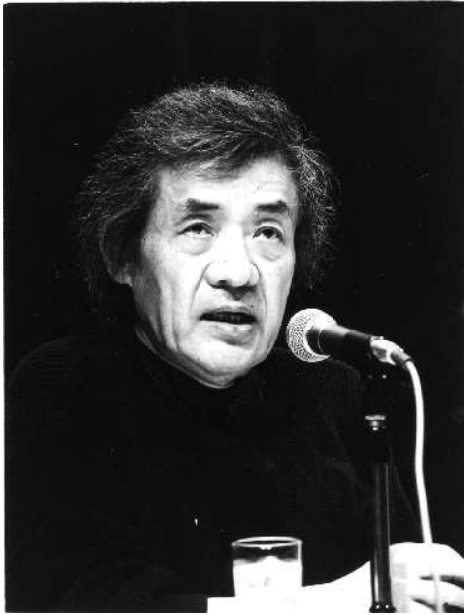
ジャーナリストとはなにか

齋藤 茂男（元代表委員・故人）

上海での一夜、越劇を見物した。

出し物は『天山雪蓮』といい、新疆省に伝わる恋と政治葛藤の物語である。役者は全部女優である。さしずめ“中国風宝塚”といったところであろうか。

三時間を超す熱演が終わって幕がおりると、一階席にいた娘や若い男までがドツとかぶりつきに押し寄せて、ワァーワァー大変な騒ぎとなる。幕をあげたりおろしたり。人気歌手の足に噛りつく日本の女の子ほど気がいじみではないが、“禁欲的な人たち”だと思っていた中国人の、別の面を垣間見たようだった。越劇はそれほど大衆的人気が



齋藤茂男氏

ある。

「解放前には蒋介石が進歩的な新劇を弾圧していたので、新劇俳優や演劇工作者たちは、この大衆的な越劇にもぐり込んだものでした。越劇をいろんな側面から支援し、そのなかで革命への任務を果たしました。このような文化戦線でのたたかいをさらに側面で援助し、共同闘争をしたのが当時のジャーナリストたちだったのです。ですから、そのころの恋が実を結んで、女優さんを奥さんに行っているジャーナリストがたくさんいますよ」

案内役の王維氏（解放日報編集長）の話である。

かつて英国のサッスン財閥が経営していたホテル「和平飯店」の一室で、『文汇报』総編集の陳慶孫氏は、抗日戦争に勝利した一九四五年解放（四九年）までの期間に、蒋介石の掌握下にあった上海の新聞界で、進歩的な新聞工作者がどのように闘ったかを話した。

「私たちがいちばん大切に思ったのは、新聞記者が直接大衆運動に参加するということでした。記者は運動の外に立って眺めていてはダメです。自分自身をその渦の中に投げ込み、渦に巻き込まれてしまうことが必要です。そうした行動を通じて、記者は闘争を恐れなくなり自分を高めることとなります。そうやってはじめて大衆が新聞の後ろだ

てになってくれるのです。蒋介石といえども、広範な大衆の支持を持つ新聞には、そう簡単に圧力を加えるわけにはいきませんでした」

南ベトナム民族解放戦線から来た代表団長N・T・ビン女史は、南ベトナム愛国民主ジャーナリスト協会に属するジャーナリストだ。小柄であり丈夫でなごそうな体つきの、中年の婦人である。帝国主義と最前線で闘う南ベトナムから、戦火をかくぐってかけ寄ってきた鳩——といった感じの彼女がある日こういった。

「私は（母国で）政治ゲリラをやっているんです」
聞けば、ゴ・ジンジエム政権に捕らえられて収容所に入っていたこともあるという。

私たちは、例えばある新聞社の「社員」であり「記者」であるという社会的な地位の上にアグラをかいていないだろうか。あるいはある新聞社の「社員」「記者」のヨロイに身を固め、「中立・公正・客観的」という「城」に立てこもって、身をすり減らさずに天下の形勢を眺めてはいないだろうか。私たちは一度自分のヨロイを脱ぎ、城をぬけ出してみよう。アジア、アフリカ各地のあのジャーナリスト、このジャーナリストを頭に描きながら、もし彼らと一緒に仕事をすると仮定したら、いったい自分にながでできるのか、なにをしなければならぬか——。

「××新聞の記者」であるよりまえに、彼らと共に民族

の独立解放を考え、人民大衆のために働き、ときに闘争の宣伝者であり、協力者、組織者であり、また有能な「政治ゲリラ」でもある、そうした縦横無尽の行動半径を持つもの、いつてみれば私はまず「闘争者」「革命者」でなければ、彼らとともにあるジャーナリストとはいえないのではないか——そんなことを考えた。

（共同通信記者）

（「アジアアフリカジャーナリスト会議」機関紙第4号・同ジャーナリスト会議実行委員会「日本ジャーナリスト会議、新聞労連、出版労協、日放労、民放労連、映画総連、日本機関紙協会」発行 一九六三年七月一六日付から）

〈注〉この原稿と同取材・同趣旨の文章を筆者は『斎藤茂男現代を歩く』共同通信社刊の末尾に「状況にまきこまれろ」のタイトルで書いている。量的にはほぼ半分にし、最後の一節は次のような文章となっている。

「生きた社会の現実というものは、冷静な社会的観察だけでは、とらえきれない。記者が弱者の状況に巻き込まれ、徹底的に弱者の立場に視座を据えて世界を見ると、状況の本質に接近することができる。——『中立・公正・客観的である』という常識の虚構を自覚させられたあの夜の言葉を、私はそう意識して大事にしまっている」（一九八一年一月一〇日）

II

国際情勢の渦のなかで

初めての海外旅行

清水 英夫

(青山学院大学名誉教授・
「放送倫理・番組向上機構」理事長)

一九五八年の五月初旬から約一カ月、私は初めての海外旅行に出かけた。ルー

マニアのブカレストで開催される国際ジャーナリスト機構（IOJ）の世界大会に、JCJの代表として出席するためである。当時、私はJCJの日本評論新社支部長で、JCJ事務局幹事もしていた。

JCJは、社会主義国のジャーナリストが主導するIOJの正式メンバーではなかったので、オブザーバーとして招かれたのである（旅費、滞在費はIOJ負担）。日本からは、当時JCJの副議長だった小林雄一氏（読売新聞）と私の二人だけであった。

当時はまだジェット機ではなく、四発のプロペラ機（KLM）で、最初の

寄港地マニラまで九時間（↑）もかかった。

それからバンコク、ラングーン、ニューデリーと各駅停車だったが、カラチではとうとうエンコしてしまい、空港で一泊となった。それからローマ経由でパリに入ったのは、羽田空港を出発してから、なんと約五〇時間後のことだった。翌日チェコ航空でプラハに向かったが、それは当時、日本とルーマニアには正式国交がなかったので、プラハのルーマニア大使館でセパレート・ビザを貰う必要があったからである。

こうして、私たちがブカレストに到着したのは五月一二日のことだった。IOJの大会は四日間、ブカレストの文化会館で開かれたが、正式参加国は

共産圏を中心とする一七ヶ国で、オブザーバー参加は日本など七ヶ国、参加者は一〇〇余人だった。

一九五八年当時は、チェコもルーマニアも共産化してから未だ日が浅く、西側の空気も未だ色濃く残っていたように思う。私が再度チェコを訪れたのは七七年のことであるが、プラハの春“弾圧（六八年）”を経験したこの国の空気は、すでに重く暗かった。

会議は、言論の自由とかジャーナリストの国際的統一とかがテーマだったが、小林雄一氏の報告は、共同通信の記者がスクープした菅生事件など当時の日本の状況が中心で、各国の注目を集めた。会議も面白かったが、各国のジャーナリストとの交流は、なお愉快だった。

ワルシャワから来たポーランドの新聞記者は、しきりに薄給を嘆いていたが、映画「地下水道」の話に及ぶと、ソ連の悪口をさかんに述べ立てた。また、セイロン（後にスリランカ）の新聞記者は「私はコミュニストが嫌いだ」

とって、共産国であるルーマニアの
あら捜しをやっていた。

帰途、再びパリに連泊したが、ちよ
うどド・ゴールの政権獲得が決定的に
なっていたころだった。労働者を中心
とする反対勢力の決起に備え、市中は
自動小銃を持った武装警官であふれて
いた。しかし、仕事を終えた私は、完

全な旅行者で、観光を楽しんだ。

旧知の哲学者・森有正さんにお会い
できたのも、そのときである。カルチェ
ラタンの小さな中華料理店で、久闊を
叙すことができたのも、今は懐かしく
楽しい思い出である。しかしそのころ、
日本では安保闘争がようやく激化の兆
しをみせていた。

ラテンアメリカ変革の鼓動

—第二回世界ジャーナリスト集会から—

吉川 嘉治

(日経支部)

「クバ・シー、ヤンキー・ノー」。
会場の一隅からわき起こったシユプ
レヒコールは、やがて会場全体を包み、
足を踏み鳴らす靴音は天井にこだまし
た。

キューバのプレンスラティナ（ラテ
ン通信）の若い社長、マセティ氏が壇
上から呼びかけた。

「われわれは解放の闘いの中で、A

PやUPIの報道独占を打ち破る必要
を感じた。そしてわれわれの力で作り
上げたのがプレンスラティナである。

キューバに限らず、ラテンアメリカの
人々は、これによって真実を知るよう
になった。これを「真実作戦」と呼ん
でいる。世界のすべてのジャーナリス
トは、われわれを支援し、正確な報道
をして欲しい」

第二回世界ジャーナリスト集会は一
九六〇年一〇月一八日、ウィーン郊外
の保養地バーデンに六二カ国二七九人
のジャーナリストを集め、五日間の
日程で聞かれた。私は日経支部から選
ばれ、J C Jの二人の代表団の一人
として参加したわけだが、集会はその
前年、キューバ革命を成し上げたキュー
バのジャーナリストをはじめ、植民地
主義に反対し、民族の独立を闘うアジ
ア、アフリカ、ラテンアメリカの熱気
におおわれていた。

われわれ代表団の目的は、この年、
日本列島を襲った安保闘争の意義とメ
ディアの果たした役割を報告すること
だったが、この闘いの評価をめぐって
は、団内部でも激しい論争が繰り返さ
れていた。J C Jは安保条約の危険な
役割を明らかにするため、パンフレッ
ト「危険な条約」を発行したり、文化
人たちと一緒に「安保批判の会」を立
ち上げ、広範な人々を結集することに
取り組んだのだが、既存メディアは、
「反米」を恐れて腰が引けていたし、

あげくに「その依ってきた所以を別に
して、事態の收拾を」という共同宣言
によって、幕を引く役割を演じたのだっ
た。

正直、挫折感もあったし、J C Jの
政治偏向を批判する声も耳にしていた。
それらが心のオリとなって、もうひと
つ積極的な評価を阻んでいた。しかし
ウィーンへの途次訪れた、中国の評価
は違っていた。当初、われわれはそれ
を中国流のお世辞か、せいぜい激励か
と受け取っていたが、やがてそれが間
違いだっただことに気がついた。中国は

当時、台湾を支えて中国を封じ込める
米国の覇権主義と闘っていたのであり、
安保闘争は、まさに彼ら自身の闘いで
もあったのだ。

中国の代表団は「日本人民の勝利は
初歩的な勝利だが、しかし正しい闘い
が始まった以上、必ず勝利する」と言
い切った。

いま、ラテンアメリカの静かな変革
が報じられている。パーデンでの、あ
のシユプレヒコール、あの靴音が四五
年を経た、いまにつながっているに違
いないと、思うのである。

本田良介さんと「皇帝」

——一九六四年訪中団の追想——

河野 慎二

(放送部会／元日本テレビ)

一九六四年秋、私は中国を訪問した。
J C Jが中心となって組織した訪中団
に、民放労連の代表として参加した。
団長はJ C J副議長の本田良介さんだっ

た。他に、現・代表委員の岩切信さん
をはじめ、新聞・通信、出版、放送、
映画、機関紙など、マスコミ各分野の
労働組合代表九人が代表団を構成した。

当時、中国は一九六六年の「文化大
革命」の前夜で、難しい訪中だった。
現に、J C Jにもその予兆があった。

私たちが訪問する四年前の一九六〇年、
小林雄一議長（当時）がJ C J幹事会
の確認を逸脱した「日中ジャーナリス
ト共同声明」を発表して、J C Jに困
難な事態が生じていた。

私たち本田代表団は事前の打合せで
「団はジャーナリストの総意に基づき、
一致して行動する」ことを確認し、一
九六四年九月二八日香港経由で北京に
入った。国慶節式典に参加したあと、
東北地方を視察して上海に着いた代表
団を、二つの歴史的な事件が待ち受け
ていた。

六四年一〇月一六日、ソビエトのフ
ルシチョフが首相と第一書記を解任さ
れた。翌一七日には、中国政府が「核
実験に成功した」と発表した。

代表団は上海で、中国側と二回会談
した。中国側の代表は、新華社副社長
の鄧崗氏（中国新聞工作者協会副主席）。
中国は核実験の成功で高揚している。



前列右から二人目・本田良介さん、一人おいて周恩来首相

会談で鄧氏は核実験の正当性を主張した。チェーンズモーカーの鄧氏は煙草をくわえたまままきし立てるので、胸元は灰だらけだが、おかまいなしだ。しかし、鄧氏は予想に反して「共同声明」問題は持ち出さなかった。核実験成功をテコに、カサにかかって「共同声明」を迫ってくるのではないかと見ていたが、鄧氏は控えたのである。その背景には、本田さんの原則的な外交交渉テクニックがあったと私は見ている。

公式の会談で本田さんは、ジャカルタ宣言の「核兵器禁止」条項を引用し

て、逸（はや）る鄧崗氏にクギをさした。また、「共同声明」を会談のテーブルに載せないよう、鄧氏と非公式折衝を重ねた。硬軟の使い分けというか、百戦錬磨の鄧氏を相手に、したたかな対応だった。

代表団の総括会議で、本田さんが「最初に話し合った点をそっちのけにして、運動を進めるのはまずい。難しい面もあるという現実立って、進めなければならぬ。画一性は必要ない」と発言したメモが、当時の私の手帳に残っている。

代表団の団結に心を砕いた本田さんの気持が伝わってくる。代表団は所期の目的を果たして帰国したが、本田さんは一九七二年、六二歳という若さで急逝された。「惜しい人を亡くした」と心底思った。

渋谷の山手協会で行なわれた葬儀で、ベートーベンのピアノコンチェルト「皇帝」が流されていた。「ナポレオンに捧げた曲」などの俗説も耳に入っていて、「なぜ、本田さんが『皇帝』を？」

という想いも残った。

その後、音楽に詳しい友人から『俗説』の誤りを聞いた。本田さんは、この曲のスケールの大きさや時代を超えた生命力に感動して、葬儀の際にぜひ聴かせてと、遺言を残したのだろう。

「皇帝」を聴くたびに、本田さんと難しい状況を乗り切った中国の旅が思い返される。そして、本田さんが我々に託したJ・C・Jの生命力を二一世紀の若い世代に伝えていかなければならぬと考えている。





審査終了後、ゴビの一泊旅行にて（左端、オランダのV氏）

モンゴルで会った二人の友

田邊 順一
(写真家)

一九八一年八月から九月にかけて、IOJ主催の国際報道写真展の審査会がモンゴルの首都ウランバートルで開かれた。審査員はソビエト、東ドイツ、オランダ、ポーランド、チェコスロバキア、ブルガリア、ハンガリー、モンゴル等から集まり、JCJからは私が参加した。

モンゴルのぬけるような青空のもと各国の写真家たちとの交流が実に楽しく、あつという間に過ぎてしまったというのが実感だ。同時に、国際情勢に疎かった私とその厳しさとややこしさを垣間見た二週間でもあった。

学校の体育館の床一面に大量の応募作品がカテゴリーごとに並べられ、その中から粗選びし、さらに絞った作品

を一点一点見ながら無記名で投票し入賞作品が選ばれた。特賞は半年前に起こったスペイン極右治安警察隊による国会占拠の瞬間をとらえた写真で、六ツ切りサイズの粒子の粗いプリントだったが、壇上で銃を構えた兵士の姿が緊迫した空気を伝えていた。審査員のほとんどのが写真家である。

交流の場では持参した写真集やプリントなどを見せ合いながら言葉のちがいを超えて直ぐにうち解けていった。中でも、気が合ったのがオランダ人のV氏（新聞写真記者）とポーランド人の写真家Y氏だった。Y氏はたしか写真家協会の会長だったと記憶しているが、われわれ三人が一緒にいるときは実に快活によく笑いよくしゃべっていた。話題は写真のこと、家族のこと、亡命した息子のことにもふれながら多岐にわたる楽しいものだった。その彼が、ある日を境に一変してしまったのだ。

受賞作品の発表会の席上、報道関係者の最前列、それも彼の真ん前に座っ

ている軍服姿の軍人にY氏の表情が一変したのが隣にいる私にもはっきりと分かった。会の終了後、彼の姿は消えた。以降、行動を共にしても以前のような明るさと饒舌さは影を潜め、何があったのかと尋ねても黙って首を振るだけだった。彼の言動に対して何らかの圧力があつたことはたしかで、恐怖にも似た不快感をもつたことを思いだす。

この年の一月、ポーランドでは食料値上げに反対する「連帯」のストが引き金となって首相が更迭され、一二月には戒厳令が布告された。おそらく想像以上にピリピリしたものが国内にあつたにちがいない、とは帰国後しばらくしてから思ったことだ。

こんなこともあつた。V氏はすべての日程が終了したら中国で取材しその足でオランダに帰る予定だった。が、それはならぬと言われたという。中国に行くとしたら取材が済み次第モンゴルに戻り、それから帰国せよと。その

際、モンゴル国内で撮影したフィルムを中国に持ちこんではならぬという。そこで、私がフィルムを預かり、彼の新聞社の東京特派員に手渡したのだが、なんと馬鹿げたことをと言いながら、当時の蒙中関係の険しさを実感したのもだった。

年表によると、この年は東西ヨーロッパで大きな政変が起きた年とある。東

欧における「連帯」のスト、西欧ではスペインの国会占拠クーデター未遂事件である。図々しく言えば、期せずしてこの両方の政変の一端を垣間見たような気がしている。

その後もオランダのV氏とは交流がある。ポーランドのY氏とはあの特別れたきりだ。今、どうしているか。機会があつたら会いたいものである。

一九八一年IOJ総会の思い出

酒井 憲太郎

(会員)

一九八一年一〇月一九日から二二日までモスクワ(当時ソ連首都)でIOJ(国際ジャーナリスト機構)の第九回大会が開かれ、日本からの代表団九名の一員として参加した。JCJ東海で毛利氏から「地方からIOJ総会への参加を求めている。モンゴルにも行く」との誘いが端緒だ。

当時モンゴルはなかなか入国出来ない国だったので、魅力を感じた。夏休みを利用すれば参加できる。当時名古屋に勤務の酒井に鈴木議長から九月八日付けで事前打ち合わせの手紙が届いて、準備開始。手紙によると「九月二日〜一二日ウランバートルでのIOJ写真審査に写真支部・田辺順一氏が参



ソ連から外交特権を与えられ、IOJ総会で演説するパレスティナ解放機構 (PLO) のアラファト議長。(1981年10月、モスクワで、酒井憲太郎撮影)

加している。田辺氏帰国が一三〇四日予定なので九月二〇日(日)第一回代表団打ち合わせ会を六本木の事務所で行った。田辺氏を含めて聞く」とのことであった。

一〇月一七日にモスクワに到着。モスクワ大会に持ち込まれた岩切事務局

- 次長報告英文は「日本のマスメディア状況と日本ジャーナリストの闘争」となっている。中味は五部に分かれていて、1. 世界のジャーナリストへのアピール。2. 日本のマスメディア状況。3. 日本ジャーナリストの緊急の課題。4. 日本ジャーナリストの闘争教訓。5. 権利擁護のための日本ジャーナリストの闘い。

また、大会席上で大会に提案された大会宣言の一部を承認しないことを岩切事務局次長は表明した。その節はアジアに関して「我々はベトナム、カンボジア、ラオス、アフガニスタンの人民と固い連帯を誓約する。彼らは平和のうちに国を発展させ、外国の干渉から自由になる努力をしている。そして我々はアメリカ帝国主義と中国拡張主義による再度の企てを糾弾する。かれらは歴史によって非難された野蛮な支配体制を攻撃と干渉によって回復させようとしている。」となっていた。

岩切事務局次長は拳手をして、「ウィーリザーブ」と始めた。この節には、

ソ連によるアフガニスタン介入への批判がない。「アフガニスタンの実情が分からないので、承認を留保する」と言明した。隣の席で酒井は緊張して発言を聞いていた。二三日最終日の夜だったか、ホテルの我々の部屋にアフガニスタンの代表がやって来て、握手を求められ、抱きつかれた。岩切発言を歓迎して喜んでいるのだった。日本には無事に帰れないかも知れないと冗談を言い合って、その晩も酒を飲んだ。

二三日無事にモスクワ発でモンゴルへ移動。モンゴル・ウランバートルで第五回国際シンポジウムが開かれた。参加国はアフガニスタン、オーストラリア、インド、スリランカ、日本、カンボジア、北朝鮮、ラオス、モンゴル、フィリピン、ソ連、ベトナム、国際組織としてIOJ。ハンガリー、東ドイツ、チェコ、ブルガリアからのIOJジャーナリスト学校。三〇日モンゴル出国。十一月一日帰国。

その後IOJの機関誌である「The democratic Journalist」の八一年一



会議終了後のゴビ・ツアーで

国際ジャーナリスト機構（IOJ）
というのがあった。ジャーナリスト組
合の国際組織といった性格のもので、
そこに加盟していたJCJは、どちら
かといえば異質のメンバーであった。
一九八九年七月、モンゴルのウラン
バートルで開催されたIOJ会議に参
加させていただいた。ソ連でプレス
トロイカが本格始動する一方、中国では
天安門事件の興奮がまださめやらぬ頃
だった。

各国のメディア状況ということで、
当方は、前年秋から半年間続いた昭和
末期の「Xデーフィーバー」について

報告した。発言の最中、熱心にメモを
とる日本人風オブザーバーがいるのに
気づいた。あとで知ったのだが、モン
ゴル駐在日本大使館の三等書記官氏だっ
た。

翌日、件の男が近寄ってきて、特命
全権大使閣下が大使館に招待したいと
言っているという。断わる理由もなか
ろうと受けたのだが、しばらくして気
がついた。「ははくん、狙いは共同か」。
会議には、共同通信の編集委員氏が取
材を兼ねて参加していたのだ。

というわけで、夕刻、編集委員氏と
大使館を訪ねると、よほど人恋しかっ
たのだろう、大使夫妻が大歓迎。海は
遠いというのに、なぜか刺し身やてん
ぷらまで出てくる。恐る恐る聞いてみ
ると、一週間前に宇野外相（そう、し
ばらく後に突然、首相の椅子が転がり
込んだかと思ったら、「三つ指」問題
ですぐコケてしまった、あの宗佑さん）
が訪問したときの残り物で、材料はな
んと北海から取り寄せたという。会議
でさんざん日本国の悪口を叩いただけ

二月号が届いた。総会報告には大会宣
言が掲載され、JCJ代表団が留保を
表明した部分には、注釈がついていた。

そこには、「ルーマニア代表団はこの
節を承認しなかった」と。

砂漠での国際連帯

——「真夜中の大ボラ」は……——

田悟 恒雄

（出版部会／リベルタ出版）

にいささか気が引けたが、草原の料理にウンザリしていたので、ばくばく頂戴。おまけに翌日は、大使館のランドクルーザー仕立ての遠出まで演出してくれた。後知恵だが、あれもメディア対策のささやかな「外交機密費」だったのか。

会議終了後、参加者全員でゴビ・ツアー。砂漠の真ん中でエンストしてしまつたバスの尻を全員で押して動かししたのは、目に見える国際連帯の成果だった。国際連帯といえば、アジア諸国代表だけでの夜の懇親会の席で、バンダラの記者に「日本の経済力を見せてほしい」などとノセられ、まんまと飲み代をもたされてしまった。

話変わって、その年の暮れ、JCJ本部での真夜中の納会……。代表委員を務めていた秦正流さんが、「一人ずつ来年の抱負を語ろう」と提案。思いつきで、「ウラジオストーク港に繋留されている空母ミンスクの赤錆びた甲板上で、日ソ・ジャーナリストのホネの討論会を」と大ボラを吹いたところ、

秦さんは大乗り気。「キミ、ぜひそれを実現しようや」と言ってくださつた。

実はモンゴルで、翌年「ウラジオ開市」（外国人に開放）の情報を得てい

「中ソ対立のあおり」か

大野 博

（日刊工業支部／元日刊工

一九五五（昭和三〇）年の初めだつ

たと思う。読売新聞に「ジャーナリスト会議分裂 中ソ対立のあおり」と出ていたのを覚えている（一九五八年七月三十一日 フルシチョフ・ソ連首相北京訪問 毛沢東、周恩来と会談）。

この原因は原子爆弾である。毛沢東主席がフルシチョフ首相に「中国も原爆を持ちたい。ついでには原爆製造のノウ・ハウを提供してほしい」と言った。しかし首相は拒否した。原爆を対中国外交の切り札としたかったからであ

る。

こうなると中国はソ連と米国の双方から原爆の脅威を受ける形になる。「ならば中国は独自に原爆を作る」と毛沢東。怒つた首相は「それなら引き揚げる」と。まさに売り言葉に買い言葉の場面である（五九年六月二〇日ソ連国防新技術についての中ソ協定破棄）。

それまでの中国は「向ソ一辺倒」であった。ソ連も多数のプロジェクトを中国に建設し、必要な技術者、マネー

ジャーを派遣していた。それが全部引き揚げたのだから、建設中のプロジェクトは廃墟同然である。以後中国は苦難の道を歩くことになる（六〇年七月一六日ソ連中国派遣技術者一三〇〇名の引き揚げ発表）。

このあおりがJ C Jに及んだわけである。つまり親ソ派と親中派の対立だったということか（五九年九月三〇日、フルシチョフ首相毛沢東と会談、共同声明出せず、中ソ意見対立激化―カッコ内はすべて「年表ヒロシマ」中国新聞社刊による）。

二〇〇四年から〇五年にかけて、防衛庁・自衛隊はしきりに「創設五〇年」を強調していた。われわれのJ C Jも二〇〇五年五〇年を迎える。ならばこの際両者の生まれ育ちを比較するのも意義あると思う。

まず自衛隊―一九五一年六月の朝鮮戦争（といっても実質は内戦）を理由に日本占領軍司令官マッカーサー元帥の一片の指令によってできた軍隊である。どの国でも軍隊を生んだ由来があ

る。自衛隊のような由来の軍隊は世界の歴史に例があるだろうか。

歴代防衛庁長官もこのことはよく分かっている。「自衛隊には建軍の本義がない」（山中貞則さん、故人）「自衛隊はしょせん雇用者集団」（伊藤宗一郎さん、同）といった具合である。自衛隊がいまだに国民と血肉が通わないのはこのためである。

だがJ C Jはどうか―「戦争と軍国主義の反省にたち再び戦争のためにペン、カメラ、マイクをとらない」との強い決意のもとに、着実に五〇年の年輪を重ねてきた。これを機にさらに前進を続けるだろう。



集いも——多種多彩に



「女性が少ない」と批判されたJ C Jおよびマスコミ。ならばと、オール女性による討論を試みた86年6月集会。内海愛子、加納美紀代、駒尺喜美、野辺明子、佐々木静子、中野麻美、藤原真由美、ヤンソン由美子各氏（砂防ホール）



J C J 特別賞の宮城まり子さん、「ここはピンボーな団体のようで……」とスピーチ、会場をわかせた（1980年8月、日本プレスセンター）



御茶ノ水の日仏会館ホールは一時期J C J 定番の集会場で、入りもよかった。右上は88年8・15集会で講演した野坂昭如氏



「W杯サッカーの真実」。日本スポーツジャーナリズム研究会との共催で（二〇〇二年七月一九日、岩波セミナーラーム）



「さあスタート！ マスコミ九条の会」集会では「いまこそペンとカメラで九条を守ろう」のスローガン（二〇〇五年四月五日、文京シビック小ホール）

III

J C J 賞——波紋を広げて

一般若苑の野外舞台で

松田 浩

(日経支部／元立命館大学教授)

神楽坂・日本出版クラブで（くじで当たったベトナムみやげのジュラルミン製の指輪〈撃墜したアメリカの飛行機で作った〉）



高輪プリンスホテル、般若苑、赤坂プリンスホテル、神楽坂の日本出版クラブ、プレスセンター……と「8・15記念の夕べ」の会場も、この半世紀の間に随分と移り変わってきた。創立以来、J C J会員にとって不戦の誓いを

新たにし、交流と懇親を深める貴重な機会になってきた「8・15」である。

会員間でもっとも人気が高かったのは、一九五八年（第一回J C J賞贈呈式）以来、たびたび会場に使われた東京・芝白金台の般若苑だった。ここは有田八郎元外相の夫人、畔上てるいさんが経営する日本有数の高級料亭で、旧島津家下屋敷址という緑豊かな広大な庭園といい、また奈良般若寺の客殿を一隅に移築したという風格ある料亭のたゞずまいといい、普通なら到底、われわれ庶民の手のとどく代物ではないのだが、J C Jびいきの女将・畔上てるいさんの格段の配慮で特別に「8・15の夕べ」のためにガーデン・パーティー形式で会場を提供してくれていたので

ある。

私自身、本部事務局幹事として六〇年代に何回となく女将のもとに「ことしも、よろしく」と挨拶にうかがったが、「私はJ C Jのジャーナリストの方々が大好きなのよ」とさながら女豪傑とでも評したいような実に太っ腹な女性だった。

鬱蒼たる木立に囲まれた芝生の中央にステージをしつらえ、周囲におでん、そば、やきとり……などの屋台みせを設けての野外パーティーは、夏の夜にまことにふさわしく、参加者たちは夜の更けるのも忘れてグラス片手に談笑のひと時を過ぎたものである。

J C J賞贈呈式や記念講演のあと、ステージでは各支部ごとに歌声なども披露され、若いジャーナリストたちにとっては日頃、仰ぎ見る存在の先輩ジャーナリストたちを囲んで、自由に歓談できるまたとない貴重な機会でもあった。般若苑がスケジュールの関係でとれないときは、やむなく他の会場を使った。そして、次第に般若苑が確保しに

くなくなったのは、般若苑自体の台所事情からいってもやむをえないことだった。いかに女将に俠気があるうと、この世知辛い世の中で、お得意客を断わってみずみす出血サービスの J C J へのお付き合いが、そうそういつまでもつづく道理がないからだ。

私にとって個人的に忘れがたい「8・15の夕べ」は、一九六七年に東京・神楽坂の日本出版クラブで行なった「8・15」である。なぜかと言えば、このとき、私は同じ J C J 会員の仲間二人と第一回目の J C J 奨励賞を受賞したからである。それは実に奇妙な受賞式だった。というのは、授賞対象になったのは、私たちがあえて実名を伏せ、波野拓郎という共同ペンネームで書いた『知られざる放送』（現代書房）という放送メディアと権力の癒着の実態を告発した本だったので、本人たちは会場にいながら「知らん顔」を決め込み、出版社の社長が代理で賞状を受け、筆者に代って挨拶するという異例な形式の授賞式になったのだった。

私にとって『知られざる放送』は、ジャーナリスト会議の仲間が取材現場でスクラムを組み、力をあわせて国民の「知る権利」に応えていくジャーナリスト活動の実践としての意味をもっていった。《あなたの「知られざる放送」は言論表現の自由をつらぬき真実を伝える時宜に合ったものとして大きな話題を呼びました。きびしいマスコミ反動化のもとでジャーナリストが個人あるいは集団によるこうした活動をおこなうことは、われわれを上げまし日本のジャーナリズムに新しい分野をひらく意義をもっています》という授賞理由は、おそらくその点を評価したものであろう。覆面執筆という手法は、予想される NHK や社の上層部からの報復・いやがらせ人事から自らを防衛し、取材協力者を守るうえで、当時としては万やむをえざる選択だった。

このときの「8・15の夕べ」では、予期しないハプニングが起きた。波野拓郎の代表格（全体の七割強を執筆）だった私が突然、ひよんなことで仮設

ステージに引っぱり出される羽目になったのである。アトラクションで行なわれたくじ引きで私の持っていた番号札が一等賞を引き当て、賞品を会場の皆さんに披露するという思わぬ展開になったためだった。賞品は、ベトナムで墜されたアメリカ空軍機の残骸でつくられた指輪だった。日頃、くじ運のいたって悪いのが、なぜこのときに限って一等を引き当てたのか、考えてみれば不思議だが、会場の拍手に改めて賞品の指輪を頭上にかざしたポーズがなんとも晴れがましく、まばゆいライトのなかで奨励賞受賞の喜びと二重に重なりあった。ちなみに、この『知られざる放送』は、権力と放送メディアの癒着の実態をはじめて白日のもとにさらしたインサイドルポートとして大きな反響を呼び、三万八千部という当時としてはちょっとしたベストセラーなみの売れ行きを記録した。

その後、私は『ドキュメント放送戦後史 I』（双柿舎、一九八〇年）で二度目の J C J 奨励賞受賞の榮に浴す

ることになるが、こちらの授賞式の記憶は不思議なことに、ほとんど印象に残っていない。三八年前、あの野外仮設ステージに立たされてベトナム「反戦の象徴のような指輪を高々と掲げたときの印象が、よほど強烈だったのであろう。今だから明かすが、『知られざる放送』と一緒に書いた二人のJCJの仲間とは、現在、「女性ニューズ」代表で活躍している関千枝子さん(当

時・毎日支部)とその後共同通信の重役にもなった稲村啓君(同・共同支部)である。この二人とは記者クラブ民主化の面でも随分、ともに頑張ったし、友情はいまもつづいている。

〈編集部注〉松田浩氏はJCJ創立以来の会員。一九六一年から七六年まで本部幹事をつとめ、一九六二年のジャーナリスト訪中団にはJCJから秘書長として参加した。

「戦場の村」とイラク戦争の間

あいだ

本多 勝一

JCJ賞を私がいただいたのは一九

六八年八月一五日、第九回のそれでした。『朝日新聞』に連載したベトナム戦争ルポ「戦場の村」に対してです。

もう三七年も前になるのですね。このルポにはほかからもいくつか賞をいただきましたが、賞の性格からすればJ

CJ賞が一番うれしい受賞でした。

当時の日本ジャーナリスト会議機関紙『ジャーナリスト』第一三四号(同年八月二五日)を見ますと、「受賞のよろこび」として私の語っている中に

「今後もっといい仕事をしていくことでJCJ賞にむくいたい」という一言

があります。はて、その後の私は「もっといい仕事」をやれただろうか?と、いま七三歳の「老ジャーナリスト」としてまだ現役のまま顧みる次第です。

仕事への評価はあくまで第三者によるものの、自ら顧みての感想としては、「もっといい仕事はこれだ」と挙げることはできないけれど、少なくともJCJ賞という賞の名誉を裏切るような仕事はしなかつたと、これだけは自負してもいいと思います。本書の編集委員からの寄稿要請状に「是非この経験を伝えたい」など……とありましたが、その種の体験・裏話・逸話・実話等はすでに多くを書いてきました。ここでは前述のように「まだ現役のまま」であること、それ自体について触れておきたいのです。

私も企業内新聞記者として定年まで働いてきた一人ですが、最後まで役割にはつきませんでした。「編集委員」になったのはJCJ賞を受けた年の四月、三六歳のときですが、これは肩書だけのことでですから管理職ではなく、



第一次イラク戦争で、米軍の劣化ウラン弾によって破壊された戦車群

ジャーナリストとしての活動内容には変化がありません。そして定年の前と後にも仕事に境界はなく、『週刊金曜日』を主舞台に書きつづけています。数年前のことですが、尊敬するジャー

ナリストの一人、鎌田慧氏に「六〇歳代以降になっても取材して本格ルポを書いて例はないのでは？」と言われて奇妙な思いをしたものです。調べてみたわけではないけれど、当の鎌田氏も含めて少ないことは事実でしょう。

これにはしかし、書く「場」の問題もあります。国連を無視したアメリカ合衆国ブッシュ政権がイラクを侵略する前年、私はイラクに行つて第一次イラク戦争での戦場を取材し、劣化ウラン弾の放射能のひどさを『週刊金曜日』に連載しました（のちに単行本『非常事態のイラクを行く』 朝日新聞社）。

三年前、七〇歳のときです。このときつくづく思いました。この全人類への警鐘たるルポを、影響力ある日刊紙に連載できたら!!と。かつての『戦場の村』のように。

しかし、部数の少ないこの週刊誌でも書く「場」があるだけまだましなのでしょう。今や日本の日刊紙のほとんど、いやすべてが、政党機関紙を例外として、戦前のある時期に近くなりました。進行中の第二次イラク戦争から「戦場の村」が出てくる可能性はないでしょう。わびしいことに。

「東京大空襲」を語り継ぐ

早乙女 勝元

J C Jとの関わりを振り返ってみると、なんと三昔余もさかのぼることになる。

一九七一年、私は初めてノンフィクションに転じて、岩波新書で『東京大空襲』をまとめ、J C J奨励賞となつ



1945・3・19 浅草松屋デパート屋上より隅田川と江東方面の惨状（東京大空襲・戦災資料センター提供）

た。それが都民の戦禍を掘り起こし、語り継ぐ一つのはずみになったように思える。

広島・長崎の原爆被害にも匹敵する

大惨禍が、なぜ戦後ずっと社会問題化されずにきたのか。その理由はいくつか挙げられる。①一家全滅の家が多く、語り部がほとんど不在となった、②遺族や罹災者が地方へ離散した、③その日暮らしの人が多く、戦後は生きるだけで精いっぱいだった、④占領軍のプレスコードで無差別爆撃の実態解明が規制された、⑤公的な調査や救いの手が差しのべられなかった、などなど。

とりわけ⑤の要素が、重い意味を持つと見る。軍人軍属への国家補償はなされたものの、民間の空襲被害者や障害者の補償は何もなかった。愛児三人と両親を失ったある母親が、公的にもらったのは乾パン一袋だった、という例さえある。

九九年、平和祈念館建設計画を進めていた東京都は、計画のすべてを「凍結」した。私たちが長く都に寄託してきた戦災資料は、その一部が締め出されてきた。やむにやまれぬ決断で、江東区北砂一丁目、「東京大空襲・戦災資料センター」の民間募金を呼びか

けたが、その時いちはやくJCJ機関紙で、大きく紹介してくれたのが、事務局長の宮本近志氏である。

宮本さんには、その前からお世話になっている。講談社の編集者時代に、東京大空襲をテーマにした長編『戦争と青春』を、出版してもらった。原稿に対するチェックはきびしく、校正段階で冷や汗ものだったが、杜撰な私はどんなに救われたか知れない。この小説は自作シナリオが先にあって、今井正監督、工藤夕貴主演で映画化された。

宮本さんはとても喜んでくれたが、話を元に戻そう。民間募金に踏みきったところで、具体的にどんな戦災資料があるのかと、カメラマンと一緒に、わが家まで来てくれたのが忘れられない。おかげさまで、目標の一億円以上が集まって、〇二年三月に同センター（電話03-5857-5631）がオープンした。

鉄骨三階で、小規模ながら、都民の戦禍を語り継ぐべく扇の要役をはたしているが、JCJとして応援してくれ

た宮本さんに、見てもらえないのが残念だ。

宮本さんが六五歳で急逝して四年。

憲法の平和原則を守りぬげるか、憲法を変えていつでも戦争のできる国になるのか、戦後史の曲がり角にきた。今こそJ C Jの果たすべき役割は大きくて重い。災害は忘れた頃にやってくる。

「二月八日」へのこだわり

高木 敏子

私は一九七七年二月八日に『ガラスのうさぎ』と題する本を出版しました。一九四一年二月八日に、太平洋戦争が開戦した日から三六年目の日です。私は長い間、戦争を始めてはならない、敗戦・終戦記念日の八月一日だけを反戦を誓う日であってはならないと思いつけていたのです。一九五六年二月八日に私は結婚しました。私

の子供たちに、このこだわりを語りたかと思つていたからです。

一九七八年の二月から読売新聞「編集手帳」、朝日新聞「天声人語」、毎日新聞「余録」、そして各紙の社会面、読書欄、テレビとお取り上げたのだのです。私も家族もただただ驚き、あまりの反響の大きさに、日々とまどうばかりでした。

そして一九七九年七月末に「日本ジャーナリスト会議」からお電話をいただき、「八月十五日に、日本ジャーナリスト会議より貴女にJ C J奨励賞を贈呈致しますので、出席して下さい。後日書面で会場その他のお知らせをいたします……」

何かなんだかわからない、というのが当日の授賞式までの私の心境でした。マスコミの関係者の方は、取材でお逢いした方しか知らない。ここに賞状と記念の額入の盾と一枚の写真がある。鈴木議長さんが、私に賞状をお渡し下さっている写真だ。緊張した四七歳の私がいる。感激で涙があふれ「皆さま、有難うございました……」と申し上げたのを覚えている。この会の終わりに、会場の皆さんが、声を合わせておっしゃった言葉が忘れられない。

「戦争のために、ペンは持たない」「戦争のために、マイクは持たない」「戦争のために、カメラは持たない」言葉による大合唱で、授賞式は終わりました。

53

言論統制に入っていない今こそ、憲法第二章第九条の大切さを国民に訴え、憲法改正反対の世論を沸き立たせて下さい。一九四一年二月八日を再現しなために！

ジャーナリスト精神の発見

柴田 鉄治
(代表委員)

私がJ C Jの名前を初めて知ったのは、七八年度のJ C J賞に吉田慎一記者の「木村王国の崩壊」が選ばれた時だった。吉田記者は、私が朝日新聞の福島支局長を務めていたときの支局長で、最終的には木村守江知事の逮捕にまで至る福島県政汚職事件を担当し、その全容を福島県版に二三五回の長期連載した記事が評価されたのである。

「地検は」とか「県警は」とかしか報じられない捜査陣のひとり一人まで生身の人間として実名で登場させ、人間臭い葛藤やドラマを迫真のドキュメンタリーとして描いたのだ。汚職事件の全容をこれほど詳細に、細部まで描いた報道はかつてなかったと絶賛され、その年の新聞協会賞も受賞している。

このJ C J賞の授賞式に、私は吉田記者の付き添いとして出席した。受賞が自分のことのように嬉しかっただけでなく、そのときのJ C J賞選考委員長が私のかつての恩師であり、深く尊敬していた城戸又一氏であったことも、二重に嬉しかったことをよく覚えている。

スト精神の衰退を嘆いてばかりいた私
が、J C J賞の選考を通じて、「日本
のジャーナリズムも捨てたものではな
い」とあらためて痛感し、目からうろ
こが落ちる思いを何度も味わったので
ある。

J C J賞の選考委員からその後さら
に代表委員への就任も要請されたが、
これも私の尊敬する先輩ジャーナリス
ト、秦正流氏、斎藤茂男氏、石川真澄
氏のあとを継ぐ形なので、喜んで引き
受けた。日本のメディアは、企業意識
が強すぎて、ジャーナリストとしての
横の連携があまりにも足りない、か
ねてから考えていたので、私なりに少
しでも協力できればと考えたのである。
いま、日本の社会は、戦前・戦中の
日本社会に逆戻りするのではないかと
思わせるような動きが次々と起こって
いる。自衛隊の海外派兵、有事法制の
制定、教育現場での国旗・国歌の「強
制」、まるで思想犯の取締りのような
政治的ビラ配りの逮捕・長期拘留……
平和と基本的人権を基調とする「戦後

社会の骨格」が揺らぎだした感がある。
そうした動きに「待った」をかける
べきジャーナリズムのチェック機能が
極めて弱くなっていることは間違いな
い。いまこそJ C Jの存在価値が問わ

れるところだ。初心に返って、平和と
人権を守るジャーナリズムの使命を果
たしていかねばならない。そのJ C J
の活動に、私も全力を挙げて協力して
いきたいと考えている。

J C J賞と名古屋の連帯

小中 陽太郎

J C Jの第一の思い出は、確か一九
八六年から四期ほど、J C J賞の選考
委員に加えていただいたことだ。革新
統一への願いが大きくもえあがったこ
ろで、私も都知事候補など勉強させて
もらった直後であった。出版労連の山
崎君や宮本君が支えてくれた。山田洋
次監督や秦正流代表委員の卓見に触れ、
ジャンルを超える批評眼に感嘆したも
のだ。日本の民主主義を守ろうと、そ
れぞれの持ち場で精一杯工夫している
作品を選ぶのはやりがいのある審査だっ

た。わたしは、J C Jとマスコミの間
を橋渡しすることを心がけ、「ニュー
ス・ステーション」の久米宏、『神奈
川新聞』の米軍スパイについての江川
紹子さんたちに奨励賞を差し上げたも
のだ。失敗はその価値をわかっていた
だこうと選評に時間をとりすぎたこと、
申し訳なかった。秦氏の後をついだ茶
本繁正氏の母上と私の父が白杵の出身
というのもなつかしい。
いま時代は逆風、しかし名古屋で連
帯の輪を作るのに懸命だ。J C J東海



小中陽太郎氏（1987年度授賞式で）

の大西五郎に乞われて、マスコミ夜塾 in名古屋の塾頭を勤めた（この四月から大橋宏中部大教授）。そして、「いわゆる「人権擁護法案」、イラク戦争、

NHKに対する政治介入反対の過程で、「市民と言論実行委員会」方式がうまれた。七月一四日「沖繩問題の真実」（おはなし西山太吉）で第一四回を数える。その参加団体が名古屋の誇りである。マスコミ夜塾 in名古屋、市民とメディア研究会・あくせす、マスコミと人権を考える東海の会、日本ジャーナリスト会議（東海）、新聞労連東海地連、民放労連東海地連、日放労、出版労連名古屋地協、全印総連愛知地連、愛労連だ。これだけの参加団体が、月に一回金曜日の夜、NHK労組の書記局に勢ぞろいするのを見ると、労働者の連帯を身内に実感する。

スピーカーも在名各社の局次長、イラク取材の記者、フリーの綿井健陽、製作者では、名テレの土江真樹子、中京の大脇三千代と女性ががんばる。ときあたかもイラク戦争、高遠さんたちが拘束されたとき、愛労連と組んでいちやく、劣化ウランの研修医療に来ていたモハメド医師らの呼びかけをイラクに届けた。そのあとのNHKの放

送弾圧にも日放労と共同歩調をとることができた。かつてはマスコミをめぐる市民運動といえ、言論弾圧に抗議し、マスコミ内部の労働者を守ることが任務だった。しかしいまでは平川宗信中京大教授（マスコミと人権を考える会）のように、マスコミによる市民生活侵害に対する批判も根強い。また組織に属さないジャーナリストの活躍と彼らに対する処遇も新しい問題だ。

初期の小中のポジションは、マスコミ内部で個的に活動しているリベラルに対して、JCJの思想性を紹介し、手を差し伸べることにあると感じていた。いまは逆になった。孤立しがちな組織内の良心的ジャーナリストを市民層の多数がどうやってまもるか、さらに支援だけではなく、市民の迷惑や不信をどう組織内のプロにつたえるか、という任務がJCJにもわたしたしにも課せられているとおもう。もとよりベクトルの矢印の向きは変わったとはいえ、ジャーナリストと市民をつなぐ捨石たらんとする微意はいまもむかしもかわら

ない。

おもえばテレビ塔の下のNHKのビルに歩を入れたのは伊勢湾台風のところ。

半世紀をへていま、NHKと市民運動、放送労働者と肩を組む、J C Jのおかげである。

写真は愛情の表現

吉田 ルイ子

(フォトジャーナリスト)

ちょうど一年前のこの時間、私は麻

が、精神的に疲れました。

酔を打たれて手術台にのぼっていました。敬愛する石川文洋さんがJ C Jの特別賞を受けているんだなと思いつながら、夢の世界に入っていました。

帰国したら、南アの領事館からさっそく「南アで写した写真を全部見せてほしい」と言われました。「発表するものについては見せる」と答えましたが、その他日本の企業とか、いろんなところから嫌がらせがきて、神経が参り、病気になってしまいました。

一九八七年の終りごろから、南アフリカ共和国のソエトという黒人居住区に行きました。アメリカのCBSのレポートが来ていて「アパルトヘイトの子供たち」というドキュメンタリーを撮り、南ア滞在中にそれは放映されたのですが、その番組の中で「死んでも闘う」と言っていた子供が、放送の翌日殺されました。短い滞在期間でした

フォトジャーナリズムというものの厳しい現実を南アほど実感させられるところはありませんでした。撮るのも大変ですが、発表するのも大変です。密告に使われたり、たかが一枚の写真ですが、それが大きな力になると同時に、大きな害を及ぼす結果にもなるのです。最近の中国の天安門事件でも、外国の放送会社の写した映像にもとづいて犯人探しが行なわれ、青年が処刑されました。

日本を振り返っても、フォトジャーナリストにとって社会状況は決していいものではありません。「写真を写してあげる」「有名にしてやる」と子供に近づくと、それにカメラやビデオが利用されています。

「百聞は一見にしかず」と言われ、映像に重きが置かれながら、必ずしも評価は高くない。ジャーナリズムの中へテレビ、写真が入っていくことの難しさも感じます。方向に間違いがあるのかも知れません。

J C J賞の特別賞をいただき、責任を大きく感じます。私はアメリカに留学中、「ファミリー・オブ・マン」の写真展で、ユージン・スミス氏の一枚の写真、黒人の子の誕生の写真に感動して、放送ジャーナリズムから転換しました。その後、ハーレムや沖繩、ベ

トナム、東南アジア、ニカラグア、南アと世界各地を回っていますが、写真が多くの人に影響を与えるものであることを、今しみじみとかみしめています。

ある写真の大家が私に「クロちゃんの写真ばかりじゃ、おカネにならないよ」と言われましたが、私はおカネに

代えられない賞をいただきました。これはわけても写真の被写体となった人たちに差しあげたい。彼らなくして、私の仕事はなりたないのですから。写真は私の愛情の表現です。

（ジャーナリスト）一九八九年九月二九日号から

「埋もれたエイズ報告」を作って

今井 彰

（NHKプロデューサー）

放送から一〇年以上が経過した今も「埋もれたエイズ報告」は私の番組人生にとって特別な一本になっています。長きにわたり閉ざされてきた薬害エイズ真相解明への重い扉。

「何故、感染しなければならなかったのか、その理由を知りたい」患者や家族はその思いに耐え、死や発病を恐れながら日々を送っていました。

ディレクターであった私自身の動機は、四国山中の施設で十分な葬儀も出ず人知れず亡くなった少年のことを知った時です。その無念を思った時、からだの中に炎がともったことを覚えていました。

正直に言えば、私の番組キャリアの中で、最も過酷でつらい取材を重ねなければ辿りつけない厳しいテーマでし

た。

ドキュメンタリーを作ることが、我が身も傷だらけにし、滅びにいたるものかもしれないと苦悩に駆られた番組でもありました。

しかし放送後、患者の方、ご家族、そして弁護士の方々からエイズ報道の偏見と被害の中で、『埋もれたエイズ報告』が、自分たちの人生を救ってくれた」とまで言っていた時は、これ以上ない喜びに包まれたことを覚えています。

一九九四年八月、J C J本賞受賞のご挨拶は市民の方々の前で行なわれましたが、会場はぎっしりで、人々の視線が熱く、誇らしくも面映かったことを覚えていきます。

その後も様々な番組を作り続けてきました。不良債権の回収やオウム真理教と闘った町の人々、そして六年前からは、プロジェクトXのプロデューサーをしています。

思うことは、いついかなる時も、人と同じ視線で正対して社会の力になる



1995年 J C J 賞選考委員会方々（右から暉峻、斎藤、英、落合、桂、山田洋次の各氏）

番組を作りたいと考えています。

J C J 賞は私の人生の背骨になった契機であり、今後もこの賞から多くのジャーナリストたちが羽ばたいてゆく

ことを願っています。

受賞式で話したかったこと

天野 弘幹

（高知新聞社編集部）

今も思い出すと、赤面する。一九九七年夏の J C J 賞受賞式。大勢の人で埋まったホール。壇上で緊張してしまい、要領を得ない話をしゃべり続ける私の手元に、司会の方から小さな紙が回ってきた。片手で開くと、鉛筆の走り書き。「もう時間がないので、早く終わってください」——。

その前年の夏、私は高知県の山あいに住む旧日本軍七三一部隊の元隊員と中国を旅した。彼は戦後、出稼ぎ暮らして、過去を封印するようにひっそり生きてきた。その足跡をたどり、戦争

における加害の問題と、行為に加わった人間の心の内を見つめたい、というのが取材の狙いだった。彼が携わった残酷な実験の一つは、ハルピン郊外の草原で、十字架にくくりつけた人々に細菌爆弾を落とすものである。傷つきもがく人々が生体解剖のために運び出された後、肉片が飛び散る現場へ駆け寄り、消毒するのが役目だった。彼は戦後度々この実験の夢にうなされていった。その思いを知る中で私たちは中国へ渡り、実験の草原を訪ねた。

同年秋、旅の様子を描いた「流転—



その罪だれが償うか」を連載。翌夏J
C J賞をいただくことになったのだが、
授賞式で約半時間、スピーチをせねば
ならないらしく困った。

連載執筆の折に考えたのは、読む人
たちが、私たちとともに旅をしている
ような思いになれる文章にしたい、と
いうことだった。悲しみや不安、後悔
苦しみ…。戦争の加害の記憶を、自分
とはまるで無縁のことではなく、現在
の暮らしの風景とひと連なりのものと
して感じてほしい、そう思ったのであ

る。

結局それが果たせた文章になったと
は、あまり言えない。ただ旅の写真に
は、拙い文章が表現しきれないものが
確実に写ったように思う。草原に立つ
た時、彼は一人ふらふらと歩き出した。
小さな白い花を見つけると、それを摘
み、実験場跡地であることを記した碑
に捧げた。ひざまずき、出稼ぎ時の大
けがの後遺症で震える片手を、もう一
方の手で押さえ、まるで何かを抱きし
めるようにして祈ったのだった。深く、
深く頭をたれて。

言葉を幾万重ねるよりも、はるかに
たくさん大切なことを語る数枚のカッ
トが残った。受賞スピーチでは、その
場に立ち会った震えるような思いや、
文章を紡ぐことの難しさやジレンマを
語ろうと考えた。

高知は市街地から少し車で走れば、
深い山になる。そこには思いもよらぬ
知恵や暮らしがあり、取材者としては
面白い。例えばある九〇歳の老人は、
奥深い山のでっぺんに一人で住んでい

た。電気もガスもない。「みえこ」と
いう名の雌牛だけが同居人だった。向
かいの山に日が昇れば目覚め、牛を放
つ。日暮れ時になると、老人は山に向
かって「みーえこー」と何度も叫ぶ。

すると藪の中から突然のっそり牛が現
れ、老人の手に引かれ家に戻り、また
一緒に眠るのである。こんな話、文章
や口で説明するよりも、山で当の老人
に会わせたい、と思ってしまう。

そんな話を枕に、長々とスピーチ原
稿を書き、式に臨んだ。勘違いが分かっ
たのは壇上に立ってからである。「そ
れでは七分でお願いします」。えっと
思ったが、頭にあるのは、ポケットに
くしゃくしゃに丸めた三〇分用の原稿
の中身だけ。腹をくくり、大変な早口
で話し始めたが、枕の「みーえこー」
というくだりで、メモが回ってきた。
とっくに聴衆は「一体何を話したいの
だろう」という顔で静まりかえってい
たが、私の「…もう終わってください
ということなので終わります」という
一言で大爆笑になった。「ま、これも

いいか」という気がして、自分も笑った。

翌々年、高知では脳死判定が行なわれ、殺到したメディアのありようが問題になった。その時の連載では二度目のJ C J賞をいただいたが、この時から私の中では、メディア自体が抱える問題が大きくなっていった。

どん底の底が抜けた今のひどい政治、社会状況をつくり、支えているのは、メディア自身にほかならない。もっと言えば、その組織の中で、自ら考えることを放棄した個々にある。じゃあ、お前はどうなんだ。J C Jは、赤面のエピソードとともにそのことを私に強く考えさせる。

『「いのち」の近代史』

藤野 豊

東京都東村山市に多磨全生園という国立療養所がある。一九〇九年に設立されたハンセン病患者の強制隔離施設である。この全生園の入所者自治会が実質的に編集している月刊誌『多磨』の編集部から、日本のハンセン病史を連載してほしいという依頼を受けたのは、一九九一年の夏であった。連載は一九九二年の一月号からで、期間は一

年間、第一回の原稿締切りは一〇月末であった。タイトルは『「いのち」の近代史』と決めた。深く考えた結果ではなく、ふっと思いついたタイトルである。連載開始後、編集部から連載が好評だからとおだてられ、当初の一年という約束を延長して、ついに足掛け一〇年も連載する羽目になり、完結したの

は百回目、二〇〇〇年五月であった。まさかこれほどの長期連載になるとは思いもかけなかったことで、結果的に四百字詰め原稿用紙で千二百枚を超える分量となった。この間、一九九六年四月にはハンセン病患者を隔離し続けた「らい予防法」が廃止され、一九九八年七月には隔離政策による人権侵害に対し国家賠償を求めるハンセン病回復者による訴訟（らい予防法違憲国賠訴訟）も熊本地裁で開始されていた。まさに、ハンセン病をめぐる社会が大きく動き出している渦中で、『「いのち」の近代史』を書き続けたことになる。これを一冊の本にまとめたいと、いくつかの出版社から申し出があったが、原稿の量を見て、みな二の足を踏むなか、京都のかがわ出版が無謀にも出版を引き受けてくれた。こうして、同社から『「いのち」の近代史』が刊行されたのは、二〇〇一年五月一日であった。定価は七五〇〇円、こんな高価な本を買う人が何人いるだろうかとの不安がよぎった。

その十日後の五月一日、熊本地裁は国の隔離政策の過ちを認め、国に賠償を命じる判決を下した。突如としてテレビや新聞で「ハンセン病」の文字が躍った。そして、『いのち』の近代史』にも注目が集まり、八月二五日、思いもかけなかったJ C J特別賞をいただくこととなる。

この本に取り得があるとすれば、まだ社会がハンセン病問題に関心を懐かなかった頃から全国の療養所を訪ね、入所者から隔離の被害をうかがい、入所者が大切に保存されてきた原資料を読ませていただき、それを叙述に反映させたことだけであろう。わたくしが執筆から刊行まで一〇年の歳月をかけた著作は、これだけである。

したがって、『いのち』の近代史』はわたくしの著作のなかでもっとも記憶に残る一冊である。しかし、国賠訴訟がなければ、この本が社会の注目を集めることもなく、J C J特別賞の受賞もなかったはずである。さまざまな妨害にもめげずたたかった勇氣ある原

告のお陰で受賞できた。わたくしは、今でもそう確信している。

この「居心地の悪さ」はなぜ

高田 昌幸

(北海道支部／新聞)

北海道警察裏金問題の報道によって、二〇〇四年にJ C J大賞をいただいたから、そろそろ一年になる。受賞はうれしかった。数え切れない戸惑いや種々の圧力の中で、自分たちの報道は間違っていないという自信は、J C J大賞が初めて与えてくれたといっても過言ではない。

ただ、賞をもらった後も、ずっと居心地の悪さを感じていたことは、正直に告白しなければならぬと思う。一連の裏金追及報道は、その年の新聞協会賞や菊池寛賞にも選ばれたが、居心地の悪さは消えるどころか、さらに増幅した感覚を抱いている。

ひとことで表すなら、「こんな程度

の仕事でもらっているのか」という気持ちである。嫌らしい意味での謙遜などではなく、当時も今も、私自身は心底、その気持ちが拭えない。そんな思いを他社の記者仲間と話したところ、「取材班の現場記者は一年以上、文字通り、まともな休みも取らないで難しい取材を続けたわけで、それへの評価だから素直に喜ぶべきだ」と言われた。そうかもしれないが、でも、この居心地の悪さは違うのだ。

J C J大賞の過去の受賞一覧を眺めていると、そうそうたるジャーナリストや作品が並んでいる。日本のジャーナリズム史に残る偉業の数々だ。ところが、年が新しくなるにつれ、受賞作

が持つインパクト、社会に与える影響度は少しずつ、少しずつ薄れているのではないかと感じる。

もちろん、それぞれの受賞作や応募作は、すばらしい仕事であり、私のような者が各々の仕事について、軽々しく評価すべき性質のものではない。誤解しないでもらいたいのだが、私が思うのは、日本のジャーナリズム全体の力量低下である。二〇〇四年の応募作を見ても、日本の主要メディアとされる全国紙、キー局からの応募がほとんどない。おそらく、応募に値する仕事が少ないようになってきた結果ではないか。

日本の大手メディアが瀕死の状態にある中で、毎年毎年、J C J 賞には多くの優れた仕事に応募されてくる。今年もこの先も、それは変わらないはずだ。全国的には目立たなくても、これ以上はない鋭さで社会の矛盾を突く報道も数多い。

しかし、どうせなら、瀕死のメディアなど存在しない状態で、賞をもらいたかった。それこそ無数の各メディア

関連企業や個人個人の記者がジャーナリズムのあるべき姿を取り戻し、高いレベルで競争し、それらの報道が社会をよりよき方向に変えていく。そんな

なことが切れ目無く起きている中で、審査してもらいたかったと思う。

〈編集部注〉高田昌幸氏は、受賞当時は報道本部長（道警裏金問題取材班代表）

黒田新人賞受賞者と墓前で

大谷 昭宏

二〇〇〇年七月二三日、私の恩師とも言うべき黒田清さんが亡くなった。大阪読売社会部以来、三〇年にもほぼ

るおつき合いだった。でも悲しんでいる暇はなかった。一緒にやってきた黒田ジャーナルの整理、スタッフの入れ替え、私の個人事務所の設立。そんなとき、心にコツンと響くことがあった。



黒田 清氏

私たちの仕事は新聞社、雑誌社、テレビ局から深夜といわず、コメントを求められることが多い。そんなコメントを依頼してきた記者たちと話して



新人賞創設の2001年8月15日にあいさつする大谷昭宏氏

いるとき、「黒田さんには、深夜だろうと、早朝だろうと、気さくにコメントに応じていただき、本当に感謝していました。そしてついでお小言もいただいて……」。えっ、お小言？ 聞

けば、そのお小言はみんなに共通していた。とりわけ若い記者には、コメントのあと、こんなことをつけ加えていたのだ。

「キミな、きようは急ぎやからしゃあないけど、やはり新聞記者は相手の顔を見て、目を見ての取材が大事や。今度、暇なときにいつでも事務所遊びにきなさい。いっぺんゆっくり話そうや」

締め切り間際で忙しいことがわかってる黒田さんはそうつけ加えて、返事も待たずに電話を切ることが多かったという。なかには「ホント、一度、お訪ねしておけばよかった。あとの祭です」と言って涙ぐむ記者もいた。

そんなとき、私のなかにふつとある思いが浮かんできた。黒田さんが亡くなった翌二〇〇一年から、私はJ C J賞の選考委員をおおせつかついてきた。そこには、私の大先輩たちも多いし、黒田さんと同年代の方もおられる。加えてJ C Jのために長い間、尽くして

こられた亡き斎藤茂男さんには、黒田さんが主宰していたマスコミ塾の講演にもきていただいた。どうだろう、若い人たちが大好きだった黒田さんの名を冠したJ C J黒田清新人賞をつくってもらえないだろうか。

もう一つ、黒田さんの二人のお兄さんは、誇りに思っていた弟、清さんが自分たちより先に逝ってしまったことを心の底から悲しんでおられる。そんなとき、若い人を元気づける黒田さんの賞ができたら、どんなに喜ぶか。二人のご遺族の賛同も得て、私はJ C Jの諸先輩にこの思いを伝えることにしたのだ。

そうそう、それと黒田さんが生きておられてこの話を聞いたら、大阪人のことだ。

「大谷な、若いこれからのジャーナリストは金があるんや、どうせ賞を作るんやったらやっぱ賞金はあるでえ」
 そう言うに決まっている。生前から勝手なオヤジや。そんな申し出をJ C Jのみなさんも快く受け止めて、この

新人賞は二〇〇一年に創設された。

新人賞は二〇〇五年の海南友子さんで、これまでに四人となった。黒田さんのお兄さんともどもいつまでもこの

賞を続けたい。そしていつの日か賞の受賞者たちと、黒田さんの墓前で同窓会を開いてみんなの活躍ぶりを見せてあげたい。そんな夢も思い描いている。

「自分」にきびしく問いかける

亀井 淳

(J C J賞推薦委員)

J C Jとの関わりはいつの間にか四半世紀ほどになるが、最近ではJ C J賞にかかわっていい経験をさせてもらっている。

「賞」の仕事は当初は気が重かった。私はさしたる読書家でもないし、新聞や放送をたんねんにウオッチする人間でもない。それがたくさんの応募作を仕分けし、甲乙のランクをつける作業などできるはずはないと思っていた。しかし、やってみると思いがけない秀作にぶつかったり、ベストセラーが案外つまらなかったり、やはり新しい認

識の機会なのだなど少しずつ分かってきた。

途中を省略して、いきなり最新の経験を書こう。今年には推薦作業の初期の段階から一種の「カン」が働いた。まず、応募の出足が早く、出版を中心にたくさんの作品が集まり始めた。むろん、多いからいいというものではない。駄作も少なくはなかったが、すでに一家をなしている「大家」「著名人」の名著、名著が多いのには驚かされた。J C Jの賞とはどのようなものであるべきか。振り返って記録を読むと、

広津和郎、松本清張、土門拳といった大物が受賞する時期があり、若い人が表彰される時代がありで、基準もトレンドも必ずしも一定ではない。四八年の歴史とはそういうものなのだろう。

であれば、過去や経験にとらわれる必要はない。そこで討議の上で合意したのが著名人は「敬して遠ざける」ことだった。その結果、若い人や地方で活動する人が浮上した。

大賞を得た綿井健陽氏のイラク戦に取材したドキュメンタリー映画「The Birds」は劇場で見たが、見終わってしばらくは席を立つ気になれず、帰途新宿の雑踏を歩く自分が恥ずかしかった。ここは戦火のイラクからあまりにも遠いが、自衛隊の派遣などで実は深くつながっている。そういう混乱を与えるのが作者の目的なのだと次第に分かってきた。

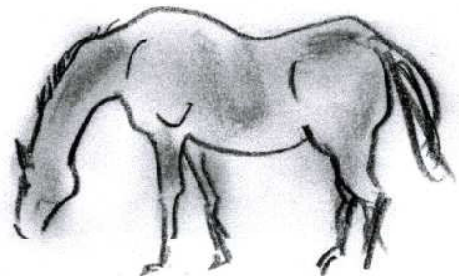
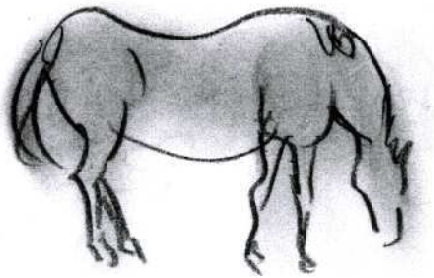
黒田清J C J新人賞の海南友子氏は最初から「新人賞」を目指して応募してきた。日本軍の放置毒ガスの被害に苦しむ中国の人々の姿を長く、繰り返し

し映し出す。手慣れたテレビ制作者ならけっしてやらない方法は、見る者にせめて何分かの苦痛を共有させることと、既成の映像処理法に対する痛烈な批判なのだと思う。

J C J市民メディア賞の「辺野古の闘いの記録」（大島和典氏撮影）は、文字通りたたかいに明け暮れる人びとの姿を撮り続けたものだが、小舟から撮った長回しの映像を見ながら「船酔いをした」という人もいた。見る人の生理に訴えるほど真剣な撮影だったということだ。たいへんな重労働だが、辺野古のたたかいが続く限り、撮影も続くことだろう。

受賞七作のうち映像の三作に触れたが、他の四作を含めて、作者はいずれも対象を描きながら「自分」にきびしく問いかけている。

すぐれた技術を持ちながら、謙虚でさわやかなジャーナリストたちと触れあう機会を持つのは、嬉しいことである。



IV

志高き先輩たち

齋藤茂男さんに取材されて

守屋 龍一

(事務局長／元講談社)

一九八六年のJ C J総会で、今は亡き齋藤茂男さんが、約三カ月前の二月一日に事件が発生し大きな社会問題になっていった、東京都中野区立中野富士見中学二年生S君のいじめ自殺事件に触れて、ジャーナリストの役割とJ C J活動の方向について、問題提起をした。

その内容は、事件の背景にある学校教育や地域社会の構造にメスを入れ、センセーショナルリズムに走らず、綿密な取材による本質の抉出を求めるものであったと記憶する。その総会に参加していた私は、おおむね賛成しながらも、何かきれいごとめいた提起に不満を覚えたのだろう。会員になって日も浅かったが、思い切って発言した。

「この事件をとりまく地域社会や教育環境を取り上げるのは否定しないが、きわめて重要なのはS君の家庭だ、なぜそれをプライバシーに関わるから、

タブーにしているのか疑問である。もっとメディアは親と子の家庭環境について掘り下げるべきだ。なぜ彼が両親に相談できず、おばあちゃんのいる東北

に向かい、その下車駅の構内トイレで首吊り自殺したか、思いをいたすべきだ。両親ともに、社会倫理にもとる行為にかまけ、多感な時期にある子供の気持ちを汲まず、相談にもめげず放置してきた実態が問われなくていいのか、そう地域では多くの人々が思っている」
こんな内容だったと思う。実は、その当時、私には当該中学校に通う一年

生の息子がいたため、事件発生後、他人事とは思えず、中学生の子を持つ父親の交流を図ろうと、すぐへおやじの会を発足させ、地域活動を始めたところだった。後で知ったのだが、すでに地域ではS君の両親を巡る深刻な噂が広がっていた矢先のいじめ自殺事件であった。だからこそ私は、親と子のふれあいや家庭を重視する考えに、取り憑かれていたのだろう。

四、五日たったころ、齋藤さんから私の職場に電話がかかってきた。「総会でのあなたの発言が気になっていた、一度話を聞かせてもらえないか」という。後日、職場の近くにある喫茶店でお会いした。齋藤さんは、S君を巡る家庭や地域の反応についてオフレコでいいから、事実を教えてほしいという。そのあとは質問を織り込みながら、約二時間半にわたって私の話を傾けていた。

齋藤さんは「あなたの話を聞いて、表面からはうかがえないリアルな事態がよく分かった。ありがとう。ただ両

親の、倫理に反する行為にばかり目がいき、そこにだけ事件の責任を求めていくと、スキャンダリズムに足をさらわれ、本当のことが見えなくなる危険だってあるんですよ。彼らだって、大きな社会変化の犠牲の一例かもしれないですからね」と言われた。最後に「取材というのは自分自身にさえ分かっていないことを、分かるためにする作業なんです」と、自分に言い聞かせるように、小さな声で付け加えた。なぜそんなに斎藤さんは、執拗とも思われる取材を私にされたのか、当時は正直に言って、いまひとつ掴めなかったが、後に『父よ母よ!』『事実が私を鍛える』『妻たちの思秋期』などを読み、その先見の明に驚かされた。

一九八五年は、「金曜日の妻たちへ」というTVドラマが不倫をあおり、プラザ合意、NTTの誕生、そしてバブル景気に沸いていた。上記の著作は、その前後に起きる社会の歪みや構造変化を、すでに予見し、事態の進行を的確に捉えていたのだ。斎藤さんのルポ

ルタージュの目が生き生きと輝く著作の意味と業績の偉大さに、あらためて気付かされた。

と同時に斎藤さんの生涯を貫くジャーナリスト精神の真髄に、その後もJC

秦さんに大記者の気概

岩井 善昭

(北海道支部／元新聞)

私がJCJに入会したきっかけは、一九八五年の夏に大阪で秦正流さんにお会いしたからでした。秦さんは朝日新聞のポストから完全に引退して一人のジャーナリストに戻っていました。

一九七〇年、労務担当役員だった秦さんを囲んで当時の組合執行部メンバーが集まりました。秦さんが熱っぽく語ったのは「ジャーナリストとは編集局の記者だけでなく、どの部署にあらうともジャーナリストでなければならぬ」ということでした。いまだに正体不明

J活動を共にすることで、また斎藤さんの著作を講談社文庫に収める仕事を通じて、触れることができたのを、私は幸せに思う。

の「赤報隊」などからの脅迫や外部からの圧力が朝日に集中した状況にあつて、全社一丸となって屈しない覚悟を私たちに求めたのです。また、当時の中曽根政権による米国への追従を嘆き、国を売るものとまで言い切っていました。その言葉の激しさに私は驚くとともに、国際報道に通じた往年の大記者の気概を感じました。秦さんのそういうお話を聞いて、札幌に戻った後JCJに加わりました。秦さんは一九八六年にJCJの代表委員になられました。

* 相沢さんの遺志について

入会当時の北海道支部の代表委員は民放の相沢竜一さんでした。相沢さんは、それまでキー局に占められていた夕方のニュース帯がローカル局の番組として確保できるようになったことを評価して、現場の奮闘にJ C Jが応援

できるようになりたいたと語っていません。

新聞・放送・フリーランスの地道な努力と業績を北海道支部が何らかの形で評価し、制作現場や取材現場のジャーナリストを直接激励したというのが相沢さんの遺志であったように思います。

三人の先輩の話

矢野 英典

(広告支部)

* 今井康之さん

一〇年前の千葉支社勤務の時、先輩から頼まれた。「お得意さんが、神田神保町あたりで接待の二次会用に高級雀荘を探している。お前はあのあたりに詳しいだろう」と。J C J事務所に聞くと道家さん(個人会員)が電話口に出て「岩波の今井さんが知っているかもネ」と例によって軽く言う。

その口振りから、せいぜい三、四〇

歳代の若い社員かと思いきや、番号にダイヤルするとすぐ今井さん本人が電話口に、「ゴメン、オレ麻雀やらないから知らない」とのこと。「今時麻雀もやらないとは、真面目なサラリーマンだな」と思っただけでその場は終わった。後でわかったが今井さんは岩波書店の常務だった。失礼しました。

* 故・斎藤茂男さん(代表委員)

硬派専門の斎藤さんが執筆した『妻たちの思秋期』。あの金ツマ(金曜日の妻たちへ)ブームの頃だ。夫とうまくゆかない主婦の不倫願望を斎藤さん独特の粘っこい取材で追ったのであると胸をときめかせ、自宅ですっとページを開いたら、内容の趣旨が全然違っていた。期待はずれだった(それはそれとして、このタイトルは名コピーだ)。

* 故・松平恒夫さん(運営委員・広告支部)

地域の有線放送の草分けとして講演依頼が全国から引きもきりなかった。彼は電通・名古屋支社時代に労働組合運動にかかわったため、仕事では干されていたのだが、独力でこの分野を開拓して日本の第一人者となった。有線放送にかかわったキッカケは、「アメリカでのシンポジウム開催を知り、その将来性にかけてようと休暇をとり自費で参加した。シンポの内容を伊藤洋子

さん（広告支部）が編集していた『宣伝会議』に書いたのが始まり」とのこと。これぞホントの「電通鬼十則」の精神と納得。以降私も仕事にむかう指針として松平さんの精神を心がけては

いたのだが。
（★電通鬼十則：今日でも会社への忠誠心を表現するPR手段として、背後の壁に貼っていたりする局長をたまにみかけます。）

J C J へ導いてくれた C B C の二人の先輩

大西 五郎

（東海支部／中部日本放送）

私とJ C Jとの出遭いはほぼ半世紀前に遡ります。一九五七年に大学を卒業して中部日本放送（C B C）に入社し東京支社にあった論説室に配属され、ニュース解説の資料整理や番組収録の作業を行っていました。

当時はまだラジオだけの時代でしたがネットワークも結ばれておらず、民放ではニュースは新聞社から提供を受けるのが普通でしたが、中部日本放送は支社に報道部を置き、国会や首相官邸の記者クラブに記者を派遣して独自

にニュースを取材、放送していました。さらに一九五七年に論説室を設けてニュース解説の番組を制作することになりました。東京支社がその中心になりました。初代の論説室長がかつてのNHKの解説委員で支社報道部長だった大木貞一さんでした。大木さんはかつて新聞・放送単一と言っていた時代の放送支部の委員長を務めた経歴のある方です。

確か一九五七年だったと思いますが（あるいはその翌年だったかもしれない

せんが）、大木さんに連れられてJ C Jの8・15集会に行ったのが私とJ C Jとの最初の出遭いです。その時はまだ先輩ジャーナリストのお顔もお名前もわかりませんでした。大木さんがいろいろな方と話をされるのをそばで聞いていて、諸先輩の造詣の深さにただただ驚嘆し、J C Jというのはすごい人達の集まりなんだなと思ったのを覚えています。

その後、論説室にはかつて共同通信にいた松尾博文さんが入ってこられました。松尾さんも新聞・放送単一時代に共同通信の組合で活躍された人です。私はこのお二人からニュースの読み方（分析の仕方）を学び、ジャーナリズムの役割の重要性を学び、それが私にこれまでJ C Jの一員として活動する源になりました。

一九五九年に大木さんが本社論説室長になり、私も本社に転勤になり、大木さんの下で仕事をしました。その少し後に松尾さんも本社に来られました。そこからJ C J東海の歴史が始まった

のです。

CBCのニュース解説は大木さん・松尾さんの解説の他、その時々、ニュースに詳しい専門家を本社や東京支社のスタジオに招いて話を聞くということも取り入れていました。この人脈がJCJ東海の第一回8・15集会（一九七三年）に名古屋市の本山革新市長や愛知県知事選挙の革新候補として活躍された新村名古屋大学名誉教授の出席につながったのです。JCJ東海が誕生する前にも大木さんがCBC常務・報道担当だった鈴木重治氏をIOJ大会に送り出すなどの活動をしていました。また松尾さんが名古屋・東海地区の学者・文化人を集めて、毎月一回その時々々の焦点になっている問題について専門家から話を聞くという「二〇世紀懇話会」という集まりを主催し、ここに集まった方々が機関誌の「東海ジャーナリスト」に寄稿して問題を提起してくださいました。また名古屋とゆかりの深い桐生悠々についてのシンポジウムを開いたりしました。

松尾さんはその後、立命館大学教授・

近畿大学教授としてマスコミ研究者の道を歩きました。途中ローマに研究留学し、帰国後イタリアのジャーナリズム運動の歴史と問題を大学の紀要

に発表したりして、一昨年亡くなるまでJCJ東海の理論的支柱であり続けました。私のJCJ運動はこの二人の大先輩に導かれて進んだのです。

仲築間氏インタビュー

林 豊

(放送部会／エフエム西東京)

JCJ設立五〇周年を迎えるにあたり、ひとつの企画が浮上した―それは、放送部会のメンバーで最年少にあたる私、林豊と放送部会の設立メンバーで「マスコミ九条の会」の呼びかけ人の一人でもある仲築間卓蔵氏との対談である。そこで私は、放送に携わるなかで疑問に思っているニュースの取り上げ方、扱い方などについて聞いてみた。普段の放送では、新聞各紙、インターネット配信からの情報などを取捨選択し朝のNEWSとしてリスナーに伝え

ている。そのなかでどのNEWSを選ぶべきか、この記事は見方によっては偏りすぎではないか？その場合、そのまま読み伝えてよいものか、などの疑問を感じていた。

インタビューのなかで仲築間氏は、伝える側のリテラシーの必要性を唱えていた。いわば物事の背景を深く読み解く力を磨くことだそうだ。

配信され手元に届くNEWSをそのまま何も考えずに伝えていくことは、危険なことである。そこに両論併記が

存在するのか、一歩立ち止まって考えてみる、これがリテラシーの力を磨く秘訣だという。

二〇〇一年九月一日、アメリカ合衆国で起きた同時多発テロ。その後、行なわれたブッシュ大統領の演説は、すさまじいものであった。大統領が『これは戦争だ!』と高らかに宣言すると聴衆たちは拍手喝采し、その後も大統領が一分の演説をすると聴衆が三〇秒の拍手喝采、これを繰り返すというものだった。その直後からアメリカのマスメディアは熱病に冒されたかのごとく戦争協力報道をするようになった(後にアメリカでは、この戦争協力報道は犯してはならない間違いだったと表明するメディアもあった)。

ではこのケースの場合、放送に携わる人間として、どのような配慮が必要だったのだろうか? 仲築間氏は、この場合こそマスコミに携わる人間のリテラシーが問われるケースであり、立ち止まって両論併記で物事の背景を読み取っていくことをしなければならな

いと力説する。これはその後起きた日本での自衛隊イラク派兵に関する一連の報道にも言えることであろう。

仲築間氏はよくハインリッヒの法則について(小説『沈まぬ太陽』の一節を引用して)話すことがある。ハインリッヒの法則とは「一つの事故が発生した場合、その背景にはインシデント(事件)には至らなかった三〇〇のイレギュラリティ(異常)がありさらにその陰には数千に達する不安全行動と不安全状態が存在する」というものである。ゆえに小さな事故が発生した際のメディアの調査報道は、いざれ起こりうる重大事故の発生を抑制する大きな意味を持つのだが、現代のワイドショーやNEWS番組では、小さな事故の報道というものは、見た目に地味で視聴率が計算できないため、敬遠されがちだという話も聞く。

しかし、過去に起きた重大事故をハインリッヒの法則で紐解くと、そこには起こりうる必然性を感じさせるほどそれ以前に小さな事故の存在があることが少なくない。たとえば一九八六年日航ジャンボ機の墜落事故。そして二〇〇五年のJR西日本福知山線の脱線事故などである。

小さなミス・軽傷事故を見過ごさずに立ち止まって考え改善することができれば、重大事故には発展しないだろう。そして仲築間氏は、その報道をしていく機関であるメディア自体にも、重大事故が起こりうる可能性があるという警鐘を鳴らす。

前出したアメリカでの戦争協力報道のように、日本のメディアが、ある方向へ偏ったものとなってしまう危険性もあるというのだ。過去にも戦後の日本のメディアは外圧によって、放送を中止したり、内容を改変したりする事件が起きている(一九六二年、RKB毎日『ひとりっ子』放送中止、一九六五年、日本テレビ『南ベトナム海兵大隊戦記』放送中止etc)。仲築間氏は、この頃から労働組合に関心をもつようになり、やがてJCJとしての活動に参加している。マスコミメディア

が外圧によって報道内容が歪められてはならないの言うまでもないが、そのことで国民の知る権利が著しく侵害されてしまうことは、やはりあってはならないことだと今回のインタビュ

を通して改めて感じた。J C Jおよび放送部会はどういった視点で活動を続けているが、大事なことは現代のメディアに関わるすべての人達がこういった視点を持ちえている

かということであろう。私はこの活動に参加することによってその重要性を深く認識することができる。

「老いの繰り言」

—— 関東大震災の思い出

山本

進 (元毎日新聞)

八七歳を迎えようとしているオイボレが、後世に語り残しておきたいことは、色々ありますが、その中の一つに、関東大震災をあげなければなりません。一九三三年の九月一日、五歳の少年の忘れられない思い出は、東京と横浜という大都市を灰燼に帰した大災害でした。

道路に面したお店の事務机の下にしがみついて南無阿弥陀仏となえている少年の眼には、遠くに見える二階家があつという間につぶされて一階だけになってしまったのを昨日の事のように覚えています。その日の夜をすごすのに、私たち三人家族は着のみ着のまゝ根岸の競馬場へと避難しました。競馬場の馬小屋で一夜あかした日の早朝、目をさました私の眼には馬の長い顔がとびこんできました。こういう細かい情景を語りだせば、さりがありませんが、この際語り残しておきたいことは、官憲も市民も、「鮮人暴動」という「流言飛語」に踊らされた悲劇でした。

さらに付け加えれば、震災後三、四日たつてから避難民を大阪に転送する客船に私たち家族も乗り込もうとして横浜の大棧橋に向かった時、灼熱の太陽に照り付けられたまま鎖でつながれている半裸体の若者の「鮮人」たちでした。暑い日ざしに照らされた彼らの肉体からは、大粒の汗が流れていました。

当時五歳の少年にどうしてこういう情景が生まれたのか、知るよしもありませんでした。日本近代史の語る残酷なドラマのひとつとして、震災直後、「朝鮮人が動乱を起こそうとした」というデマが飛びかき、軍隊をはじめ、青年団員などによって結成された自警団が、朝鮮人や中国人に対して拷問、虐殺が行なわれ、一九三三年八月三十一日の朝日新聞夕刊の記事によれば、山田昭次教授(立教大学)の「日本近代史」には、「関東一円の朝鮮人数千人が殺された」という大悲劇がくりひろげられたと書かれています。



この大惨事を見て見ぬふりをしつづけるわけにはいかな
いと慰霊碑の建立を思いたったのが、当時小学校二年生の
石橋大司さん。その碑は、横浜市西区の久保山墓地にあり、
しかも碑の裏面には、「少年の日に目撃した一市民建立」
とだけ記されているそうで、同じ朝日新聞の記事によれば、
石橋さん一家も、根岸方面へ避難したが、途中、荒縄で後
ろ手に縛られた血まみれの朝鮮人の死体を目撃したそうで
す。しかし避難した家族の誰も、この事件を口にせず、石
橋さんの良心を苦しめる重荷となっていたが、五九歳とい

う老人になって、彼は、私費で慰霊碑を建てることで、こ
の良心の重荷に答えようとしたということです。大震災か
ら数えて五一年目の隠れた善行でした。

過去の克服というきびしい課題から目をそらすことで、
安らぎを求めたがるのが人情だが、一九二〇年に生まれ、
ナチス・ドイツから戦後ドイツの大統領と波乱万丈の人生
をおくってきたワイツゼッカー氏は、「過去に目を閉じる
者は、現在も見えなくなる」と語っている。軍国主義と敗
戦を経験した私達も、かみしめてみる言葉ではなからうか。

J C J アクション沖縄取材ツアー (2000. 5. 27~29)



辺野古の海をのぞむ団結小屋の前。「ジュゴンの会」など地元のみなさんと



普天間基地の移設先とされる辺野古の海辺

「心に触れた」アクション沖縄取材

**この海に基地つくらせぬ
サミット利用、押しつけ拒否**

なにかを暗示する光景だった。沖縄サミットのため繰り代々、育てられ敬えられ、恵みを受けしてきたの美しい上げられた辺野古海岸の「ハーリー」小舟の競漕。丸太 海に平水久的な米軍基地をつくらせるとは、何故かあるまじいような豪腕の米海兵隊員たちも、地元民には全く気がいらぬ。そのたがいを支えるのは、私を日本人一人ひとりがたない。その時、ふと実感した。住民たちは、先祖からの意思であると。(小島 修記者 写真・藤原輝心)



ハーリー(小舟)競漕に出る腕にイレズミをした屈強の米海兵隊員(キャンプ・シュワブ)＝見た目には有利かと思われたが、結果は獵師チームの圧勝

V

それぞれの出会い、
きずなから

言論出版の自由と私

田沼 祥子

(出版部会／元岩波書店)

私が最初につくった書籍は、『実験の技術』（眞島正市著 清水書房 A 5判一三〇頁 昭和二十二年 定価二十五円）という本です。津田塾専門学校物理化学科の生徒だった十八歳の時、学資に困って相談した恩師三石巖先生が世話して下さったアルバイトでした。同じ頃、「東京民報」という新聞に、「空はなぜ青い」などという科学解説記事を書きました。

以来、約六〇年、四〇〇冊近くの本を企画編集し、「科学よみもの研究会」その他のサークルなどで、数知れぬほどの本の紹介、解説記事などを書いてきました。論じ合う仲間と著者と読者に恵まれ、仕事をたくさんすることができました。

特に、四二年間在職した岩波書店は、伝統を重んじると同時に革新をめざす職場であり、理想を追求する会社と労働者が、私を育てて下さいました。おかげで技術を身につけ、多勢の方々にたすけられながら、今日まで働ける幸せを得ました。

創立以来、ジャーナリストの会員です。しかし、長い間、会費会員で、自分にはそう見えませんでした。在（私にはそう見えませんでした）ではない、と思っていました。岩波書店在職中、お手伝いをしていたブックレットがJCJ賞を受賞した時、「どうしても一緒に行こう」と安江良介さんに誘われ、8・15集会に参加した時も、なんとなく場違いな感じがしました。もちろん

JCJが志の高い集団だということは良くわかっていたので、岩波書店退職時、社内で積み立てたお金を託し、「出版で働く女性の職業技術向上に役立てて欲しい」とお願いしたことがあります（「出版女性の会」というサークルの基金にしてくださいました）。

そういう私が、このごろ機関紙の編集企画を考へては、代表委員の橋本進さんに話すようになりました。思想の自由も言論出版の自由も、守ろうと思う人が「自分で考えて行動して守る」ものだと、本気で考えるようになったからです。

なぜ、そうなったかを次に記します。私の亡夫、田沼肇は不治の神経難病になり、行動の自由も表現の自由もその殆んどを失いながら、一三年間在宅療養を続け、最後まで社会参加しました。「原因も治療法も不明、入院すれば世話がゆき届かないから余命半年」という確定診断後、友人の問いかけに答えたテープには「病人、障害者についての無知、偏見、差別がどんなに人を傷

つけるかを、初めて判ったことを反省している。人間の自由について深く考えるようになったのは難病のおかげだ。もう仕事はできないが、生きて世の中を見続けたい。精神が自由なら、肉体の苦しさは我慢できる」という意味の音声録音されています。

その翌年、彼は障害者手当てをめぐって東京都に行政訴訟を起こしました。最高裁まで争って敗訴しましたが、精神の自由は保たれました。

彼の没後一年程たち、気持ち少し落ち着いて「とにかく生きよう」と思った時、私はすでに七三歳。彼のようになっても精神の自由を保つことは、弱虫の私にはとてもできそうもない、それなら「今できることをやろう」と考えるに至りました。志なかばにして逝った岩崎勝海、安江良介さんから受けたご恩に報いるためにも、ささやかな努力を続けるつもりです。

『沖縄言論統制史』出版のころ

門奈 直樹
(立教大学教授)

J C Jに関心を持ったのは三五年前に遡る。きわめて私的なことだが、当時、二七歳だった私は生まれて初めて『沖縄言論統制史』というタイトルで本を出版した。後で編集者の丸山尚氏から聞いたのだが、出版に際しては大

学院の指導教授で、J C Jの創立に大きく関係した城戸又一先生が私の拙文を出版元の現代ジャーナリズム出版会に売り込んだということだった。城戸先生がどういう意図で私の拙文を持ち込んでくれたのかは先生から聞いたこ

とはない。ただ、この本の出版によって、私の人生は大きく変わった。ジャーナリズム研究者への道を歩き出すきっかけになったからである。

この本の書評はかなり多く出たが、そのトップは共同通信の記者、横田球生さんがJ C Jの機関紙「ジャーナリスト」に寄せてくださったものであった。それからまもなく、新井直之氏も拙著を「図書新聞」で紹介してくれた。新井さんもJ C Jに大きな足跡を残したジャーナリズム研究者だった。このお三人によってJ C Jの存在を私は知った。

拙著が出たちょうどその頃は七〇年安保闘争に向けての学生運動が大学解体の方向で過激化していた時期と重なる。そういう時だからこそ言論の自由と市民権の確立を目指して、社会に影響力を持つマスコミ労働者は闘わなければならぬと強調して、横田さんも新井さんも拙著を取り上げてくれた。

沖縄は本土の敗戦に遡ること二ヶ月前にアメリカ軍の支配下に入るが、そ

の占領下、アメリカ軍は過酷な言論統制を沖縄住民に強いていった。そうしたなかで、現地の新聞労働者たちによって報道の自由の獲得のための熾烈な闘いが展開されたが、その結果、七二年の本土復帰までに沖縄ではそれまで存在した言論抑圧法規の全てが撤廃された。そういう沖縄での闘いの歴史は本土ではあまり知られていない。

言ってみれば、沖縄研究を通して城戸先生、横田さん、新井さんというJCJと深く関わった三人の先達に出会った。その意味で、JCJと私との接点は「沖縄」にあった。

とはいえ、JCJに深く関係するにはまだまだ時間がかった。私自身、仲間を作ったり、グループで行動することが苦手な学徒なので、JCJへの加入はかなり遅れることになる。直接の加入の契機となったのは橋本進、梅田正己、山崎晶春の三氏が私の勤務先にお出でくださり、「戦後五〇年検証セミナー」を行なうから、同セミナーに参加するようにと誘われたことによ

る。一九九四年だったから、一二年前のことである。

このイベントへの参加を境にして、私自身、マスコミ界の現実問題にのりこんでいくことになり、その過程で

出会い、そして仲間たち

― 指針となったジャーナリズムへの問い ―

丸山 重威

(関東学院大学教授・元共同通信)

* 記者生活のスタートに

JCJと初めて出会ったのは、一九六四年三月二六日、共同通信社への入社が決まって出席した「新人歓迎会」の席上である。場所は日比谷公園の松本楼。主催は何年か上の同期生グループだったが、春闘の時期で組合色も濃く、元気のいい会合だった。

いろんな説明や歓迎の挨拶があった中で、「いま、ジャーナリズムにはいろんな問題がある。私たちはジャーナ

JCJとの関わりをいっそう強めたが、そうした人生の軌跡は恩師・城戸又一先生の精神を受け継ぎ、先生の学恩に報いるためであった、と今では思っている。

リストとしての在り方を考えて行こうという運動をしている。共同にも支部がある。ぜひ入ってほしい」とJCJのことを説明したのは、出島靖さんだった。「勉強会もやっている。国際情勢についての報告会がある」という話もあった。私は数日後に開かれた支部の勉強会をのぞきに行った記憶があるが、「面白そうだなあ、入ってみたい」― 単純にそう思ったのが、JCJへの出会いだっただけだ。

春闘のストライキで長引いた研修、

各部を一回りした見習い、東京オリンピックの穴埋めで武蔵野のサツ回り……。そこでは、麻雀の洗礼も受けたが、毎日の支局長が増田弘さん。支局長だった愛波健さんなどと一緒に、れい子夫人手作りの湯豆腐をつつきながら女子バレー「東洋の魔女」の活躍をテレビ観戦した記憶もある。

大阪社会部に配属されたのが、この年の一二月。学生運動に関わることもなく過ごした大学生活のせいもあって、「労働組合」というくすんだイメージが何となく嫌だった私に、「ジャーナリストとしての勉強」を呼びかけJCJに誘いに来たのは、戸辺信重さんである。戸辺さんは、当時大阪支社経済部員。多分組合の支部の執行委員も兼ね、JCJ大阪共同支部の仕事もしていたのだと思う。その後まもなく「本部との連絡係をしてほしい」と言われ、私も次第に活動に引き込まれていった。

* 「いちご」と「アプロ」

JCJ共同大阪支部には、当時、斎藤茂男さんや、大鶴不二人さん、楠良雄さんが居たし、片岡清さん、中豪さん、加藤和雄さん、牧野昭夫さん、有野徳郎さん、井上嘉一郎さんなど、組合やJCJで活動した人たちが数多くいた。一九六五年はベトナム戦争の激化と日韓条約で揺れた年だ。のちにJCJ大阪支部連絡会の母胎になる勉強会「いちごの会」や、朝鮮問題の研究会「アプロの会」が生まれ、活動は広がった。

私は当時尼崎担当のサツ回り。四つの警察と地検、地裁の支部、市役所、商工会議所を持ちながら、夕方、一日を終えると大阪支社に上がったり、泊まり明けの日を利用して、そんな会合に参加した。

この二つの会では、いろんな活動があった。勉強会に招いたのは、当時、ベトナムから中東まで世界中を飛び回っていた評論家・松岡洋子さん、「戦後日本の歴史」を執筆した井上清京大教授、「公害」で一家をなす大阪市大の宮本憲一氏、大阪産業大の中瀬寿一氏

らである。この講師たちと、そこで知り合った人たちが私の目を開いてくれた。河北新報の小島修、山陽新聞の金光奎、沖繩タイムスの徳吉裕、四国新聞の刈田敏造、大阪放送の友成宗吉、機関紙の八田帰一、岡本明男、朝日の為田英一郎、そして、共同通信大阪支社の家主でもあった日経の石埼一二、溝口勉、吉本伸彦ら各氏。つきあいはもちろんいまにつながっている。

一九六六年に入ってまもなく、共同大阪支社の文化担当だった田口哲郎氏が「北の河」で芥川賞を受賞した。現芸術院会員・高井有一氏だ。斎藤さんがいわく、「JCJ機関紙用に、田口さんにインタビューしてくれよ」。近所の喫茶店で話を聞き、尼崎市役所で原稿を書いて、シゲさんに渡した。六年一月号の「ジャーナリスト」に『新聞記者はやめられないね』—記者が記者をインタビュー、芥川賞の田口哲郎さん。—それが私のJCJ機関紙へのデビューだった。

「いちごの会」や「アプロ」の活動

は、翌一九六六年八月の「8・15記念の夕べ」に結びついた。大阪で初めて開いた集会には、北海道新聞の論説を書き続けた須田禎一さんの話を聞いて交流した。こうした動きの中で、共同大阪支部は、共同労組と一緒に、「日中青年大交流」に加藤和雄さんを送り出した。

この「アプロ」で出会ったのが、「朝鮮新報」の金哲秀記者である。私の朝鮮問題へのスタートは、当時約二万人の朝鮮人が生活していた尼崎の経験だったが、金さんとの交流は彼が「北」に帰国する一九八四年まで続いた。私は一九六九年のJ C J共同支部のパンフ「ジャーナリスト」四九号の「朝鮮特集」に、尼崎での国籍問題やK C I Aに突然拉致された実業家の事件など、取材の経験を書いた。「朝鮮問題」は私にとって、日本の現実と日本国憲法の精神のギャップの大きさを知ることだった。文章のタイトル通り、「私を育ててくれたもの」―その重要な一つが、朝鮮問題だった。

「いちごの会」では、「各社の記者は居るんだけど産経がない。誰か誘ってきてくれないか」と言われて、尼崎の記者クラブで誘った相手が後に大阪産経の編集局長になる森本穰君。彼が「僕は尼崎だから、とても大阪には行けないよ。代わりに彼女を誘ってくれ」と紹介してくれた彼の同期生が、産経大阪社会部のアイドル早川智子さん。どここの神様のいたずらか、その後、いままでも人生をとにもすることになっている。

* 七〇年代のJ C Jへ

一九六六年五月、私は大津支局に転職になった。そこで経験したのが、「自衛隊適格者名簿」のスクープである。一九六八年発刊の「マスコミ黒書」の冒頭に紹介された「P記者」は私だが、そんなにカッコいい取材ではない。多くの仲間との共同の仕事だった。大津では、当時中日・大津支局の島田三喜雄さんと出会った。「ジャーナリスト」六七年三月号の「市政記者クラブ

の『ある事件』は私のレポートだった。

大津は約一年で大阪に戻ったが、J C J本部で脱退事件が起き、国労会館で緊急総会が開かれたのは、六七年の早春である。私も大阪支部の代表として出席した。原寿雄さんの批判に、山田昭さんが誠実に自己批判していたことを覚えている。「大阪ではこんなことをやっている」―私も「いちごの会」や「アプロ」のことを話した。やがて、私たちは、大阪の他社の支部の人たち、日経の溝口さんなどと一緒に「大阪支部連絡協議会」を結成し、一九六八年六月、三上正良事務局長の出席を求めて、第一回会員集会を開いた。

東京に戻ったのは、一九六九年八月。「しばらくは静かにしよう」と思っていたのだが、七〇年春、共同労組の新研部長に引っぱり出された。労連の新研部長が坂井定雄さん。彼の外国出張で、秋の新研集会を仕切るハメになり、労連があった京橋の・田口ビルにもちよくちよく行く。勢いそこに同居

していたJ C Jの三上事務局長、事務局員の木谷文子さんとも親しくなった。「七〇年代のJ C J」。良くも悪くも、その時代のJ C Jに大きく関わることになるには、時間はかからなかった。

「イチゴ会」の痕跡

芻田 鑛造

(香川支部／元四国新聞)

「イチゴ」会か「いちご」会か「15」会か。一九六六年、私は四国新聞大阪支社にいた。六六年の新聞手帳をめぐって見つけたのは「イチゴ」。五月一四日(土)と七月二五日(月)に「イチゴ」のメモがあった。後の日は横線を引いて消してある。十一月八日(火)には「15」がある。同一九日(土)に「15締めきり、(右)」とある。「イチゴ」会の痕跡である。この会はそのころ大阪で働いていた若い記者の社を越えた勉強会、共同社会部にいた斎藤茂男さんを囲む会といった風情であった。私が最初に参加したのは二

色浜(泉大津)の合宿だった。テーマも話の中身も覚えていないが、これが「イチゴ会」の始まりだったと思う。イチゴは8・15だから正しくは「15」会なのだろうが。田英夫や松岡洋子の話を聞いたのもこの会で場所は府立労館。梶谷善久、三上正良は本町の喫茶店だったかな。片町駅前の食堂の二階でいっぱいやった記憶もある。田さん以外は故人、呼び捨てでごめんなさい。そういうことが若い記者には本当に刺激的な会でした。いつまでどう続いたのか私にはわからない。痕跡は手帳のメモだけ。し

かしこれがJ C Jとの出会いであることだけは確か。

四〇年経って二〇〇五年、J C J香川支部、良くも悪くもサロンの雰囲気は変わらない。集まってくる面々は記者O B、市民運動の活動家を中心。若い記者、現役さんは少ない。とはいっても〇(ゼロ)ではない。四〇年経って日本ジャーナリスト会議(J C J)を名乗った会に市民運動家がどんどんくるのがうれしいではないか。

香川支部は去年豊島のアースディーに地元紙の論説委員さんを登場していただこうと苦労したが実らなかった。彼の更迭と時期が重なって、その後この社の論調は心配の極みになっている。重箱の隅をついたり、花鳥風月だったり。企業も、自治体も市場原理一本槍で働いただけ賃金を受け取ることでさえ悪のような空気を作り出すのに新聞社が一働きする。

そういう風潮とはたたかわねばなりません。それが私たちの仕事である。



1979年12月「望年会」(青山荘)で(左端・江上、その右・小島、右端・河野、その左・丸山)

豊かな人間山脈の背骨

小島 修

(神奈川支部／元河北新報・赤旗)

もう四〇年ほど前になる。当時は大阪・土佐堀界隈にあった共同通信大阪支社近くのうどん屋の二階座敷。目の前に一枚の名刺がひよいと飛んできた。

「小島君、しばらく」のメモ。裏返すと、「朝日新聞記者 為田英一郎」。

仙台一高卒業以来、一〇年ぶり。東北大で彼は文学部、私は経済だったが、朝日に入って鳥取支局へ行ったとは聞いていた。私自身は河北新報大阪支社編集部に転勤になって半年後。知り合っていた四国新聞の笈田記者に誘われ、毎月一五日の夜、開かれていた「いちごの会」に出席したときの話である。その夜、為田と旧交を温めたことはいうまでもない。

そのころ8・15にちなんで名づけら

れたこの勉強会では、共同のシゲ(斎藤茂男)さんが牢名主のようにいつもじっと座っていた。共同の小マル(丸山重威)、ハナケン(花田謙太郎)、日経の石崎、長谷川、溝口、それに地方紙から徳島新聞の高田、山陽新聞の金光記者らが常連だった。大阪の放送・広告関係者と知り合ったのもこの会が縁だった。のちにその多くがJ C J会員であったことを知る。

とくに若手気鋭のマルちゃん・丸山君とはウマが合ったのか(河北本社当時、同じビルの共同・水藤記者とつきあい、J C Jに入会した事情にもよる)、和歌山・御坊の部落問題調査取材に同行したり、六八年六月、J C J大阪支部連絡協議会の発足にあたっては、規約づくりと共に汗を流したりした。六年の秋、私は河北を辞めて赤旗記者となり、やがて三戸記者(山陽新聞出身)の後を継いでJ C J赤旗支部から本部幹事に選ばれた。そこでまた、共同本社勤務になっていた丸山君とばったり出会った。J C Jが新聞労連書記

局の一隅から追われるように独自の事務所を探さなければならぬ大変な時期で、12チャンネルのガミ（江上）ちゃんらと奔走した。三上事務局長のお守り役？ もしつ、事務局専従の木谷文子さんには苦勞をかけた。その後、J C Jを運営委員会にするなど規約大改正でふたたび丸山君と知恵を借りることになったのだから、縁は異なものである。

さらに岩切事務局長時代、私は事務局次長をつとめ、貧乏団体ながらJ C J賞基金三千万円を集めようと岩切さんとともに提案したのも会員への人間的信頼あつてのことだった。シゲさん、日経の松田浩先輩（東北大の）らと日本プレスクラブに出かけ、代表委員に口説き落とした朝日の秦正流さんとも深くつきあわせてもらうようになった。高校の二年先輩でもある井上ひさしさんを講師に招き、日仏会館を満員にした八・一五の夜と記憶するが、二次会でいすの上に立ち、「J C J万歳！」と叫んだ秦さんの姿を忘れることがで

きない。

共同の新井直之さん、東大新聞研の高木教典さんら諸先輩とともに実に多くの友人をJ C J活動で得ることがで

きた。それは、私が一記者として生きるうえで、どんなに豊かな人間山脈の背骨になったことか。J C Jは私にとつて、かけがえのない存在である。

広告の第一号会員

荒川 恒行
(元電通)

もう大昔のことになってしまったが私が入会したのは確か一九七〇年になったばかりのことであつたと思う。現在は運営委員の中でも年寄りの部類になっているが、当時はまだ三〇代、広告労協の議長をやっていた。

M I C (当時はマスコミ共闘) の仲間であつた民放労連の竹村富彌委員長から誘われてのことであつた。J C Jの存在そのものは当時の私もよく知っていたが民主的な偉いジャーナリストの会と心得ていたし、広告マンだった私のような者が入会出来るとは思って

もみなかった。結果的には三上正良事務局長(当時)の強い勧誘もあつて広告労働者として、はじめてJ C Jの会員となつた。つまり広告人の第一号会員である。それから幾星霜、鈴木四郎議長のもとで隅井孝雄氏(現代表委員)などと副議長を務めたこともあつた。

J C Jも鈴木議長が亡くなり、議長制度を廃して現在のような代表委員、運営委員会制度に変わつて来たのであるが、当時は鈴木氏の後釜にと朝日の編集顧問であつた秦正流氏、共同通信の斎藤茂男氏などを説得に駆けずり回つ



三上事務局長、その右・越明子さん（東京新聞）（1986・6・28 J C J 6・28集会で）

たのを懐かしく思い出す。両氏とも残念なことに故人となってしまわれたが秦さんや斎藤さんたちのご提案によって今日のJ C Jがあるわけである。

私も長く務められた岩切信氏の後を受けて一時事務局長を引き受けさせられる破目になったが現在の出版部会・放送部会・広告支部の発足にいくらか貢献できた程度で何程のことも出来な

かった。ただ多くのジャーナリスト、マスコミ関係者の仲間と知り合うことが出来たのは望外の幸せである。

何せ四半世紀以上の友人が多数ある。しかも信念を持ち無報酬で闘う尊敬すべき先輩、後輩が沢山いるというのは今ではJ C Jだけのことである。語ればつきない。これで打ち止めにしたいが、何よりも五〇年も続いた長い歴史の中で輝かしい闘争の一員に私も加え

ていただいたことに対し亡くなった多くの大先輩、今も元気に活躍している現役の仲間に大きなエールを送って感謝の言葉としたい。

日本ジャーナリスト会議の一層の発展と輝かしい未来を願って、団結して頑張ろう！

〈編集部より——本稿筆者荒川恒行さんは、この原稿を書かれた後、一月九日に逝去されました。謹んでご冥福を祈ります〉

放送部会のバックアップで

林 豊

（放送部会／TBS）

私がJ C J活動に参加したのは、多分一九九七年頃日本テレビの仲築間さんや、今は亡きTBSの戸塚さんから「銀座で飲みながらJ C Jの集まりがあるけどこないか」という「おいしい」お誘いがあったとき、ただ「飲める」の一言でトコトコついて行ったのが始

まりだった。その銀座の小料理屋は、どこにあるのか、なんとという名前の店なのかは、全く覚えていない。

そんな私とその翌年だったか、その次の年だったか総会に出席した。

その頃はまだ放送がJ C Jの中ではきちんと認知されてなく、新聞と出版



1999・2 産廃ツアーで（中央・林氏）

が主流であった。そんな中で参加した私は、総会議長をしていた当時赤旗編集部の人から「放送はどうですか」と突然ふられておたおたし、しどろもどろで放送部会の報告をしたことを覚えてる。

さて、私はその後放送部会選出の運営委員となってしまった。そしてあるうにか、事務局次長にもなって当時の宮本近志事務局長を補佐することになった。

宮本事務局長は二〇〇一年八月突然鬼籍に入るが、私にとっては実に楽しい方だったし、教えていただいたことが山ほどあった。宮本さんは講談社編集部に在籍中、事務局長になって定年を迎え、その後も事務局長としてJ C Jの発展のためにご尽力された。私はその時微力ながらお手伝いできたことを誇りに思うし、その後、事務局長代行から、翌二〇〇二年に事務局長になるが、困ったときは「宮本さんだったらどうしただろうか」ということをいつも考えた。

宮本さんは何かあるとニコニコしながら必ず「林さんはどう思いますか」と私の考えを求めてきた。私は新聞や出版が主流のJ C Jにあっていわば「新参者」の放送の人間に聞いてくることにある種の責任と、これからのJ

C Jにおける放送の役割を感じざるを得なかった。きっと「これからは放送が主体になるかもしれない」と、宮本さんは思っていたのかもしれない。

そればかりか宮本さんは、運営委員の意見、会員の意見を聞きつつご自分で納得できないことは徹底的に議論をした。

今は何でもないインターネットについては、その効用について担当者と議論をされたことがあった。私はこの時「本物」を見た気がした。

二〇〇二年宮本さんの跡を継いで私は事務局長になった。J C Jの事務局長を現役で働きながら任務を遂行することは難しい。しかし、私は放送部会の全面的なバックアップがあったため、本当にづらい思いもせずなんとか三年間の任務を全うできたと思う。

この出身支部、部会の強力な、そして全面的なバックアップがないと、現在の情勢の中でJ C J活動を円滑に進めていくことはかなり難しいと思う。



J C J 沖縄取材ツアーの時の宮本夫妻

茜色をめざして

小石 雅夫

(出版部会／新日本歌人協会)

「私とJ C J」として書くことといえば、私としてはきわめて個人的なことのほうが先に立ってしまう。それは本来のものではないかもしれないが、お許しを願いたい。

J C J 創立五〇周年のうち、私はおおよそ半分ぐらいの関わりである。初め山崎晶春氏からJ C Jの講座や集会などにすすめられて、二、三年間、真面目に参加していた。

そんなある時、出版部会集会後の二次会の席で宮本やす子さんと話していて、私が集会にはよく出ているのに、まだ未入会であると知って、「そんなの駄目よ、入会しなくちゃ」と言下にいわれて入会することとなった。その後の、「私とJ C J」とのつな

がりには、これまた多く、宮本近志氏との縁があることとなるのである。

まず、J C J入会の少し後にひょんなことから私は歌集を上梓した。当時、短歌の団体も結社も知らないままであったが、新聞や歌壇誌や結社誌に取り上げられることとなり、そんななかで、私のために出版記念会を山崎晶春、宮本近志さんらJ C Jの仲間が発起人となって催してもらった。その時の司会を務めてくれたのが宮本さんであった。

その後、宮本さんはJ C Jの事務局長に就き、私も思いがけず新日本歌人協会の事務局長の仕事を手伝うことになった。

同時に、「ジャーナリスト」の書評関係の末席に加わり宮本さんと会う機会が続いた。

そんなある日、お茶を飲みながら、事務局長同士の運営のしんどさを話す中で引越しの件が出、相互扶助的な同居話となった。

また、J C Jの沖縄取材ツアーもいろいろな思い出がある。ツアーでガイ

ドをしてもらった名護市の高校教師大西照雄氏の本『啄木と沖繩』と出会い、これはジャーナリストに書評を書かせてもらった。

このツアーで、あちこちに咲いていた月桃の花を撮った写真を、その後、新日本歌人協会で編集出版した『平和万葉集』のカバー、表紙の装丁に使用した。

この旅で、月桃の花の前で宮本夫妻を撮った写真を見ると切ない。

現在「ジャーナリスト」紙に、短歌の原稿を書いているが、これは書評委員会のあったある日、宮本さんが、書評欄にも少しやわらかい潤いが欲しいという発案で始まったものである。コラムタイトルは私が考えたものをなかなかいいと賛成してくれたものだ。

第一回目をずいぶん思案して、俵万智の、

二時間でシンデレラとなる吾を前に核戦争の話などする

一年に一ミリ伸びるミズゴケに蓄えられる湿原の時間

などとしたのを読んで、とても感心してくれた表情を思い出す。宮本さんが自身が闘病の中で作った短歌に、風唸る病室の窓に黒雲のひろがりつつも茜色さす

時代の逆流を食い止めたい

能條 伸樹

(北海道支部／元新聞)

北海道の地方紙に三三年勤め、第二の人生は農協経済連広報誌の編集者としてさらに一六年働いた。久しい宮仕えにピリオドを打ったのが、六〇代最後の年。世界史の暦も世紀の境目だった。

自由の身となったが、ペンを離す気になれず、細々とフリーで仕事をはじめたころ、JCJ北海道支部に入会する機会を得た。支部代表委員の栃久保会員とは、一時期同じ新聞社に籍を置いた縁もある。

というのが遺されている。結句にももる生への希望を繋ごうとした思いが痛いほどに伝わって来る。宮本さんの意志を、私も少しでも継いでいくつもりである。

だが、入会の動機は、単純な仲間欲しさではなかった。改めて見直すまでもなく、この国がキナクサイ過去の轍を踏む方向に進もうとしていることに、私なりに危機感を強めていたし、その状況に対する現役マスコミ人のかかわり方にも、自らの反省を含めて危うさを感じていた。いまさら一介の老骨に何ができるとも思わないが、志ある若い人たちとの連帯の列に加わりたいと思った。

わが世代は、戦前・戦中・戦後のオー

バーラップする時期に、多感な少年期を過ごした。勤労働員に明け暮れた旧制中学三年生ころには、行く手にいつも、自分の死を見つめていた。

それだけに、敗戦を知ったあの夏の日、鋭い痛みとともに味わった解放感

が忘れられない。そしてまた、第九条に不戦を誓った新憲法に接した時の強い感動も。それらを原点に築いてきたはずの、この国のありようを、逆流させようという企ては、何としても阻止しなければならぬと思っている。

地方の記者として

中里 仁

(北海道支部／新聞)

「ジャーナリスト会議」の会員を名乗っていいものか。一人支局に住み二年になる私は、率直にそう思う。権力の監視、争点の明示、それらジャーナリズムやメディアに求められる役割を、ほとんど果たしていないからだ。

この土地で私がしているのは、ミニコミだ。記事に署名がつくようになって、記者が読者を頭に思い浮かべながら執筆するだけでなく、読者も記者の個性や仕事ぶりに以前より興味を持つ

ようになった。記事がない日が続くと「どうした」「病気か」「転勤か」「出家したのかも」と、さまざまながうわさしてくれる。私自身、町の人の葬儀にも参列するし、イベントの実行委員もする。そんな暮らしの中では、自治体の財政状況、事件事故といった「ニュース」よりも、生活している一人一人の喜怒哀楽に心を打たれることが多い。青臭くも「なんと人生は深いのか!」と実感するのだ。

今年、私の町にも「九条の会」が発足した。二月の発足の集いでは、出席者がそれぞれの戦争体験を語り、真剣さと同時に、手作りの温かさを感じた。すべての体験談を紹介したいと思ったほどだ。いっぽう、五月の講演会では、札幌の講師によって改憲論者の狙いや永田町の情勢が紹介された。話はすべりてもっともなのだが、このときは逆に違和感を感じざるを得なかった。

講師は「中央の情勢を知ってもらおう」と一生懸命だった。しかし、会場に集まった町民は改憲論の弱点とか政治日程の話ではなくて、もっと個人的な部分で「平和」を語り合いたかったのではないかと思った。またそうであればこの運動は地方では成り立たないのではないか、とも感じた。

何も憲法だけではない。社会の課題がパワーゲームとして現れる以上、せめぎあいには当然だし、そのエリアで努力している多くの人がある。JCJも一部そうした役割が期待されているだろう。だが地縁血縁うすましく小さな町

で「さあ国会審議正念場」「知事選挙が近くなってきました」などと突きつけられても、びんとこないのだ。

地方の記者として批判を恐れつつ小聲で言えば、政治的なせめぎあいの中に自分の仕事の使命を見いだすことに、

今の私には戸惑いがある。時期的に多少ピント外れになっても、出会った人の人生を読者に伝えることで、穏やかな生活への願いを広めていきたいと思っている。

あの時の「なぜ？」を抱えて

斎藤 誠

(北海道支部／新聞)

九三人の犠牲者を右に刻んだ慰霊碑はカラマツ林を背に建っている。あたりには建物はずでに無く、ここにかつて炭鉱があったことを思い出すのも難しい。

北海道夕張市。一九八一(昭和五六)年一〇月一六日午後零時四一分、北炭(北海道炭鉱汽船)夕張新炭鉱の集中監視室は地下八〇〇メートルの北部地区坑道でメタンガスの濃度が急激にあがったのをキャッチした。続いて坑内

の電気系統がインタロックして停止。ガス突出だ。

この日早朝、一番方で入坑したのは八五五人。近隣の炭鉱から駆けつけたベテラン鉱員を加えて編成された救護隊が酸素ボンベを背負って地の底に向かう。地上から新鮮な空気を補給する通気システムが停止して、坑内温度はジリジリと上がる。ガス突出から一〇時間を経た午後一時過ぎ、恐れていた坑内火災が起きた。

「坑道に煙、火災！」と叫んだ救護隊M班の一〇人は直後に無線連絡を絶つた。北炭は注水を決めた。救護隊員を含む五九人の行方不明者を坑内に残したまま大量の水を注いで火災を鎮圧しようというのだ。坑口に駆けつけた家族は水封という名の死亡宣告に身もたえした。「生きて救出を待っているかも知れない」「こんな事故を起こしたのはいったい誰だ」。怒りを込めて絞り出す声はやがて嗚咽に変わった。

夕張川の水を引き込んだ毎分二・五トンの坑内注水は一週間に及んだ。うろろと歩き回って言葉をかき集めるのが駆け出し記者の仕事だった。そして夕張新炭鉱は消えた。

私自身が炭鉱マチで育った。九歳の冬のガス爆発は級友たちの父や兄を一時に奪った。

深い雪に覆われた炭住街、板張りの貧相な長屋は「忌中」だらけになって小学校の教室に空席が目立った。泣きはらした目で登校した友のセーターから線香の匂いが強く漂っていたのを今



濁流あふれる金刀比羅宮の石段

いつまで新聞記者やっとなるんか

大波 一郎

(香川支部／山陽新聞OB)

も覚えている。
新聞記者になって多くの炭鉱事故を取材した。「父さんはなぜ死んじゃったの?」。子どもたちの突き刺さる視線をいつも感じた。それは、かつての級友たちの間いかけでもあった。炭鉱は跡形無く消え去ったが、あの時の

「なぜ?」に私はまだ答えていない。
今年には戦後六〇年。炭鉱に生きた人々の慟哭と怒りは還暦を迎えた戦後史のなかに埋もれようとしている。語り継ぎ、記憶に刻むことの難しさ。「なぜ?」の視線を抱えながらジャーナリズムの一隅に生きたいと思う。

二〇〇四年一〇月二〇日、台風二三号が来襲した。強い風雨は、夕方になって収まってきた。が、突如消防団員の声が響く。「緊急にお知らせします。災害のおそれが出ておりますので、この地域の方で危険と思われるら、すぐ公会堂へ避難してください」おう、いつの間、そんな事態になってるんだ。
金比羅宮(香川県琴平町)の表参道から三〇分ばかり入ったところにわが

家はあるのだが、妻の話では、泥水が滝のように飛沫をあげ、石畳に近づくところではないという。

びっくりすると同時に、生来の好奇心がむつくと頭をもちあげた。

それと体を起こし掛けたが、容易に立ち上がれない。というのは、二〇日ほど前の深夜、転倒して意識不明のまま病院へ運ばれたのである。さいわい肋骨にひびが入っているだけで、他に異常はなかった。一過性脳虚血症ということで、原因は水分不足。

すぐ自宅へ帰されたが、一週間くらい経ってから肋骨が痛み出した。さらに持病の椎間板ヘルニアの調子もわるくなり、家にこもりきりの生活を続けていたのである。

だが、見たいという欲求は抑えられない。身づくろいもほどほどに戸を開けると、かなり離れていても、なだれ落ちる濁流が目飛び込んできて、圧倒されそうになる。

その瞬間、体にぐうんと気合いが入ってきた。すぐカメラを握り、長靴をは

き、傘をさして家を出た。

この時は、不思議に痛みを忘れていた。

わが家は、山の麓の石段から百段目の高さにある。石畳の両側の商店は、目の届く限り濁流に洗われ、戸を閉ざしたままである。

七十余年の人生の中で、初めてみる衝撃的な古里の風景である。

濁流が渦巻くなか、恐るおそる石畳の真ん中近くまで体を突き出し、流れに足元をさらわれないう構えながら、なんとかシャッターを切ることができた。

もう病気は治ったぞと、胸を張っていたところ、その夜から、歯痛、肋骨痛、腰痛が代わるがわる強襲してきた。食事もうろくとれず、眠れない日がおよそ一週間くらい続いた。

さて、それから三か月余経って、文学仲間が集まったとき、この時の話をしたところ「きみは、いつまで新聞記者やっとなるんか」口の悪い文学老年から声がとんできた。

「この調子じゃ、墓に入ってからでも、ペンとカメラは握っておるやろうな」
わたしも、なにくわぬ顔で応じ、笑いがはじけた。

「もう一つのH」に四苦八苦

田川 実

(赤旗支部／モスクワ支局)

J C Jには、僕より先にマスコミで働いていた妻とその知り合い、前の職場の埼玉新聞の先輩らに誘われ、九一年春に入会した。その後内勤職場で三年過ごしたが、J C Jを通じて社内外の大先輩や同世代の仕事ぶりに触れることができ、非常に幸運だった。

いつだったか斎藤茂男さんが浦和に來られたとき、講師用の水のコップにペンを入れ、「曲がって見えるけど、取り出すと、『ああ、何だ、まっすぐじゃないか』となる。この『ああなんだ』を見せるのがジャーナリズムの仕事」といった話をされた。

裏にあるものを見抜けという斎藤さんのこの助言は、例えば今回の総選挙結果を見ても大切だと痛感する。例えば、増税計画に怒る少くない人々が「やっぱり小泉さんに投票しなきゃ」となったが、このねじれはメディアの報道と無関係ではないだろう。

もう一つ最近よく思い出すのは、埼玉新聞の中西博行記者の言葉。当時、社内の若手数人と一緒に、『コメを追う』でJ C J大賞を受けたこともあるこの大先輩に話を聞いた。全体の話は忘れたが、「5 W 1 Hが記事の基本だけど、最近はもう一つのH、歴史(History)が大事だと言われている」

当局・権力側のうそ、社会の表層の

る」との指摘ははっきりと覚えている。旧ソ連圏では一昨年からグルジア、ウクライナ、キルギスで「民主革命」とも評される一連の政変が起こった。ロシア・チェチェン共和国がらみのテロ事件も後を絶たない。これをどう書くか。「もう一つのH」の盛り込みには四苦八苦する。

歴史を踏まえ、現場に切り込み、「それは、こういうことなんです」と読者に示せるか。その課題をJ・C・Jは僕に認識させてくれた。



VI

支部・部会活動

——地域、分野に根をはって

密度濃い交流集会在弾みに

古田 俊暁

(北海道支部/放送)

私がJ C Jと出会ったのは一九九九年、テレビの報道現場に所属し、右旋回を始めた国の方向に強い疑念を抱いた時だった。いつか来た道へ突き進む政権党の本質を検証するどころか、ニュース現場は視聴率という「魔物」に骨の髄まで侵されていた。真のジャーナリズムの再生を図らねばならないという危機感にも駆られていた。

入会当時の北海道支部の会員数は二〇数人、曲がりなりにも「支部」を名乗れる状況だったが、実態は数人の運営委員が細々と支え、財政に至っては事務局長の持ち出しで賄われていた。支部再建の一步は、「幽霊」会員との面談による長期滞納会費の請求からスタートした。新参者が諸先輩を訪ね、

会員の継続と会費の請求をお願いするのは通らねばならないプロセスとはいえ、厳しい日々だった。やむなく退会する会員も出たが、産みの苦しみに割り切って、代表委員とともに「負」の行動を続けた。その一方で桂敬一さんを招いた市民集会や例会の復活を地道に組織するなどして会員拡大への歩みも始めた。

厳しい支部運営が続く二〇〇〇年の夏、本部から「北海道で全国交流集会在開けないか」との打診があった。何度かの緊急運営委員会を経て、二七年振りに噴火した有珠山の麓での集會開催を目指すことは確認した。しかし、全国からの会員の受け入れ、会場や講師の手配、パネルディスカッションの

パネル調整などは困難を極めた。本州組を取り仕切ってくれた林事務局長や川田マリ子さん、講演をお願いした有珠山のホームドクター岡田弘教授、パネラーの二人、宿泊のホテルとの連絡などは全てがメール。岡田先生以外は当日になって初めて顔と名前が一致する状況だった。

「初もの」特有の難しい作業となったが、本部の「黒子」的支援もあって密度の濃い交流集會となった。とりわけ、災害放送として地域へ情報を届けたいF Mレイクトピアの存続に向けて虻田町や北海道庁へ要請書を提出し、地元紙の記事の後押しもあって四ヶ月の延命を図れたことは交流集會の画期的な成功事例であった。集會を通して、全国の会員の顔が見える連携への弾みとなった。その後も東海支部や岡山支部などが全国交流集會を幹事として引き受け、ジャーナリストの糾合や現場で苦悩する若手のジャーナリストに方向性を指し示してきた努力を多とした。



1991年1月J C J北海道支部結成記念集会で

北海道支部は、市民集会や例会、独自のジャーナリスト塾の開催、心ある市民団体などとの交流を通じて、現在は三九人の会員を抱えている。会員は転勤により東京をはじめ、北海道でも稚内、釧路、函館、帯広、余市、美幌などに散らばっている。支部への結集という点ではハンディも抱えているが、地域からの声なき声を発信するアンテナ

北海道

平和への希求——支部結成のころ

木村 豊彦
(北海道支部)

ナの広がり、プラスに捉えたい。会員の高齢化、フットワークの低下など、暗澹たる時代をリードしてゆく

力量に不透明さもあるが、北の守りとして一翼を担ってゆきたい。

一九八二年、米ソの核軍拡競争の激化とそれに対する西ヨーロッパでの反核兵器運動の高まりの中、六月から国連軍縮特別総会が開かれることもあって、全国津々浦々で「反核・軍縮・平和」の草の根運動が多彩に行なわれていました。この年、日本ジャーナリスト会議と日本機関紙協会もそれぞれ「核廃絶・軍縮・平和への声明」を出しました。

これを受けて、北海道新聞や北海タイムスらの記者、日本機関紙協会北海道本部が呼びかけ人となって八月に札幌で、国連軍縮特別総会取材し「朝

日ジャーナル」に報道した朝日新聞編集委員の岩垂弘氏ら七〇人が参加した「8・15機関紙ジャーナリスト平和のつどい」を行ないました。

この「つどい」は翌年から、日本ジャーナリスト会議北海道支部準備会が主催し、毎年「再び戦争のためにペンをカメラをマイクをとらない」を誓い、市民とともに平和と戦争を考える八月集会へと発展していきました。

そして、九一年一月、地元のジャーナリズム関係者らが中心となって日本ジャーナリスト会議北海道支部を結成しました。



「THANK YOU TO THE AMERICAN MILITARY」の看板が掛かる保険会社エージェンツ=2005年8月20日、沖縄金武町

埼玉

THANK YOU

近田 洋一

(埼玉支部)

結成準備から当事者として関わってきて、いつも夏になると八月集会のこ
とと日本ジャーナリスト会議が八二年
五月に行なった「反核のためのジャー
ナリストと市民の集い」で何人かの方
が初代議長吉野源三郎氏の反核・平和

や広島・長崎の思いを語ったことです。
一つの時代でも憲法九条問題とあわ
せて一九四五年生まれの私にとっても
平和への希求は日本ジャーナリスト会
議の今後の活動にとっても初心であり、
原点でもあるように思います。

様相は一変していました。円高で米
兵は金を落とさない。気が荒れていて
怖い。米兵を顧客とするウチナンチュ
経営の店は一軒ありません。そんな
さびれたバー街に一カ所だけ派手に星
条旗を翻して大繁盛している店があり
ました。店の中のスタッフはすべて米
国人です。看板には「アメリカ軍隊に
感謝」。さしずめ米軍人事課御用達と
いったところの生命保険会社エージェ
ントだったのです。

ここに掲げる一枚の写真は「今」と
いう時代を象徴しています。沖縄県金
武町の米軍基地キャンプハンセン・メー
ンゲート前約七〇㊦の繁華街で撮影し
たものです。

ベトナム戦争が最も激しいころ、六
〇年代から七〇年代にかけて、外人バー
街と呼ばれ、戦場に行き来する米兵で
あふれていました。僕は当時琉球新報
の現地担当記者で、沖縄で初めてJC
Jの会員(第一号)になったのもこの
ころです。その後本土へ。

イラクに派遣されるのは仕事にあぶ
れた貧しい若者たちです。沖縄で訓練
し、直行です。ファルージャ攻撃の部
隊はこの基地から出撃しました。兵士
たちは現地ですら車列が爆破され、迫
撃砲が飛んでくるかおびえています。
もし自分に万一のことがあった場合を
想定、こうして家族のために多額の保
険を掛けに訪れるのです。ゲート付近
でたむろする米兵はいずれも童顔。若
くして死にたいはずはありません。殺
したいはずはありません。
ショーウィンドーに「I WAN

神奈川

基地取材、泊り込み交流も

清水 雅彦

(神奈川支部)

T YOU」の威圧的な徴兵ポスター。国家と結託してぼろ儲けする保険会社のキャッチコピーは「あなたの人生の未来のために」とありました。

復帰後、琉球新報から埼玉新聞に移り、僕を支えてきた妻への最大のプレゼントは一九八四年度のJ C J奨励賞

受賞でした(受賞作・「駅と車椅子」)。妻同伴で授賞式に参加しました。

〈彼女はこの五月一四日に突然死去。受賞の集いに十数年振りに参加し、大急ぎで新盆のために帰郷しました。この一枚のショットは妻が引き合わせてくれたものです。ありがとう恵美子、そして僕を精神的に支えてくれたJ C J。〉

すでに相当の時間が経過してしまっただが、J C J「40年史下巻用」幻の草稿に次のようなくだりがある。――

一九九七年には、福岡と神奈川に新しい地方支部が発足した。五月一〇日に横浜市従会館で開かれた神奈川支部の設立総会には、茶本代表委員が駆けつけ「今日の日本の問題とJ C Jの役割」と題して講演、新支部の発足を祝うと同時に激励した。同支部はそれまで二

年間、支部準備会としてジャーナリズムを取り巻く様々な問題についての研究会や例会を開いてきた――。

支部設立から八年。いまでは、例会も当然のように開いているが、これは支部あつてのことだ。「地元にも支部があれば……」とぼくも思っていた。一人でいくら考えていてもはじまらないが、あるときチャンスが巡ってきた。それは、一〇年ほど前のことだった。

当時、J C J事務局長であった石崎さんから「神奈川にも支部をつくりませんか」と声をかけていただいたのだ。これは大きなキツカケだった。しかし、それが本当に実現するとは、ぼくには正直なところ、思えなかった。まわりはほとんど知らない人ばかりで、ぼくにとつては雲をつかむような話だったからだ。石崎さんのアドバイスもあり、最初は懇話会という形でスタートした。予算もほとんどない中で、不定期に会合を持った。毎回テーマを決め、会員同士で講師をつとめたり、謝礼なしで外部講師に講演をお願いしたりした。心苦しい限りだった。

このままではやはり「支部」というのは無理かと弱気になったこともあったが、一九九七年、ついにそのときが来た。代表を引き受けていただくことになった石崎さんのあいさつが、いまも心に残っている。「きょう、支部設立総会を迎えたことは感無量である」という趣旨の内容だった。会員数は二十七人。規約をつくり、予算も少しずつ



J C J 本部と神奈川支部結成準備会の共催による全国交流集会
(1996年10月、伊豆大川で)

確保できるようになった。神奈川支部の特徴は、一般的な講演会だけにとどまらず、積極的に外へ打って出るところにある。沖縄に次ぐ米軍基地を抱えるもとで、基地取材も行なっていることなどがその例だ。他支部と合同で、池子米軍住宅などの取材を兼ねた泊り込み交流会を開いたこともある。支部

会員には新聞、放送、出版関係者のほか、労組で日刊紙などを発行する機関紙協会会員も加入しており、同協会の開催する機関紙コンクールには、支部として審査員の派遣とJ C J 神奈川賞の贈賞も続けている。また、東京に近いこともあり、本部の活動を兼務している会員も多い。

会員とのパイプ役を果たす「支部通信」はこれまでも発行してきたが、最近、ようやく新聞編集ソフトが少し使えるようになり、テスト版を出しはじめたところだ。初心を忘れず、今後も気長に根気よく活動を展開していきたいと思っている。

新潟

本社会議室と居酒屋で

浅賀 茂

(新潟支部／新潟日報)

「こういう集まりはいいねえ」——一九九七年一〇月二十九日(水)、新潟日報本社生産棟三階大会議室は熱気ムンムンだった。マスコミ共闘の仲間であるBSN新潟放送の放映番組が、七年J C J 賞を受けたのを機に、報告会を兼ねた学習会のひとコマ。

新潟支部と新潟日報労組新聞研究部との共催。新潟放送報道制作局報道部

の放映番組「続・原発に映る民主主義」そして民意は示された」が、J C J 賞をもらったのだ。受賞理由は「新潟・巻原発の推進・反対両派の長期に渡る角逐を生き生きととらえ、民主主義健在の風景を見事に描いた」というものだった。

受賞番組のビデオを観てから、新潟放送報道部の宮島敏郎さんが講演した。

合わせてJ C J代表委員・石川真澄さんが「混迷する現在の政治状況」をテーマに講演して彩りを添えた。まじめな会合はここまで。

参集者のお目当ては、お二方の話はもちろんだが、講演会の後、第二部の懇親会だ。支部会員、労組執行委員は、新潟・古町のど真ん中に繰り出した。

ただし、ぐっとリーズナブルな居酒屋。肩が触れ合うような狭い部屋はいきれ。一度座ったら二度と立えないような窮屈さ。安酒を酌み交わしながら「マスコミの原点を忘れちゃいかん。若い人を教育しなくっちゃ。われわれの責任だぜ」「このごろ、新聞も放送もイベント報道に流されていないか。飛び込んでくる出来事を伝えるだけでは、仕事に取り組んでいるというより、こなしているにすぎない」「半年会費、年会費をきちんきちんと集めるいい手はないものか」など忌憚のない声があちこちから沸きあがっていた。

こういった会合がちよくちよく持てるような仕事をしたい。またみんなで

顔をそろえたいと願ってお開きとなった。

東 海

毛利さんを追いかけて

古木 民夫

(東海支部／元朝日新聞)

J C J東海支部の正式名称が「J C J東海地区連絡会議」だということは知っていたが、なぜそうなったかは考えたこともなかった。が、最近その理由がある先輩から初めて教わった。つまり「支部」というのはマスコミなどの企業や団体ごとに設ける組織を指し、そうした草の根の「支部」を束ねる地域の連絡機関としての役割から「連絡会議」と命名したという。

そう言えば、この連絡会議が発足したころ、私の属した朝日新聞(名古屋)には一〇人近い会員がいて、とても活気があったのを思い出した。「朝日労組(名古屋) 新聞研究委員会がJ C Jと連帯して活動の場を広げた」という

意味の記述が、そのころの労組の記録に残っており、支部としての機能を十分に果たしていたことが分かる。

その活力は、どこから生じたのだろう。それは名古屋朝日の経済記者として活躍する傍ら、同連絡会議の事務局長を務めていた毛利晃さんの奮闘によることが大きかったといって間違いない。機関誌『東海ジャーナリスト』を執筆・編集し、「J C J東海通信」を書いて会員に伝え、そして会員拡大に意欲的に取り組んでいた姿には目を見張るものがあった。私もそんな毛利さんに脱帽し、入会に応じた一人だった。

J C J東海が創立して間もないころ、名古屋朝日の社会部記者たちが、トヨ



機関誌『東海ジャーナリスト』

々の企業城下町として特異な状況にある豊田市の実態に鋭いメスを入れた連載を開始した。経済部記者の毛利さんは、この記事に注目し、その年のJCI賞候補として推すことになる。取材班の中心となって活躍した記者は当時を振り返って言う。「JCI賞だけでなく当時は東京のメディアで扱われない記事は、ほとんど賞の対象にはなら

なかった。私たちの連載は名古屋版だけだったので、受賞なんて考えもしなかった。だから受賞決定と聞いた時の驚きと感激は大変なものだった。その陰に毛利さんらの推薦活動があったと聞き、感謝の思いでいっぱいだった」。

季節工としてトヨタ工場に入っていた鎌田慧さんのルポルタージュ「自動車絶望工場」が発表されたのは、その翌年のことだった。朝日新聞を退社後、JCIの代表委員に就かれた秦正

流さんが、後輩の編集局長らに「JCI賞候補になる記事があったら、どしどし推薦してほしい」と依頼されたという話を聞いたことがある。まだ若かった毛利さんは人に求められるまでもなく、地方発信の優れた報道を見逃さず、全国で紹介すべく受賞候補に推していたのだ。JCI東海・事務局長の面目躍如である。

そんな毛利さんが一九七六年、東京へ転勤となる。JCIの芽が萌え始めた東海を離れることは、さぞ心残りだったに違いない。私は彼の身代わりなど

はとても務められないが、せめて『東海ジャーナリスト』編集のお手伝いぐらいならと申し出た。

その後紆余曲折はあったが、今も機関誌編集に関わっているのは、毛利さんの頑張りが強烈な印象となって残っているせいかも知れない。毛利さんは、その後モスクワへ留学したり、ジャカルタ特派員になったりした後、JCI東海の例会に何度か来てもらい、国際情勢などを解説していただいた。

彼がジャカルタ在任中に書いたインドネシア関係の記事がスハルト大統領の怒りを買って、国外追放処分を食らったことがある。毛利さんが五一歳の若さで逝って三年後、スハルト政権は民衆に打倒された。彼が存命だったら、この政権崩壊劇をどんな思いで見つめるだろうかと、彼を偲ぶ一文を草して『東海ジャーナリスト』（第45号）に寄せたことがある。

彼は定年を一〇年近く余して朝日を退職、名古屋のある大学教授への転身が決まっていた。彼が約二〇年ぶりに

京都

京の放送の灯を守って

古住 公義

(京都支部／京都放送労組)

名古屋へ帰って来る。J C J 東海に再び「毛利旋風」が吹き、かつての活気がよみがえると期待していたその時、彼は自ら命を絶ってしまった。J C J 東海三〇余年の歴史を思う時、その基

礎を築いた一人、毛利さんの存在を忘れてはならないと思う。「私とJ C J」を語る時も、私は毛利さん抜きには語れないのである。

リー10(テン) (毎週月曜から金曜、夜一〇時から一時間) がスタート、地域や民放界から大きな注目を集めました。

このような試みが高く評価され八〇年にJ C J 賞奨励賞を受賞しました。

この後ゴールデンタイムに報道番組が主流を占めるようになったわけですが、J C J 賞を受けた京都放送の「タイムリー10」が先べんをつけたといえます。

しかし事務局長をつとめていた私は、一方で民放労連京都放送労働組合の書記長もつとめていて、京都放送が八〇年代後半から経営危機になり始め書記長の仕事に大きなウエイトがかかったためJ C J 活動が徐々におろそかになってきました。

京都放送が許永中ら闇の社会の連中にかきまわされ放送局がまるごと担保になったという事件を労働組合が見つけた追及をしました。前代未聞の放送局の灯がなくなるという事態になって松尾博文・松田浩・須藤春夫・高内俊一氏らJ C J のみなさんが労働組合

京都に良心的なジャーナリストが集まって行動する組織——日本ジャーナリスト会議京都支部をつくろうと考えていた私は、今から二六年前に当時立命館大学の教授であった松尾博文さんからの面会の要請を受けました。

京都のホテルで初めて出会った松尾さんから「京都にJ C J の支部をつくりたい」との相談を受け私はその場で支部結成たち上げの返事をしました。

そして、八〇年に京都支部ができ当時の議長・鈴木四郎さんや事務局長の

三上正良さんが支部活動を支えるために力を尽くされました。九〇年ごろまで8・15不戦の集いや例会を開いたり、特に、八一年には嵐山でJ C J の全国集会が開かれ大阪の元革新知事黒田了一さんを迎え大いに盛りあげました。またJ C J の地域に豊かな放送文化をつくろうとの活動方針にそって私は民間放送では初のゴールデンタイムに情報番組をつくろうと組合員に提案し組合の提言として会社に申し入れ、八〇年からテレビニュース番組「タイム

員や日本の視聴者運動の草分けともいえる「市民のためのKBSをめざす実行委員会」の市民らと一緒に知恵をだしあい①京の放送の灯を守ろうとの四〇万人署名②会社更生法適用申請――の再生方針を打ち出しました。

この方針を具体化した組合員と市民の力で京都放送は一九九四年に再建の途につくことになりました。「破天荒の闘い」（中坊公平元弁護士）と言わ



KBS問題の解決をめざすマラソンスピーチ（マイクを持つのは松田浩さん）

れた放送界でも異例の出来事についてJ C Jでは、「市民のためのKBSをめざす実行委員会」の京都市民の運動を高く評価し九六年にJ C J特別賞を贈り奮闘をたたえました。

このKBS実行委員会は、松尾・松田両氏が精神的支柱になって活躍されていて運動の中にJ C J活動の雰囲気

が色濃くただよっていました。

J C J京都支部は、京都放送を中心にしたこの一〇数年間の活動を糧に新たに再開にむけて準備がすすめられていて全国の他支部とひと味ちがう活動を展開していきたくいと決意を新たにしています。

関西

名称にこだわりながら

木野本 弘

（関西支部）

「日本ジャーナリスト会議」というネーミングに未だこだわっている。一九九二年第三五回J C J賞の本賞に「メディア連携企画『女たちの太平洋戦争』」が選ばれた。朝日新聞大阪本社編集局企画報道室の柳博雄さんをお招きして、お祝いを兼ねた受賞作品を聴く会を当時のJ C J大阪支部が開催するのに一役買ったのがきっかけでJ

C Jに加わるようになった。その時も「私は新聞社で働いているが、現業の仕事をしておりジャーナリストではない」と言っていた。

しかし、その後「ジャーナリズムに携わる人」はJ C Jに加盟できる、ということになって、J C Jの活動にはこだわりがなくなったが、「『ジャーナリスト』会議」という名称には一抹の

こだわりがある。しかし、このこだわりは、否定的なものでなく、より発展を願う上のものである。どうすればいいのだろうか、という想いを抱きながら、関西支部を名乗っている。

J C J 関西支部と J C L (自由ジャーナリストクラブ) 事務局で「マスコミ九条の会・大阪」を立ち上げて、その呼びかけ人のマスコミ諸先輩に集まっていた。後、今後の方策を話し合った。その中で、「優れたジャーナリズムに接触することがジャーナリストを磨き、読者・視聴者を育てる」という言葉を頂いた。

一九九八年第四一回 J C J 賞奨励賞を受賞した「映像 90 葉害ヤコブ——谷たか子の闘病記録」——毎日放送報道局社会部のビデオ鑑賞と懇談を先の受賞作品を観る会で開催したが、その時の映像の感動は未だに忘れられない。その後、ヤコブ病問題が社会問題化した。このような活動が J C J の活動ではないだろうか、というヒントをもたらしたような気がしている。

ジャーナリストとは何なのか、ジャーナリズムとはどういうことなのか、アカデミックな解説だけではなく、現実の優れた作品に多数接触し、それをどのようにしてジャーナリストと呼ばれている人たちが読者・視聴者に広げることができるのか、これからの課題として取り組んでみようと思っている。

五〇周年というのは確かに大きな節目であるが、単なる通過点ではない。しかし、この通過点がジャーナリズムの衰退の時期と重なっているのが不気味で仕方がない。ジャーナリズムの活性化はどうすればいいのかを問い直す日々の中で、悶々としながらこれを書いている。

広島

支部活動に残る三冊の本

羽原 幹男

(広島支部／中国放送 O B)

* 「不戦の夕べ」を契機に

一九六八年、私は広島にある中国放送に入社した。当時、労働組合は、アウンサーの解雇や刑事裁判をかかえ、激しい労使対立の渦中にあった。

七〇年には、結成三年目の J C J 広島支部が第一回「不戦の夕べ」を開いている。この年、私は組合の書記長になった。

七一年には職場結婚。彼女(注)は同僚であり、嘱託社員化闘争の当事者だった。初め私は知らなかったのだが、彼女は七〇年の労組加入以前から J C J に参加していた。J C J 活動が組合加入へのきっかけとなり、「自由な人間」への成長を促したようだ。

労働組合は七四年、紛争をすべて解決し、職場はジャーナリズム機関とし



ガリ版刷りから始まり書店にも出た伝統の機関誌と三冊の本

ての落ち着きを取り戻した。番組作りが本格的に論議され、ゴールデンアワーに自社制作のドキュメンタリーが登場した。組合の活性化とジャーナリズムの議論が少しずつかみ合い始めた。

＊ 機関誌活動から出版へ

そんな空気を背景に、広島支部では全国から注目される活動が始まっていた。七二年『被爆二世』（時事通信社刊）、七九年『白いチョゴリの被爆者』

（労働旬報社刊）、八〇年『原爆孤老』（労働教育センター刊）の三冊を相次ぎ出版、歴史的な活動に支部が輝いた。

六七年の支部結成と同時にガリ版印刷で発行が始まった機関誌（紙）「広島ジャーナリスト」は、七〇年代には活字版の冊子となり、ベテランデスクのもと二〇代、三〇代の若い会員たちの奮闘でほぼ月刊発行、時にページ数は六〇ページを超えた。市内の書店にも配本され、地域からも「ジャーナリズムの現場を知ることのできる」と評価された。ニュースの背景を解説し、記者クラブの功罪などを議論、特集していた。ジャーナリストが、仕事を通じて地域とどうつながるか、読者・視聴者といかに切り結び、連携するか―そんな議論が活発だった。「広島ジャーナリスト」は八二年一月の九〇号まで続いた。

＊ 『被爆二世』輝くJ・C・J賞

『被爆二世』の取材・編集にはJ・C・J会員を中心に「広島記者団」が組織

された。被爆二世について「埋もれている被爆資料の解明と、現実に存在する資料を、新しい視点から捉え直す。将来にむけて状況の先取りを」（同書あとがき）という提起から始まり、企業の壁を破って参加したジャーナリストは二〇人を超えた。この年、『被爆二世』はJ・C・J賞を受賞した。

この経験と確信が、『白いチョゴリの被爆者』、『原爆孤老』へとつながった。ここでも問題意識は、在野の学者や被爆者との協力へと発展、取材・編集は支部会員が担った。こうした活動が「七七年の原水禁運動の統一実現に少なからぬ役割を果たした」と当時を知る古参会員は振り返る。

広島はジャーナリストに課せられた課題は重い。まして、このご時勢である。「記憶は風化する」のではなく、「風化させられる」ものだ。思いと理念を持った「闘い」がなければ、人間の記憶は消えていく。J・C・Jでの活動はその「闘い」と自覚している。

《編集部注》羽原好恵さんは生後七日に宇品

の生家で被爆、支部結成の翌年J C J
に加入、三冊の執筆・編集に関わり、

九三年四月、膀胱がんで死去した。

J C Jに余生をかけた兼井亨さん

広島

太田 武男

(広島支部／中国新聞OB)

兼井亨さんには一九九〇年六月、再
建した支部の代表に就いていただいた。
九五年末に急逝されるまでの実質六年
間、機関紙に健筆を振るわれ支部活動
に新しい風を送っていた。再建
の年の八月六日。広島では例年、中国

新聞労組の主催で原爆犠牲新聞労働者
「不戦の碑」に、遺族やマスコミ関係
者が集まって碑前祭が開かれる。
建立から五年を迎えたこの年、OB



不戦の碑の前で追悼の辞を述べる兼井亨さん

を代表して挨拶に立った兼井さんは、
追悼の辞を述べたあと、静かに次のよ
うに結ばれた。

「私はこの度、日本ジャーナリスト
会議広島支部の代表委員の一人に推さ
れました。J C Jを一口で言うと、真
実の報道とは何か―を会員みんなで討
議し、民主主義の担い手としてのジャー
ナリズムの刺激剤になろうと心がけて
いる集団です。私はまもなく七〇歳に
なります。平和と民主主義を守るため
に、この仕事に余生をかける覚悟でい
ます。どうかご加護をお願いいたしま
す」

再建準備会を立ち上げていた私と羽
原さんが中国新聞OB（元編集局次長）
の兼井さんの自宅を訪ねたのは、九〇
年四月ごろでした。「J C Jは左派ジャー
ナリストの集団だろう」から始まって
「今のマスコミは行政への切り込みが
足りん」との批判まで、大先輩からお
小言も頂きながら随分と話し込んだ。
二人は職場を語り、政治を語り、マス
コミ状況を語り、J C Jに何が出る

かを思いっきり語った。

「分かった。あんたらがそこまで言うなら…」と承諾を得たのは、夜も一〇時を過ぎたころだったろうか。

「(J C Jの) 仕事に余生をかける覚悟」―「不戦の碑」を前に語られたこ

の一言を聴いたとき、事務局長をして

いた私は、「志を絶対に裏切れない」と、熱いものがこみ上げたのを忘れない。兼井さんが亡くなられて間もなく一〇年を迎える。

支部機関誌第一号に思う

土井 弘高

(岡山支部／元山陽新聞)

手元に一冊の薄っぺらな冊子がある。一九五九年(昭和三十四年)一月二日、日本ジャーナリスト会議岡山支部の結成を特集した機関誌「J C J ニューズ」第一号だ。

B5判5ページ、30字×25行のタイプ印刷。「明るく楽しい集いに 岡山支部、盛大にスタート」の見出しに続く本文は

『言論の自由と平和を守るために活動しよう』と、日本ジャーナリスト会

議岡山支部の発会式が一月二日午後一時から県庁九階ホールで、在岡各新聞記者、放送局の記者ら約五〇人が集まって開かれ、同日発足した。日本ジャーナリスト会議は(昭和)三〇年二月、各分野で活動するジャーナリストの間で自主的な団体をつくり、平和と言論の自由のためにひろく手を握ろうという目的で生まれた。岡山支部結成の話は二、三年前から持ち上がっていたが、在岡各新聞社および放送局の記者の間

でようやくまとまり、発足の運びになった。会員は発起人の予想を超えて八〇人を突破。各新聞社、放送局を結集した地方支部が誕生したのは岡山がはじめて。

発会式は発起人代表の経過説明のあと、三木県知事、寺田岡山市長(代理)の挨拶、祝電披露があり、ついで、規約、役員を決定して閉会、引き続き懇談会を開いた。」

とあり、このあとに、各役員氏名、三木岡山県知事祝辞、寺田岡山市長メッセージ、ジャーナリスト会議本部、同広島支部、山陽新聞労働組合、岡山県文化会議の祝電、北村支部長(山陽新聞)挨拶を掲載している。

三木知事の祝辞は「…新聞社の方、放送局の方が多数お集まりになって定刻から式典が進められていますが、これも真実の報道を通じて言論の自由と平和を守ろうという皆さんの意気込みの現れであり、心から敬意を表したいと思います。…真実を見つけ出すことが民主主義への道であり、この意味

からも皆さん方の努力なくして民主主義は育ち得ないのです：」

また寺田岡山市長のメッセージは

「言論の自由は、人類の英知と勇気が、長年にわたり圧制と不合理に対し、激しい闘争を展開した末に勝ちとられた貴重な制度です。しかし、この大切な私たちの宝は、絶えず不合理なもの、醜悪なものから脅かされ、攻撃を受けています。日本ジャーナリスト会議はこの貴重な歴史的財貨を守る闘いのなかで大きな役割を果たしておられますが、このたび岡山にも支部が生まれることをうかがって喜びにたえません：」

と、単なる社交辞令とは異なる熱のこもった言葉が並べられている。

もう四五年以上前のことになるので、細かなことはあまり覚えていないが、この発会式で若役として初代事務局長に選ばれた私は、当時二六歳。発起人の一員として、山陽新聞の先輩記者とともに、在岡各記者クラブを訪れ、幹事や記者仲間と真面目に話し合った記憶が残っている。

支部には、結果的に在岡新聞・放送企業の全社の記者が名を連ね、いわば記者クラブ大連合のようなかたちとなり、知事や市長らもむげには扱えなかった側面もあった。だが、当時は警職法反対闘争に勝利し、六〇年安保闘争が盛り上がる前段のころで、記者仲間の間でも、不当な権力介入を許さず、言論・報道の自由を守っていくことへの若い情熱がみなぎり、それが社会的に支持されていたことも否定できないだろう。

支部は当初は、クラブ間の垣根を取り除く友好を中心に活動を展開し、クラブ対抗野球や懇親会などを積極的に進めたが、一九六一年に支部活動の中心を占めていた山陽新聞労組のストライキ闘争の勝利後、活動は飛躍的な高揚期を迎えた。

同年八月二二、二三両日、JCJが招いた中国新聞工作者代表団を岡山に迎え、支部は山陽新聞労組と一体となって歓迎行事に力を注ぎ、代表団を迎える市民歓迎集会では六百人収容の会場

を満席にし、「報道のあり方」をめぐるシンポジウムの成功にも大きく貢献した。

翌一九六二年、支部は、ストライキ闘争敗北の巻き返しを狙った山陽新聞経営者による組合分裂・解雇・不当配転の激しい攻撃に直面し、支部活動の中心を担っていた山陽新聞の記者の多くが僻地支局に追われ、在岡各社の会員も転勤で岡山を去り、アカ攻撃の恫喝もあって、活動は困難な氷雪の時機が続いた。

一一年余にわたった山陽新聞の組合弾圧は組合の勝利によって解決し、一九八一年に本格的な活動を再開後の支部は、現在の山陽新聞OBを中心に新しい仲間も加わり、発足当時の地元のほとんどの会員が顔をそろえ、現役の藤井事務局長を要に団結。月一回の事務局会議、テーマを決めた月例会、関西・広島・香川支部と持ち回りの瀬戸内交流研究集会、苦田ダムをテーマの全国交流集会、NHKの番組改変問題、憲法改悪反対岡山市共同センターの取

香川

「干潟の止まり木」

今岡 重夫

(香川支部／四国新聞OB)

り組みなど、活動は多岐にわたり、民
主勢力の中での影響力も広がっている。
だが、発足当時を振り返るまでもな
く、会員の高齢化は歴然としており、
マスコミ現場の現役世代へ影響力低下
は否定すべくもない。「JCJニュー
ス」第一号を手元にして痛感するのは、
社会情勢の変化ということかもしれな

い。当時は話題にもならなかった「憲
法改定」が現実の政治日程に上り、国
民の意識との乖離は甚だしいとはい
ながら、国会の「改憲勢力」は三分の
二を超え、憲法を守る確かな政党は日
本共産党だけという事実。よほど性根
を据えて頑張らねばという思いをかみ
締めている。

二〇〇五年五月八日、アースデーか
がわで、豊島産廃不法投棄現場の北海
岸を訪ねた。「産廃処理」の開始とと
もに入江の干潟で絶滅しかけたアマモ
が復活し、海浜植物が元気をくれた。
香川県出身の反骨、反権力を貫いたジャー
ナリスト宮武外骨（一八六七～一九五
五）が亡くなって五〇年。「知る人ぞ
知る」「隠れファン」も結構居るのだ

が、地元ではあまり話題にならない。
今年五月二〇日から共同通信高松支局
の企画で「過激にして愛嬌あり・評伝
宮武外骨」（二五回連載）が地元紙に
載った。ふるさとを見直した若い人た
ちもいたことだろう。何年前か、やは
り共同高松支局の先輩が「外骨」の足
跡を追ったことがある。外骨の活動舞
台は香川県ではなかった。しかし、

「外骨」を育んだ香川県から発信する
意味は大きいのではないだろうか。

日本で一番面積の狭い香川県に派遣
された記者たちは少なからず「島流し」
を意識する。コンパクトに官公庁が配
置されているため、「新人研修地」の
要素が強く、「回転」も速い。土地事
情が分かり始めると地域のことを掘り
下げる余裕もなく、新しい仕事に追わ
れ、小さい県は忘れられてゆく。渡り
鳥記者たちにとって、「小さな入江の
干潟でささやかな止まり木たろう」と
香川支部の活動を自負してみるがむな
しい。止まり木に気づいた渡り鳥も居
たが、去るとき後輩に申し送りをしな
い。香川県を通り過ぎた記者たちが今
どんな気持ちで当時を振り返っている
のだろうか。問うてみたい。

香川支部は一九七二年、外務省機密
漏洩事件の「西山問題」をきっかけに
「知る権利」の市民集会を開いたりし
て準備、あの「山陽闘争」が全面解決
した一九七四年、香川県の革新県政と
ともに誕生した。香川県は地元紙の読



2005アースデーかがわin豊島にて（寒川真由美さん提供）

者が選ぶ年末の一〇大ニュースに毎年のように台風被害、干ばつ被害が見える。瀬戸内において「水問題」のきびしい歴史的風土が作られている。一九九四年に香川支部の「二〇年史」をまとめた。「組織を知らない」と言う若い記者のためにガイド的な狙いだったが、かえって若い記者たちを敬遠、萎

縮させてしまったという。

その後も月例会を続け、市民に期待されながら、豊島問題で全国交流集會を持ち、報告冊子「豊島から何が見えるか」を若い記者たちが編集した。瀬戸内交流研究集會では地元と共に瀬戸内の「干潟」の勉強会を開いた。〇Bたちが愚痴る場になってしまった。〇る例会に現役記者の顔が見えない。瀬戸内の干潟のようにささやかな止まり木は朽ち果ててしまうのだろうか。仕掛けの悪さかもしれないが、渡り鳥記

者の井戸端会議をもっと大事にしたい。

元毎日新聞記者西山大吉氏は三〇年を過ぎて今年四月二五日、国を相手に訴訟を始めた。この日はJ R西日本福知山線事故が発生、不運な扱いで埋没した。「国家の罨」にかかったスクープの「密約」は完全にすり替えられて不発。その後、公開された米国の外交文書にも「密約」が明記されている。今こそジャーナリスト会議の出番。

香川

美しい水が川下に流れるように

蓮井 孝夫

（香川支部／西日本放送OB）

私が地元香川の放送局に入社したのは、一九六四年（昭和三九年）東京オリンピック、テレビのカラー放送が行なわれた年だった。大学は理学関係だったが、地域の人の少しでも役立ちたい

思いでマスコミを選び、その思いが実を結んだ喜びに浸っていた。しかし現実はずつづれていった。ローカル制作のドキュメンタリー「昨日・今日・明日」という番組（フィルム）の終了

をはじめ、年を追うように地域密着番組（テレビ・ラジオ）は姿を消して行った。東京のキー局の中継局のような変身・合理化が走りはじめた。私の心の中で、「ちがう・ちがう」という思いが芽生えはじめた。音楽とお喋りのDJだけでいいのかと自問自答があった。そんな時「外務省機密文書暴露・西山事件」（一九七二年）を考える会に、先輩アナからの誘いがあった。三〇歳の私だった。その学習会を通じて、地域への思いが呼び起こされ、組合活動にも力を注いだ。その二年後の一九七四年三月一六日記念講演（三上正良事務局長）「J C Jの歴史と闘い」でJ C J香川支部の活動が正式に始まった。規約もできた。その年、香川にも革新県政（すでに革新市政）を誕生させた。それから十数年後、知事が亡くなる一ヶ月前に、何故か私の取材申し込みに会ってくれ、四国と本州を結ぶ瀬戸大橋完成への思いを語ってくれた。小柄な奥様が病状を案じて傍に座っていた。かすれて絞り出すよ

うな声が印象的だったし、ラフな部屋着が印象に残っている。そして自著『悠久の今』という本に力強くサインをしてくれた。今も本棚に地元の高村弁護士の遺稿集と並んで置いてある。香川支部が発足した当時は、地元紙・地元局だけでなく、中央紙の若い記者たちが参集し熱い議論を続けていた。しかしその後、だんだん参加する若い記者が「忙しい」という理由で減っていった。「中央に帰りたい。大支局に転動したい。荷造りのままがある」と語った若い記者の言葉が私の耳に今も残っている。新聞記者にとって地方とは、どういう存在かと思いつづけている。「忙しい」という言葉の向こうにある若い記者の心の言葉を、私たちが十分理解していなかったと反省している。

一九八七年朝日新聞阪神支局襲撃事件、「国家機密法」を契機に、J C J香川支部の活動が再開した。国鉄が民営化された年でもあった。日本の迷走がはじまったような気がしていた。一九九〇年二月二五日から「報道と人権」について、香川の学者や県民と一緒にシリーズ学習会（約二〇回）を行なったことは、香川支部の誇るべき活動の一つとなった。その後瀬戸内海の美しい島での産業廃棄物事件・豊島問題の活動、戦争を語りつぐ活動、町村合併の問題などについて例会を重ね今日に至っている。若い記者の参加は少なく、時にはOB会のような例会になることがあるが、一般県民や県議・市議らの参加もある。今岡支部長の努力によって機関紙「ジャーナリストかわ」は七〇号を数えている。また毎月の例会は細々だが開いている。最近のテーマは「教科書の日本国憲法を考える」「九条の会」「水害報道を考える」「高松空襲を歩く」「産廃・豊島集会」「瀬戸内の再生」「合併・住みたい町を考える」「ふるさとと向き合う」などである。混迷する政治・経済・暮らしの中で、先行き不透明となり、二〇年後、五〇年後、一〇〇年後の日本の姿が見えてこない中で、私たち日本人は、

北九州

戦争を憎み酒と女性を愛し

—鈴木敬一さんの思い出—

伊藤 和人

(北九州支部／毎日新聞)

目先の解決・目先の幸せだけに目を奪われていないのかと疑問に思う。二一世紀は「人権の世紀」「平和の世紀」と言われているが、現実とは逆行している。澄んだ美しい水が川下に流れるのではなく、汚れた水が山に向かって流れ、自然や人の心を汚しているようだ。

地方に住む私たちに「地域の人々の人権・平和が守られ、安全で安心、心豊かな暮らしのある地域を、主体的・自立的につくる活動」が求められているような気はしている。憲法十三条の「…幸福追求…」権は、九条と並んで大切なような思いでいる。

らせてきた。その朝、政府が同盟通信に命じボツダム宣言受諾を打電させたこと、町内会長は知り合いの同盟記者から聞いたのだという。ジャーナリズムの凄さを鈴木さんはその時に知ったそうだ。

鈴木さんの父は住友銀行に務める慶大出のリベラリストだったが、日中戦争の軍需景気に浮かれ大陸関連株に資産を投資。敗戦で無一文になった。新聞にだまされたことを悟り「信用できるのは死亡記事とベタ記事だけ」が口癖だったとも。

J C Jを通じて多くの敬愛する人に出会えたことをありがたく思う。中でも一九八五年から亡くなる二〇〇二年まで支部代表幹事を務めた西部読売OBの鈴木敬一さんが忘れられない。丸々とした体に丸々とした顔で、あだ名は「タンクローさん」。鼻の頭に汗を浮かべながら「ボツ、ボツ、ボクは」と訥弁で話し始めると止まらない。政治経

済、社会はもちろん文学、歴史、科学

まで話題が広がった。神戸出身。京大を卒業し一九五三年に大阪読売入社、同期の黒田清さん、中村勝さんとともに三羽鳥と呼ばれ、弥生時代小菅発掘特報、パクリ屋事件、大阪府警トバク汚職事件などを手掛けた名記者、デスクと聞く。

記者を志した理由を話してくれたことがある。中学校三年生だった一九四五年の八月十日、町内会長が敗戦を知

鈴木さんは八八年に西部読売を編集局参与で定年退職、地元短大で地域文化論を教えながら地元紙に健筆を振るつた。自身の体験から戦争に反対し、新聞の奮起を促す記事が多かった。九五年から市民団体「平和のための戦争展」の実行委代表委員も務めた。

無類の酒好き。ドイツ映画「会議は踊る」の主題歌が原語で飛び出す陽気な酒だったが一度、嘆きを聞いたことがある。「今や読売で黒田や鈴木と付



鈴木敬一さんの追悼集会にて

き合おうものなら、たちまちパージされよるらしい」と。後日、初対面の読売記者と名刺交換した折、鈴木さんの名前を出した。とたんに顔色が変わった。

「好色」ぶりも有名。酔うと必ずその方面の話になった。「大阪警視庁

(当時はそう呼んでいたらしい) 回りの時、クラブで大阪城公園に、のぞきツアーをやりよった。リーダーはNHKの某解説委員。真面目くさった顔で解説をしよるけど、おっさん若い時は」という具合。眉をひそめる向きもあつたが「性愛は自然の摂理」と意に介さなかつた。

二〇〇一年九月に脳梗塞で倒れ翌年四月十九日、七一歳で死去。九月、読売時代の部下のジャーナリスト、大谷

昭宏さんを招き追悼集会を開いた。打ち合わせに初めて自宅にうかがつた。簡素なアパート、書棚に本があふれていた。給料は酒と書物に費やしたのだらう。

倒れる直前まで地元紙「小倉タイムス」に三六一回にわたり連載した『記者学者』が鈴木さんの博学ぶりを示す。「遺稿集を」と思いつつ実現できないでいる。



福岡

どうしたら会員が増えるのか

白垣 詔男

(福岡支部／西日本新聞)

J C J 福岡支部ができたのは一九九七年四月二〇日です。

支部ができたいきさつはこうです。初代支部長となる、僧侶で西日本新聞OBの郡島恒昭さんが、「北九州支部の奥田正さん―毎日新聞OB―から

福岡支部をつくったらどうですか」という呼び掛けに応じて、組織化に乗り出します。新聞労連九州地連の現役、OBらに加入を勧誘した結果、二〇人ほどで結成しました。

郡島支部長から要請を受け、二〇〇〇

一年六月の支部総会で、私が二代目支部長に選ばれました。当時、私は西日本新聞の現役でしたので、会員の中では比較的若く、見回すと先輩ばかりという環境でした。しかし、諸先輩の応援もあり、そのことから民放の現役、OBの加入も増えました。周囲から動かされるような形でしたが、活動も若干活発になり、支部機関紙「ジャーナリスト福岡」を年間8号発刊した年もありました。

本部の方針に沿って、独自の集会をはじめ、友好団体のメディア総研やMIC（日本マスコミ文化情報労組共闘会議）などの共催で各種集会などを開きました。二〇〇二年春には、上記二団体とともに、「市民とメディア福岡」を組織して、市民向けの集会、学習会を企画しました。

その後、会員は一進一退で、現在は三五人です。昨年度は、民放労連九州地連の春闘学習会に出向き、会員を勧誘しました。呼び掛けに応じて、同地連委員長が加入してくれました。

さまざまな民主的な団体が増えているのと、どの組織にも所属したくないというジャーナリストが多くなっているのか、はたまたJCJに魅力（加入する利点）がないのか、会員の伸びは思うようになりません。私たちの力量にもよるのでしょうか、ジャーナリストやジャーナリズムに関心がある人が誰でも飛び付く活動、社会的に影響を与える言動を広くアツピールできないのが、組織が拡大しない原因だろうと思っっていますが、なかなか思うようにまかせないのが現状です。

「ジャーナリズムは真実を報道せよ」といった声が高まっているし、複雑多岐にわたる現象をすべて報道すること

の難しさやジャーナリズムの内部状況など、市民が知りたがっているマスコミについての内容を市民と共に考え、話し合い、その結果をマスコミ各社に申し入れるような活動を活発に展開できれば、会員は自然に増えていくのではないかと考えるものの、有効な処方箋を見出しきっていないのが苦しいところです。

「マスコミに何か言いたい」人は多いのですが、それらの人々と、どうしたら接触でき、私たちの活動を理解してもらえるのか、これからも、組織の実体を踏まえながら手探り状態が続きそうです。

日 経

都知事選と「平和箱」版画

杉見 徳明

（日経支部）

一九八三（昭和五八）年の東京都知

事選挙に、革新陣営から松岡英夫氏



J C J 鈴木議長（左端）らの呼びかけた松岡候補激励会で（右へ、木戸又一、松岡候補、松浦総三氏の各氏）

（当時七〇歳）が立候補した。毎日新聞の政治部長や論説委員を務めた松岡氏は、社共の推薦で告示のわずか五日前に出馬宣言。「自民党中曽根内閣の軍拡と大企業本位のファッショ的政治を阻止」と訴えたが、実績のある鈴木俊一候補（自公民ク推薦）に約九〇万票の差で敗れた。

当時、私は日経新聞整理部に勤務し、三人の子育ての真っ最中。夜勤が多いため、昼のあいた時間に版面を彫っていた。子どもらの日常や風物に、俳句もどきの文句を散らした「お遊び」ではがきに摺って知人友人に送るのを習慣にしていた。

美濃部亮吉と秦野章が激突した都知事選では社会部の都庁詰め記者として美濃部氏を連日追いかけていたこともあり、松岡対鈴木の都知事選にも関心は強かった。松岡氏が「投票箱を平和箱にしよう」と呼びかけたからだろう。私は彼の似顔絵と「春の都に 紙ふぶき舞え 平和箱」の文字を版画にして、その一枚をJ C Jにも送った。

すると機関紙「ジャーナリスト」四月号に掲載された。予想もしていなかったので嬉しかった。機関紙をぐんと身近に感じると同時に「整理マンとして、ひと肌脱がねば」という気持ちが固まった。

それから早くも二〇年余り。ほとんど毎月の紙面制作に整理の一員としてかかわってきた。と言っても、昨今とは大違いで、事務局の道家暢子さん、大野博さんの三人でなんとか間に合わせていた日々は長かった。

私は二〇〇五年末で定年退職。時間にゆとりができるので、原稿の入力やパソコンでの手直し、出張校正にも参加できるようなるだろう。「ジャーナリスト」のレベルアップに貢献できれば本望だし、制作費の経費節減もぜひ進めたいと思っている。

日刊工業

最盛期には二〇名の会員

大野 博

(日刊工業支部／元日刊工)

二人にお願いしたわれわれは無鉄砲だったなあ」という思いである。

そのころ、千代田地区労の議長をしていたのが、仲築間卓蔵さんで、春闘の時は日刊工業本社前で街宣車上で、応援演説をもらったものである。いま松田さん、隅井さん、仲築間さんいずれもメディア論壇の大御所として活躍している。一〇年ほど前、喉頭ガンを亡くなった長谷川至弘さんも地下でさぞ喜んでいいることと思う。

いまから三〇年前になるのか。「あんなことがあったのかなあ」という場面である。最盛期 J C J 日刊工業支部は二〇名の会員がいた。どんな組織でも核へコアがなくては、活力のある組織にはならない。あこのころの J C J 日刊工には長谷川至弘(のりひろ)さんがコア役で、万事取り仕切っていた。

その活動の頂点が松田浩さん、隅井孝雄さんを招待したことだった。松田さんには、神保町の薄暗い喫茶店に、隅井さんには飯田橋付近の小ビルの一室だった。この二人から聞くジャーナリズム論は新鮮だった。それにしてもご両人、よく来てくれたものと思うと感激を通り越して「お

東京新聞

“名古屋の壁”に挑む

島田 二喜雄

(東京新聞支部)

私が J C J のことを初めて耳にしたのは、中日新聞大津支局時代のことだった。同支局在任は一九六四年三月から六八年七月まで。「全国最高齢の谷口知事から、最年少の野崎知事へバトンタッチ」という私の記事が、社会面に大きく載ったことを思い出す。共同通信の甘木記者が「日本ジャーナリスト

会議というのが面白そうだから、どうだろう」と、話しかけてきたことがある。当時、私は新聞記者の労働組合運動の在り方については考えていたが、J C J については全く知らなかった。ただ「ジャーナリスト」という言葉の語感が余りにまぶしくて、たじろいだことを覚えている。

私の同支局在任当時、東京新聞は争議の激しい渦中にあった。(六五年七月三〇日、岩切信委員長、松岡昭良書記長ら四役解雇)。六八年八月、中日労組から東京労組へ移らないよう念を押された上で、私は中日新聞東京本社勤務となった。

J C J 東京新聞支部には最盛期、五人を超す会員がいたという記録を見たことがある。しかし、私が赴任した当時の複数の社会部デスクを含むメンバーは、既に会員ではなく、会員は争議を闘う東京労組員が中心メンバーだった。争議が全国的な支援の下で解決へ向かう中で、会員の交流会が一時はかなり活発に行なわれ、支部機関紙も発行された。その機関紙を探そうとしたが、押し入れのダンボール箱の山の中から発見するのは大仕事だ。当分、探し出せそうもない。

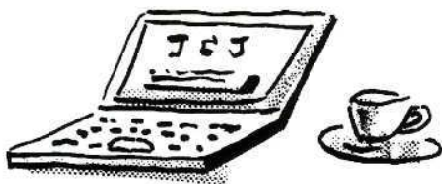
支部機関紙の編集長も既に故人。今は亡き多くの会員の顔も目に浮かぶ。新聞の昨今の状況を考えるとき、J C J の役割がいよいよ大きくなってきた

ことを痛感する。しかし現会員の高齢化は確実に進むが、新会員の加入は進まない。

つらつら考えるに、中日新聞社の労務政策が大きな壁となっていることに気づく。J C J と何の関係があるかと言われれば、その通りだが、労働組合との関連を考えてみると、極めて異常な事態といわなければならぬ。名古屋に本拠を持つ中日新聞社が、東京新聞の株式の過半数を取得、支配権を握ったのは六三年十一月。当時の東京労組員は七二〇人。やがて第二組合の結成。続いて「三九年大晦日のストライキ、暴力、ロックアウト、機動隊導入、逮捕」(『年々歳々五月の空の如く 東京新聞争議の十年』の目次から)と、激動の闘いの日々が続く。

「東京労組を脱退しなければ中日に採用しない」、激烈な組合切り崩しに耐えて、一二人が残った。非解雇者四人を除く一二〇人の東京労組員を中日が採用したのは一九六七年一〇月一日。一九五〇年のレッドパーージ以来、

新聞労働者の全国組織から孤立している中日労組は、今もその延長線上にある。中日新聞社は多数組合の中日労組と、少数組合の東京労組を明確に差別している。一般の中日労組員が東京労組員に近づきにくい職場構造「名古屋の壁」が造り出されている。J C J の会員拡大が、この壁に阻まれている現実に、すべての責任を負わせるつもりはないが、避けて通ることができないことも明らかだ。J C J 五〇周年を機会に、新たな課題に挑んでみたい。



新聞協会

ある先輩への手紙

— J C J 新聞協会支部の誕生といま —

官林 祐治

(日本新聞協会支部)

拝啓ご無沙汰しておりますが、その

後お変わりありませんか。今年には戦後

六〇年、J C J 創設五〇年ということ

で、秋の周年記念の懇親会場でお目

にかかれることを心待ちにしております。

先輩が以前お話しして下さいました

が、新聞協会にJ C J の支部ができた

のは一九五九年、六〇年安保の前年の

ことでしたね。組合の文化部と一緒に

なって、いまで言う新研活動を展開、

時には観劇会なども行なったとのこと。

このため職場の中にJ C J が市民権を

得ることができたとのこと。

私自身は八〇年に協会に入り、J C

J には八五年、創立三〇周年の時に、

斎藤茂男さんたちと「いま時代を見す

える」集会を準備したのがきっかけで

参加するようになりました。

新聞協会は新聞(報道)の倫理団体

として高い理想と理念を掲げています

が、その一方で事業者(経営者)団体

としての実態がどんどん濃くなってい

ると言われています。倫理では飯は食

えないということでしょうか。協会に

支部が出来たのも高い理念の一方で理

念とはおよそ縁のない仕事の現実の中

でそのギャップに悩む職員に仕事を通

してジャーナリズムに携わる意味、役

割について考える場を求める声があっ

たからだとおっしゃられていましたね。

六〇年安保、職場民主化闘争など組

合活動が活発だった時期は協会支部も

元氣ということ、二人三脚の意味合

いが強かったのでしょうか。これは逆

に言うとは組合活動が低迷するとJ C J も休眠状態になってしまふ関係にあり、いままさにそういう状況にあり、悩んでいます。

私自身のことでは、国家秘密法反対や朝日襲撃事件などの時期に組合とJ C J を一緒にやり、学習会なども合同で活発にやりました。秦代表委員を職場に招いてお話を伺いました。一定の成果を得て組合もJ C J も元氣になったと思います。またJ C J 賞選考の事務局的な仕事もさせてもらい、斎藤(茂男)さんと新井(直之)先生らの白熱した議論にジャーナリズムの醍醐味を感じ取ったものでした。

しかし、私自身組合を離れ、日常の雑事に追われるうちに、いつの日からか、協会の中ではつきりものを言うのがなんとはなしにためらわれがちになっていることに気が付きはじめたのです。協会職員はジャーナリストではない、団体職員であり加盟社サービスに徹すべきであり、加盟社の中で意見が分かれているようなことについて軽々にも

のを言うべきではないといった具合で
しょうか。組合の中にさえ言論の自由
を訴える雰囲気は少なくなったように
思います。

その間に有事立法、個人情報保護法
などの言論抑制立法が進んでしまいま
した。

先輩は、前におっしゃっていました
ね。新聞協会は戦前の苦い体験から再
び統制団体の道を歩まないとしている
が、戦争へ手を貸し、煽ったことが最
大の誤りなわけだから、有事立法など
を看過するようなことでは何の反省に
もなっていないと。

戦前、新聞界が一致して軍部に対し
て立ち上がっていたら、軍部の暴走を
くい止めることができたのではないか
と言われていますが、現在も似た状況
にありはしないかとも話されています
た。

「戦争のできる国」体制を目指す権
力とそれに手を貸し、煽る一部マスコ
ミ、それにきちんと反対できない新聞、
戦前の図式そのものではないかという

わけです。

深刻なのはだれかが指示してものを
言わない、言えないようにしたのでは
なく、一人ひとりの中に自己規制が働
いてものを言いにくくしていることだ
とも話されておられました。先輩のこ
の言葉には一言の反論もできませんで
した。私自身の問題だからです。

別なときだったと思いますが、先輩
はこんなお話しもされていましたがね。

新聞協会は公益法人である。国民の
利益をはかる団体、高い倫理観を持ち、
民主的な言論を維持することによって
国民の利益がはかれるとして作られ
た組織であり、新聞社の利益擁護のた
めの団体ではない、と。

新聞社それ自体、本来は言論の自由
をはかる手立てとしてあるのであり、
組織を維持することが目的ではないは
ずですが、よほど意識しないといつの
間にか目的と手段が入れ替わってしま
いがちです。

名コラムニストの丸山幹治氏は戦前、
学生だった子息の真男氏（政治思想史

家）から、「新聞はなぜ軍部の横暴に
反対しないのか。新聞は自由主義では
なかったのか」と問われ、悲しげに
「新聞は自由のためにではなく新聞の
ためにある新聞主義なんだ」と語った
という逸話を真男氏の文章で読んだこ
とがあります。新聞はこの命題を今も
克服していない、それどころかますます
新聞主義に陥る危険があるのかもし
れません。

記者クラブ問題、消費税増税への対
応などをみても、言論の自由、国民の
立場に立って事を進めるとの視点より
も新聞社の利益擁護に比重が置かれて
いないか、それがまた国民から見透か
されてマスコミ不信を招いてはいない
か、これが作用して権力におもねる姿
勢に傾く悪循環を作り出しているので
はないかという不安を感じます。

協会支部誕生のきっかけとなった高
い理想と理念のもとでそれとは一見無
縁な仕事の現実をどう埋め、自らの仕
事がどうジャーナリズムの現場に役立
つかを考える場の確保、いまその原点

赤旗

美しい人と人との力

小寺 松雄

(赤旗支部)

を再確認して休眠状態にある支部を困難があっても地道に起こしていく作業が必要なだと先輩のこれまでの一言、一言をかみしめながらこの暑い夏に思いをめぐらしていきたいと思えます。ぜひまたお話しを聞かせてください。まずはお体ご自愛下さいますよう心より祈念申し上げます。敬具

一人だった斎藤茂男氏があいさつで茨木のり子の詩「六月」を朗読した。

「どこかに美しい村はないか／一日の仕事の終わりには一杯の黒ビール／くわをたて かけかごを置き／男も女も大きなジョッキを傾ける」

「どこかに美しい人と人との力はなにか／同じ時代をともに生きる／親しさとおかしさとそうして怒りが鋭い力となって 立ち現れる」

六月という季節がいつべんに好きになった。

赤旗からの運営委員としては、長く事務局次長をつとめていた小島氏のほか、三戸、平林、藤森、末浪らの諸氏がかかわっていた。九〇年代初めの四年間は学習・党活動版において、JCJ とのかかわりはほとんどなくなった。その間に、九三年の総選挙時の「樞問題」があり、メディア界を巻き込んだ議論となった。先の諸氏はたいへんだっただろうと思う。

学校を出て一九七一年に赤旗編集局へ入局した。新人はおおむね校閲テレビ・ラジオ、ゲラ・オートバイに配属される。私はテレビ・ラジオだった。毎日、番組表を手書きでつくっていた。

隣りが日曜版で、宮崎定さんという人から「おい若いの、JCJにはテレビ人も多いぞ」と声がかかった。それで8・15集会に行ったのが最初だったと思う。「二度と侵略戦争のためのペン、カメラ、マイクを持たない」というフレーズは新鮮だった。

民放労連の人々と知り合ったのもJ

CJだった。隅井孝雄、諫山修氏は副委員長(時期はずれていたかと思う)。日テレ労組・河野慎二委員長はテレビマンらしいというかカッコよかった。七四年社会部に移り、翌年の8・15のJCJ賞は立花隆「田中角栄の金脈と人脈」で、本人インタビューも含めた取材をした。立花氏は七六年から一連の日本共産党ものを発表。当方は大反論キャンペーンをしたので、わが紙の氏とのインタビューはこれがただ一回となったと思う。

八〇年代、六月集会で、代表委員の

九〇年代後半の運営委員時代を終え、思わぬ運命で北京へ行くことになり、また四年の空白ができてしまった。「その間の日本について思うことは」と聞かれ、「ここまで来たかと驚いたのは、政党ビラを配った国家公務員が逮捕された、マンションにビラを配って逮捕されたこと」という事例をあげた。

二〇〇一年、北京へ出発する直前にNHKの関係者から「E T V特集で一



2005年4月丸山重威さんを迎えて

月末に放送された戦時性暴力の番組がひどく改変された」と聞き、気になったままだった。四年後、自民党などの介入を知ることになった。一定の時間がたつて真相の一端がわかる、ジャーナリズムというのは実はその積み重ねかと思う。

私は典型的団塊世代である。わが子より若い局員、そしてJ C J会員を迎える時代となった。

二〇〇五年四月、丸山重威運営委員・関東学院大学教授（一九七四年、ご近所になって以来のつきあいである）を

わが支部に迎えて話を聞いた。これを機に会員が三人ふえた。

私はあいさつで言った。「機関紙『ジャーナリスト』が一部一〇〇〇円かと思えば、確かに会費は高いかもしれない。高くないと思うためには、催しにできるだけ参加すること、その中でジャーナリスト同士のしっかりした結びつきをつくることだろうと思う」そのとき私の頭にあったのは「同じ時代をとみに生きる」「美しい人と人の力」という「六月」のフレーズだったかもしれない。

写真

第一線の人々、自由な雰囲気

蔵原 輝人

(写真家)

私が写真支部に参加したのは一九六五年頃でした。大塚にあった研光社というカメラ雑誌の出版社で行なわれた例会に、研光社の社長の永井嘉一さん

に誘われたのがきっかけです。

写真支部は、六〇年安保に結集した写真人が、翌六一年八月に集団で加盟して結成しました。写真家の田村茂さ



メーデー行進後の写真支部例会 1977・5・1 (左から二人目は田村茂さん)

ん、丹野章さん、川島浩さん、写真評論家の伊藤知己さんなどが呼びかけの中心です。会員には写真家では土門拳さん、木村伊兵衛さん、途中退会ですが浜谷浩さん、評論家では伊藤逸平さん、田中雅夫さんなどの写真界の第一線の方々が参加しています。非常に自由な雰囲気、駆け出しの私の写真な

ども真剣に批評してもらえて、私のその後の写真の礎となったのが当時の写真支部でした。

年に一度は奥多摩の数馬や山梨県の忍野の民宿で合宿をして、酒を飲みながら夜が白むまでさまざま話をしたこと、最も貴重な思い出です。写真の話だけではなく、それぞれの生き様を聞くことで、一晩のうちに月例会の何回分もの勉強ができたような気分でした。そうしたことに刺激をされて、まだ若手だった私たち支部幹事で、ベトナム戦争の終結時には、スライドとリレートークによる「ベトナム戦争を語る会」を、中越紛争で赤旗の高野記者が殉職した際には、中村悟郎さんに中越戦争の実態を聞く会などを開き、それぞれ会場を埋め尽くす参加者により大きな成果を収めました。

会員はフリーの写真家たちですが、仕事量も余暇も今とは違って多かったようです。いつもは一人で仕事をしているせいも人恋しいところがあって、特に8・15の集まりのときは積極的な

呼びかけもあって大勢が集まり、収支決算に少なからず貢献をしたはずで

す。J C Jを質より量で支えていた写真支部でしたが、J C Jは七〇年代の半ばになると活動が停滞してきます。評議員会に出席するに当たって、伊藤知己さんからは「写真支部はジャーナリズムの中心ではないのだから、あくまで縁の下に徹するように」と言われていました。しかし、J C Jをどのようにしたら改革できるのかという話に加わって行かざるを得なくなりました。共同通信の丸山重威さんや、機関紙連合通信、写真支部などが中心になって、京橋の新聞労連に間借りをしていたJ C Jの事務所、何度も組織のあり方について議論を重ねました。それがそのまま改革につながったという訳ではありませんが、その後の新事務局の誕生に大いに貢献したのだと思います。その後写真支部は活発に活動しましたが、八〇年代の終わり頃からそれぞれの会員に時間のゆとりがなくなっ

く、活動が停滞して行きました。それには私自身の責任を痛感しています。はじめをつけるために、九四年に写真

支部は解散をしました。会員は、個人会員となり現在に至っています。

「里の唄」と一応名づけ、関係者に呼びかけました。ローカル局のラジオ生番組にも出演した。同じ流れの「里の詩」を詩誌にも発表した。

また、「大原社会問題研究所」にも機会を与えられ、「ジャーナリストのユニオン」について、僅かな経験を話す機会も得た。

「実は――」という話になるが、ほんとは、これらの決心をしはじめたのは一〇年ほど前に、当時J C J代表委員だった岩切信さんにあるハッパをかけられてからである。

一一年前の一九九四年に「東陽社争議」がはじまった。朝日新聞社による企業ぐるみの労働組合つぶしである。争議突入前、私は組合役員はおろか労働組からも、籍があるだけでほとんど離れていた。六〇歳近くになり引退をきめこんでいたのである。

収入目当てに伝記を書いたり、雑誌に請負いの原稿を書いたりして、かなり気ままな第二の人生に入りつつあった。

広告

先輩に教わるということ

串部 満夫

(広告支部)

古稀などという年齢はいまやまったく稀らしくないが、私にとってはこのところせかされる年齢である。ここ数年、多くの知友、先輩が先立った。しかもその多くは、J C Jで知り合った方である。

言うべきことを、その内に機会があれば、という待ち方をしてはいけない、という思いがしてならないのである。

J C J 広告支部を設立して三五年。私のJ C J 入会歴と同じである。ただいくつかの偶然が重なって、J C J との縁はそれより数年古い。こまかいことは昨年『広告支部通信』に六回「広

告支部設立前夜」の話として書いたから触れないが、私が「広告労協」の役員をしていたことと朝日新聞社系列の仕事場にいたことが原因している。したがってJ C J 五〇年のうち四〇年前後はJ C J の中かそばにいたことになる。さて、いつか機会があれば言ったり書いたりすることもあるう、という姿勢ではだめだと、痛切に思いはじめたのはここ一、二年である。そして昨年からは、いくつかのことに取り組んだ。『広告支部通信』に書き、唄も書き、二曲ほどはC D に収録されたり地方の合唱団の持ち唄になったりもした。

争議を前にして、労組役員が次々とやめ、気がついたら私が労組役員に復活せざるを得なくなっていた。争議突入二日前である。

争議がはじまり、入退院を繰り返して、とても「支援活動」などできないと岩切さんに会いに行った。困ったら泣きつく私の甘えん坊根性がいままも恥ずかしい。

その頃だったと思う。岩切さんはこう言った。「朝日よ、どこに行くのか。そう問いかける運動をやってみる。朝日をえぐり出すようなそういう運動をな。それが出来なけりゃ、君の人生なんて何もないに等しい」

声は静かだったが私にとってはすさまじい一喝だった。

争議足かけ七年。岩切さんの期待にそえたかどうかはわからない。ただ私なりのやり方でとりくんだことだけはいえる。争議二年目にガン告知を受け、それをかかえたまま何とかしのいだが、争議終了後には右眼を失明していた。争議中、朝日告発の詩を書き、ドラ

マも書いた。裁判所に出した「最終陳述書」には私のJ C Jのキャリアが生きたとも自負している。一般誌にも書いた。この内『週刊金曜日』に書いた何回かは荒川恒行氏にアンカーをお願いしたが、最後の稿を私の本名にしたのには同誌現発行人の黒川宣之氏の言

がある。

「朝日は告訴してくる可能性がある。君自身が真正面から受けたまえ」

言論活動というものは、人生をかけた活動である。人生の終盤になって、岩切・黒川両氏から教わったのは幸せだった。

東海 / 広告

三上事務局長との貸し借り

中根 碩哉
(元広告支部)

私のJ C Jとの係わりは、いささか不純な動機から始まった。

一九七一年の春、『季刊「広告」——消費者とともに』の発行の準備をする過程で、雑誌の発行主体をどこにするかという議論になった。その時、J C J 広告支部として発行したらどうか、とアドバイスしてくれる人がいた。そのアドバイザーの荒川恒行広告労協議長に同行して早速J C J 本部を訪ね、

三上正良事務局長に相談すると、氏は一も二もなく直ちに快諾してくれた。

それが四月三〇日(金)のことで、ほぼ二週間後の五月一七日(月)には雑誌の編集会議のメンバーを中心とした一二名の名簿を本部に提出して、正式な結成総会も開かないままに、J C J 広告支部を突如として誕生させてしまったのである。

お陰で、雑誌はその年の秋に首尾よ

く創刊され、各方面から望外の評価を受けることができたが、内部告発的な内容の反動で私自身は翌七二年三月に名古屋支社に飛ばされることとなった。

この私の配転に重なる、J C Jの活動経験の豊富な若手の新聞記者一名も名古屋に転勤することになり、それを知った三上事務局長が一計を案じた。当時の東海地区には自覚的なジャーナリストも多く、J C Jの会員も決して少なくなかったのだが、どういふわけかJ C Jとしての組織活動が不足していたからである。

七三年二月二十四日(土)、この日は生憎雪の降る寒い一日だったが、東京からわざわざ名古屋に向いた三上事務局長は地元新聞とテレビの重鎮六名を集め、私たち二人を紹介した上で、J C J東海地区連絡会議の再建を提案された。折りしも名古屋は全国注視の名古屋市長選挙を控え、東京の美濃部革新都政・大阪の黒田革新府政に続けということで燃えに燃えていた矢先だけに、タイミングは全くぴったりだった。

た。

一ヵ月後の三月二十四日(土)には自力で二回目の会議が立ち上がり、四月の市長選挙が革新統一の本山政雄陣営の逆転勝利という好結果に終わると、そんなムードにも乗って月一回の例会、月二回の幹事会を定期的に維持できるまでになって、各職場の仲間たちの交流が深まり、会員も徐々に増えていった。

八月一日(水)には月刊「東海ジャー

ナリスト」が創刊され、名古屋で初めて企画された「8・15記念の夕べ」にも、生憎の雨のなか、当選した本山名古屋市長をはじめ八四人が参加して、大成功を収めることができた。以降の東海地区連絡会議の活躍ぶりは紹介するまでもないが、私はJ C J東海の再建の初期の段階に怠けることなく参加して、東京で作った三上事務局長への借りを少しでも返すことができたのである。

出版

「裏方作業」で得たもの

清水 克郎
(出版部会／岩波書店)

J C J創立五〇周年おめでとうございます。九五年の四〇周年記念の集いのことが懐しく思い出されます。私が

J C Jに入会してから早いもので二〇年がたちました。ずっと出版部会(以前は出版支部といいました)で活動し

てきました。世話人になってからも一五年たちます。

出版部会は橋本進さん、梅田正己さんと続く代表のもとで、これまで編集、流通、憲法、教科書問題など多くのテーマの例会を年数回ずつ開き、四冊のブッ



秦正流さんを中心に吉野源三郎初代議長の墓参に行く。1984年頃。右から四番目が筆者

クレットもつくりました（注）。出版は長く出版労連など労働組合運動で活躍されていた方が多いのですが、私はほとんど組合運動経験がありません。二〇代に数年間いた『世界』編集部から人事異動になってまもなく入らせていただいたので、J C Jで学んだことが大変大きいと思います。

その頃秦正流さん、橋本進さん、今

井康之さん、山崎晶春さん、などに連れられて、吉野源三郎さんの墓参に行ったことが原体験のように思います。特に毎年の「いま時代を見つめる」は八年の第一回から、会場整理、書籍即売、受付、後片付けなどをしながら聴きつづけ、いろいろ学びました。九〇年代前半には数年間企画委員会に参加させていただき、準備の段階から、斎藤茂男さんを中心に長時間続く議論の場に出席できましたことは本当に貴重な経験でした。また岩波書店では今井康之さんを中心に岩波支部として独自の活動もしておりました。

茶本繁正さんが書いた『ドキュメント軍拡改憲潮流』（五月社 八三年）という本があります。草の根からの改憲運動、改憲実働部隊、教育反動化の嵐、仕組まれた教科書攻撃、右派宗教団体、教育勅語のある風景など、現在の状況を先取りする内容が多く含まれています。この本のもととなった研究会が現在の『世界』編集長の岡本厚さんの肝煎りで、丸山重威さんを中心と

する共同通信社社会部グループ、日教組教育新聞などの記者というメンバーが、茶本さんの仕事部屋や岩波書店の会議室に集まって開かれていました（現在も続いているそうです）。当時二〇代の私はこの会で得るものは多かったですと思います。

『世界』とJ C Jで両方に関わって、私をはじめお話しのできたのは茶本さんでした。

この数年間は、亀井淳さんを中心とするJ C J賞推薦委員会にも加えていただき、出版だけでなく、新聞、放送の選考過程に立ち会えることは本当に貴重な経験です。

最近強く感じるのは、これまでJ C Jの活動を続けてこられたのは、大学時代に新聞記者になりたくてそのため勉強をして、五〇歳近い今になって、それにこだわっているからではないかと思えます。J C J活動を通じて、自立した個人の立場に立ち、ネットワークをつくりながら、現実の底にある矛盾をとらえて、社会の歪みを正してい

く問題提起をする努力をしたいと思っています。

〔注〕J C J出版セミナー

「今、問われていること 今日憲法状況とジャーナリズム」(安江良介)

「書籍出版の生きのこる方途 (一) 現場からの探求 現場からの提言」(今井康之他)
「書籍出版の生きのこる方途 (二) 編集と書店の現場から」(清田義昭他)
「内幕 憲法調査会はいま」(高田健)

一人ひとりにさせられてしまった職場では、企業人間として流れには逆らえないのかと変に察したりしているが、実の所あたえられた環境の中で、何を目指してどう納得して働いているのか深くは汲み取れない。

放送

放送部会の今と、思うこと

茂木 章子

(放送部会)

九七年に立ち上げられた放送部会は、八年後の今三〇名ほどの部員を擁し、その内一〇名は女性である。FM放送に働く若者やフリーの作家もあり新しい息吹きは芽生えている。

月一回の例会では、本部の報告、情勢討論、各局の現状説明、講演催物時の運営協議等を基本に行なわれている。部員は放送局の職種をほぼ網羅しているのでその情報は多岐にわたり、関係のない職場の者にとっては、理解しにくかったり今さら聞けないが……等の

内容もあり会議は横道に逸れることが多々あり、未消化、時間切れのため二次会の席でということが時にはある。

部会の問題は、現役や若手の参加が少なく、職場の状況や今起きている事象を関係者はどう捉えているのか、反応や空気が読みとれない悩みを抱えている。

特に退職した私にとっては、各局の不祥事を聞く度に何故、どうしての疑問が大きくなるばかり。しかし市場原理、成果主義などの導入が顕著になり

さまざまな動きに私自身は、J C Jに参加していることで、業界の異なる人、色々な分野の方達の意見を聞き考えること、材料や収穫があり、自分の考えを確立することができて楽しい。

これからは女性の会員を増やすことが課題ではないか。会議では女性問題や女性の視点で考えるとこうなるなどの話題が少なく、また提案もしにくい。男女格差の問題などは憲法と照らし両性で討論すべきではないかと思う。これも女性が増えれば違和感なく、お互いの事として普通に話し合える状況が生まれるのではないかと、雇用機会均等法施行二〇年の今年いろいろと感じさせられる。

VII

働く人々、市民と連帯して

「再び戦争をしない国」求め

四宮 晴彦

(日刊工業支部／元日刊工)

ニッポンは、依然として「封建遺制」「皇国史観」から抜け出していないように思う。

昔から「社会の木鐸」としての役割を果たすのは、健全な新聞ジャーナリズムの責任だと言われてきた。第二次世界大戦を仕掛けた日独伊のファシスト連盟が敗北して以来六〇年、果たしてわが国ジャーナリズムは、権力に真正面から立ち向かってきたのであるか。

日本国憲法の平和的民主的条項を改悪するために、周到に準備し、着実にその歩を進めてきたいわゆる「改憲派」勢力は、このところ一気に露骨な「九条改悪」に向けて公然と頭を持ち上げてきた。

* いま「改憲派」に弱腰のマスメディア

ア

五〇年前、日本ジャーナリスト会議（JCJ）が設立されたとき、私はピカピカの大学生だった。

高校生まで生徒会機関紙委員会に所属し、年間一〇号の新聞発行に携わってきた経験を活かすことはできないものかと、ある新聞社の出版局で「週刊誌」編集のアルバイトをした。

私はその職場で先輩から、「JCJ」がスタートしたという新聞のベタ記事を見せられ、それで知った。

「吉野源三郎」（一八九九〜一九八二）という名前が、今でも脳裏から離れないくらい強烈な印象として残っている。

その理由は、高校時代の社会科の授

業で学び討論した「米軍占領後の日本は、全面講和かそれとも単独講和を選ぶのか」のテキストに、岩波書店発行の月刊誌『世界』に掲載された「講和問題特集号」（一九五一年一〇月号）に接したことにさかのぼる。

当時の『世界』編集長が、吉野源三郎だったことと、「JCJ」の議長にその名を発見したことに強烈な感動を覚えたものだった。

当時、「全面講和愛国運動全国協議会」が結成され、全面講和を支持する署名が四八〇万を超えて盛り上がり、多くの新聞論調も全面講和支持に傾いた。

しかし、米国一辺倒の政府は国民の全面講和要求を踏みにじり、米国内の単独講和の道を選んだ。今日の日米安保体制の基礎を作り上げたのである。

* JCJは、創設時の意気込みで奮闘を

戦後の日本の真の独立、平和、中立

を保障せよという日本国民の要求は、「再び戦争をしない国」を求め続けており、マスメディアが国民の目線で言論・報道を展開するための励ましと、監視の役割を担ってきたのが、「JCJ」であったし、今もそうである。

新聞、放送、出版の論調は、国家権力の介入や妨害によって紆余曲折を繰り返してきた。

憲法改悪との関連で言えば「レッドパージ事件」「朝鮮戦争」（五〇年）「メーデー事件」（五二年）、「破防法と公安調査庁の発足」（五三年）、「自衛隊と防衛庁の発足」（五四年）、「小選挙区制導入」（五六年）、「日経連のマスコミと労働者への公然とした懐柔工作・安保闘争の総括で」（六〇年秋）「部分的核実験停止条約と第9回原水爆禁止世界大会」（六三年）、「福田赳夫内閣の有罪法制研究」（七六年）、「海部俊樹内閣のPKO法制定」（九〇年）等々、取り上げれば切りがないほどマスメディアの言論・報道は揺れてきた。

このところ特に、NHKの報道番組が放送前に、政権与党の幹部から介入を受けた事件だけでなく、「地方紙（県紙）」を除いて、全国紙の揺れが激しくなったという指摘もある。

これらの状況に黙ってはいられないとして、わが国の良心を代表する文化人九氏が「九条の会」を起こし、国民に向けてアピールを発表した。

当然、JCJはじめメディア関連の諸団体が結束して「マスコミ九条の会」をスタートさせた。

JCJはいま、初期の「吉野源三郎精神」に立ち戻って、創設五〇年という節目に当たって、新たな決意に燃えていることと思う。

JCJの今後の発展を期待する。

「JCJふらっしゅ」の輪

竹内 希衣子

（出版部会）

JCJに参加してから、もう一〇年以上になるでしょうか。故斎藤茂男さんとお話して魅了されてから、ぜひ参加したいと思うようになりました。誘っていたら出版部会に入れていただきましたが、総会、部会など数回の参加のみであまり貢献しない会員で申し訳なく思っています。ただ毎日のよう

に配信される「JCJふらっしゅ」の熱心な読者ではあります。大手新聞や週刊誌からは得られない視点の情報に接し、社会的な情報に対する「複眼」をもつことが出来る、と実感しています。

こんなことがありました。二〇〇四年五月、橋田信介さんがイラクのマハ

ムディアで殺害された時、ある新聞に銃が貫通した跡の残る橋田さんの帽子が幸子夫人のもとに返された、という報道とともに帽子の写真が掲載されていました。橋田さんは車の炎上によって歯形で確認されたほど焼けた遺体だったとあったのに、なぜ帽子はまったくこげていないのか、とてもフシギでしたがどこにもその理由は書いてありませんでした。

「JCJふらっしゅ」にメールを送り、記者達が何か知っていらしたら教えてほしい、と書きました。結局かなり後になってから、幸子夫人が「文藝春秋」誌上に一緒に車に乗っていた甥の小川さんが重傷を負いながら橋田さんの帽子をもって車をおりて逃れ、後に亡くなったのだが、帽子は焼けなかったのだ、と明かしていて、私の疑問はとけたのでした。この情報を私は再び「JCJふらっしゅ」に送った覚えがあります。

「JCJふらっしゅ」担当のKさんは実に対応が早くて、ちょっとした疑

問、質問、集案内などメールを送るとすぐに丁寧な反応を下さるので、ついつい気軽に送ってしまいます。

集案内はとも多岐にわたっているもので、例えば「九条の会」が地域、職域に連のようひろがりつつある状況を、集案内からも知ることができません。私も世田谷の九条の会の設立記念の会のお知らせと報告を掲載していただきました。

憲法記念日、教育基本法などの集会に日比谷野外音楽堂、とあったりする

と安保世代の学生だった私は血がさわ

ぐ思いで、トコトコ出かけたたりしてしまいます。様々なしがらみからなるべくフリーな情報をこまめに、ユーザの都合の時間帯で接することができるようにしたツールは、これからも大いに活路を見出していくことができると思っています。JCJの会員がなるべくみんなに参加して、オルタナティブな情報を共有できる場として、機能していくことを期待しています。

歴史を動かす事業を地道に

高科 憲邦

(広告支部)

昭和四五年二七歳。五年間勤めた信用組合を退職。その信用組合入社当時は、まだ、労働運動が華やか時代であった。労働者の生活と権利は労働組合によって擁護されていたという印

象を強く持った。今でこそ労働運動の話題は少なくなり、若い人には少し馴染まないかもしれないが、当時は、労働運動をマスコミも積極的に新聞等で連日のように報道していた。

最近、六〇年代の日本映画をテレビで何本か見る機会があった。労働争議のシーンをいくつか目にした。そのくらい労働運動は世相を反映していた。政治を動かすほどの力があつた。

私が勤めた信用組合にも労働組合があつた。それも台東区内の労働運動をリードするほどの組合であつたので組合員の意識もかなり高かつた。労働組合が企業をリードしていたような感ずらあつた。

学生運動を多少経験していた私は正義感が強く、元氣のよかつたところもあり、入社早々で職場の闘争委員に選ばれ、三年後には青年婦人部長に、その翌年には情宣部長に推された。地域の労働運動のリーダーシップを取っていた労働組合だっただけに、組合運動も一企業内の枠にとられず、日米安保条約廃棄、ベトナム侵略反対、中国、北朝鮮、ベトナムに向けた三矢作戦の粉砕と、戦争準備のための自衛隊適格者名簿粉砕、小選挙区制反対、物価値上げ反対等、国際的国内的政治・経済

問題をスローガンに掲げていた。なぜか職場内の要求が陰に隠れた感じがしたものであつた。

世の中の変革を目指した労働運動の中で私がとりわけ感激した歴史的事件があつた。美濃部革新都政が実現したときであつた。青年婦人部長として先頭に立つて革新都政実現に向け全エネルギーを注いだ。その時の記憶がいまでも鮮明に脳裏に焼き付いている。歴史を動かす大事業に身を置いている自分に誇りを持ったものである。

一方、軍事国家を目指す政府は産業再編成を着実に推し進めてきた。再編成は、中小金融機関にも及んだ。統合をねらつた金融二法案により、私の勤める信用組合にも吸収合併の波が押し寄せてきた。まず、平和相互銀行から役員、部長クラスと一部職員が送り込まれてきた。あれほど団結力のあつた労働組合はみるみるうちに弱体化、骨抜きの状態になつた。

私はこのまま信用組合に残るべきか、新天地を求めるか二者択一を迫られた

が在職中の五年間で金融全般の概要を学び、実務もおおよそ経験したこともあつて、信組を去る潮時と考え躊躇なく決断した。

そして、若い頃の夢であり渴望していたデザイナーの仕事に就くことを決心した。退職して一か月も経たないうちに、運よく全く未知のクリエイティブプロダクションのAEとして採用された。クリエイティブの能力を評価されてではなく、プロダクションの弱点、数字に弱い社員をカバーする人材を求めていたニーズにすんなりはまったからに他ならなかつた。

入社早々、いきなり一〇社近くのクライアントを任された。その中に晝教育図書(株)があつた。当時の晝教育図書は組合運動が盛んで、信組時代の組合運動がオーバーラップしたものである。

クリエイティブのことをろくに話せなかつた私は、クライアントとの関係をスムーズにするため労働運動の話を取上げて話題にした。このときほど労働

運動をやってきてよかったと心より喜んでものである。いくら好きで飛び込んだクリエイティブの世界でも、一八〇度の転換であったので、最初はかなり苦労した。

暁教育図書には、詩人会議の三田さんが勤務していた。広告のことを学びながら業界の情報が欲しかった私に、東陽社に勤務していた串部満夫氏を紹介してくれた。これが私とJCJとの始まりとなった。

昭和四六年JCJに入会。未組織労働者となって職場の諸要求だけにとどまらず国内外の政治・経済的課題で闘ってきたことはあったといっても基盤が職場にあるのとは違って、当初は随分戸惑ったものだった。当時、「季刊広告」（昭和四七年三月発行の2号から「季刊広告批判」）は、消費者の観点に立った編集で、広告業界を知る上で心強い味方であった。

組合運動五年、JCJ活動三五年。青年時代の組合活動による貯金が、JCJ入会三五年、特に目立った仕事は

しなかったが、変節することなく地道に歩んできて、JCJ活動に携わってきたことを感謝している。自分たちが

主人公の世の中をつくる歴史的事業を、いまの若い人に経験させたいと痛切に思っている。

市民と向き合える場に

山田 寿彦

（北海道支部／新聞）

「われわれは、憲法が国民に保障する表現の自由の意義を深く認識し、真実、公正な報道、評論によって国民の知る権利に応え、社会の公器としての使命を果たす。このため、あらゆる権力から独立し、いかなる不当な干渉も排する」

これは、私が所属する毎日新聞社の編集綱領（一九七七年一月制定）の書き出しの部分である。ここにはジャーナリズムが拠って立つべき基本的な姿勢が書かれている。それは普遍的なものであって、社が違おうともジャーナリズムに携わる者なら誰一人否定しな

いだろう。

ジャーナリストは、それぞれに意見や思想、世界観に違いがあろうとも、「共通の価値」を守ることにおいて結束すべき職業集団でなければならないと私は信じている。

しかし、残念ながら日本の組織内ジャーナリストは必ずしもそうではない。「わが社」意識が強過ぎて、「共通の価値を脅かす共通の敵」に対してスクラムを組もうという意識が希薄である。会社の壁を超えた「ジャーナリスト・ユニオン」が生まれないことが象徴的だ。

ジャーナリズムの信頼性を高めるために結束するより、「わが社」にばかり目が向いてきた結果であろうか。特に新聞は年々、信頼度を低め、そもそも新聞を取らない「無読層」の増加が顕著になっている。

日本新聞協会がまとめた「二〇〇四年 成年層と新聞調査」の結果は衝撃的だ。調査対象は首都圏の一八〜三五歳の男女。「月決め購読紙あり」は96年80・9%↓04年70・1%。「購読なし」の学生は96年16・0%↓04年23・9%。若年世代で新聞離れが進んでいる。購読ありの70%の中身も問題だ。購読を始めた理由のトップは「勧誘員に勧められて」の29・0%。「サービス（景品？）が良かった」「チラシが役立つ」などが続き、「読みたい記事・コラムがある」はわずかに11・2%だった。新聞の評価では「信頼できる」が96年58・3%↓04年50・6%。どの数字を見てもゆゆしき事態である。

JCJはジャーナリストが会社の垣根や組織内・フリーといった立場を超

えて手をつなぐ場になってほしいと思う。仲良しクラブのサロンを作りたいという意味ではむろんない。ジャーナ

リズムに批判と期待を抱く市民と向き合える場でなくてはならない。そのために、やれることをやっていきたい。

「書く」と「読む」と

安藤 健
(北海道支部／新聞)

札幌の本社を離れ、オホーツク海に近い北海道新聞北見支社で一年八カ月間勤務した。「何でも屋」として走り回り、書き続けた毎日、改憲やイラク戦争といった、ジャーナリズムを揺さぶる大問題からは縁遠い環境だったが、私にとっては、新聞記者に求められるものは何かということ、あらためて実感させてくれる現場となった。

北見には、全国紙三紙が支局を構えているが、記者の数でも部数でも他社を圧倒する道新に対する期待の大きさを感ぜないわけにはいかなかった。その半面、日々の紙面が厳しい目で批評

されていることも肌身にしてみた。

一方で北見には、新聞購読世帯数が、道新と全国紙三紙を合わせても五〇%を切る「新聞不人気地」という側面もあった。そのため、「どうすれば読んでもらえるか」ということも、研究しなければならぬ毎日でもあった。

新聞が北見で厳しい環境に置かれている背景には、市政から事件・事故まで生ニュースを網羅したフリーペーパー「経済の伝書鳩」の存在があった。

そもそもはタブロイド判の広告媒体であり、記者クラブにも所属していないが、全戸配布という驚異的な機動力

で、同紙は市民の圧倒的な支持を集めている。都会で顕著な「新聞離れ」の先を行っている土地だと言えるかもしれない。

市政、市議会のゴタゴタ、経済界の動きは、ただ表面を追うだけでは、地に根を張ったフリーペーパーに先を越されることも少なくなく、読者の支持は得られない。そこで必要とされたのは、深い取材に裏付けされた筆力と、背景を読む洞察力だった。

ただ、北見には、新聞とは別の意味で、市政や経済界に大きな影響力を持つ、もう一つの「メディア」が存在した。

ほぼ毎朝、会員に配信される通称「FAX通信」こと「マスコミ北見」だ。

筆者は元地元紙記者。市幹部、市議、経済界首脳と太いパイプを持つ彼は、鋭い記事を発信し続ける。ファックスはコピーされて市役所内部や企業間を駆け巡り、マチを毎朝のように大きく播さぶる。当然、「ゴシップだ」「ブラッ

クダ」と切り捨てる市民は少なくないが、その取材力と表現力には脱帽させられることもしばしばあった。

新聞社の記者として記者クラブに詰め、紙面を「埋める」仕事をしていると、それ以外のメディアを異質なものとして眺めてしまうことは少なくない。しかし、そんな異質なメディアに挟み撃ちされる格好で競争してきた北見での日々は、新聞界の常識がいつまで

も通じないであろうことを予測させられた。

「新聞はこういうものだ」という意識に視野を狭められていないか、読者が求めるものではなく、「自分たちが読ませてやっているんだ」という傲慢な気持ちに陥っていないか……。記者として「書く」ということの原点を実感させられたような気がしている。

他団体と連携を強めた活動を期待

杉山 正隆

(北九州支部／歯科医師)

私は一九六二年生まれ。新聞社などと言えば中堅どころでしょう。現在は歯科医師が本職で、市の介護認定審査委員をするなど医療・介護の専門家です。

前職は毎日新聞（東京）の記者でした。現在も、医療に関する記事を執筆

しており、本年七月のICCAP（エイズ国際会議）神戸会議を取材するなど、「二足のワラジ」を履いています。JCJでは運営委員に加えていただき、諸先輩の皆様には刺激を受けながら、私からも微力ですが、情報発信や意見交換が出来たら、と考えているところで

す。

一九二八年（昭和三年）生まれの私の父も歯科医師です。北九州市の一九二〇年（大正九年）創業の杉山歯科医院で、「小倉の赤ひげ先生」と親しまれている父と二人三脚で、ほぼ一〇〇%保険治療をしています。

私が毎日をやめたのは、杉山歯科医院が倒産の危機に瀕したからでした。医療取材を手がけていた私にとっても、医療を取り巻く情勢は想像以上に緊迫したものでした。患者・国民負担増が突出しているのに、保険で受けられる医療は大幅に縮小しています。患者さんのことを思い、頑張れば頑張るほど赤字になる。患者さんから出来るだけお金はもらわない父のやり方は、今の保険医療制度の中では通用しなかったのです。

公正さを担保する審査・指導も非常に複雑で、猫の目のように方針が変わります。こうしたことから、実際の治療内容とカルテ・レセプトに記載する

内容には「差」があるのが実態です。常に「不正・不当」とされる恐れがあると見え、「医師はまじめに治療すれば良い」とのごく普通の感覚が通じない世界なのです。法律・規則で定められている以外のローカルルールや役人の個人的な運用などがまかり通っており、患者さんはもちろん、現場の医師・歯科医師たちにとっても良く分からぬ「ブラックボックス」のような世界なのです。

マスコミで、こうした危うい状況を理解している報道はほぼ皆無です。医療ミスには焦点を当てても、その背景にある医療現場の苦悩をなぜ取材しないのでしょうか。「医師は金持ちだから、多少苦しんでもいいんだよ」と友人の記者は言います。しかし、こうした医療保険制度のヒズミにより、患者さんが受けられる医療内容が有形無形に制約を受けていることに気付くべきだと私は思うのです。

最近、孤独死や自殺が急増しています。「自己責任」が当たり前のことと

なり、マスコミも「痛みに耐えるべき」などの論調が大勢です。自己責任論は「公的責任縮小論」と言えます。お年寄りが一人で亡くなっても仕方ないこと、自殺は弱い人間のすること……。確かに一面としては正しいことかもしれないませんが、日本はいつからこんなひどい国になったのでしょうか。医療だけでなく、介護保険も、年金も、障害者福祉も、どれもこれも負担増と内容の低下ばかりです。小泉改革のお先棒を担ぐマスコミの責任は重大です。

医療界でもこうした惨状を、黙って見過ごしているわけではありません。憲法二五条で保障された社会保障の「改悪」阻止に尽力している医療関係者は決して少なくありません。「医師・医学者九条の会」など平和運動に取り組みつつ、社会保障充実に情熱を燃やす医師・歯科医師が各地で立ち上がっています。九条と二五条（社会保障）は表裏一体ととらえ、「憲法改悪阻止」を訴えています。

J C Jは設立五〇年。取り組むべき課題は日に日に増えています。ジャーナリストが団結するとともに、広く様々な人々と連携を強める必要性を痛感しています。さもなくば、日本は、そして世界は、今以上に生きにくいものとなってしまおうでしょう。私には九歳の

息子がいます。この子らには憲法の理念を生かした日本のままでバトンタッチしたいと思うのです。

J C J会員の皆さん、ジャーナリスト、市民の皆さん、手を携えて、なおいつそう頑張っていきましょう。

報道職場復帰めざしJ C Jへ

加藤 剛

(東海支部・元中部日本放送)

一九七二年秋、私はJ C Jに入会した。解雇撤回闘争の途上での入会であった。首を切られて働く場がないのになぜJ C Jへ?……。この私が「私とJ C J」というタイトルで手記を書くとなれば、まずこの問いに答えなければなるまい。

一九五七年四月、私は中部日本放送(C B C)に入社した。学生時代に少し演劇をかじったのでテレビの制作関

係を希望したが、実際には報道部に配属され放送記者となった。記者を希望したわけではないのに記者になった。イヤではなかったが、もし何かの拍子で他の部署に配置換えされたら、割合あっさり職種変更に応じたかも知れない。恥ずかしい話だがそういう頼りない記者、それがこの私であった。こういう例は欧米では少ないようだが日本では結構多い。とくに放送関係では

よくある話だ。

ひよんなことから歴史は変わると言われるが、小さな一個人、この私の人生にも同じことが言える。私が労組役員になり、専従書記長になったとき、いわゆる民放「合理化」の嵐が吹き荒れ、組合弾圧が首切、配転などの形で全国的に横行した。専従書記長の任期を終え、報道職場に戻って間もなく私は報道部から異職種の営業部へ配置転換された。来たな! 私は組合活動へみせしめ弾圧であることを直感した。ほかにも不当な配転が幾つかあり、民放労連C B C労組はこれを組合弾圧と受け止めて配転反対闘争を開始した。会社は配転反対のリボン闘争や鉢巻着用を理由に私を懲戒解雇し、労組はこれを不当解雇と受け止めて解雇撤回闘争を開始した。一九六五年七月のことである。

以来七年の闘争の中で仮処分裁判の勝利は相次いだ。しかし闘いが長期化する中でC B C労組は会社派に大会評議員の多数を制せられ、民放労連を脱



CBC東玄関前で（右が筆者）

退した。労組は労連脱退の後も解雇撤回闘争を続けたが一九七二年秋、本訴判決を前にして会社から「解雇撤回、関連会社での研修のあと営業職場へ復職」という和解案が出るとこれに飛び

つき、この線で和解するよう私に勧めた。私は「営業への復職では見せしめ配転が残る。報道への原職復帰を目指して闘いを続ける」と表明し組合執行部と対立した。どこへ戻すのかは職場でも論議になった。そのとき支援の仲間の一人が「ゴーさん、あくまでも報道への復帰を目指すのならJCJへ入るべきではないか」とささやいた。たしかに、JCJの会員になれば私自身が腰を据えることになるし、仲間にも、そして相手側にも私の気持ちが半端で

ないことを知らせることにつながる。私はJCJの会員になった。同年一二月CBC労組は会社案での和解を多数決で決め、解雇撤回闘争の打ち切りを宣言した。その後の闘いは困難を極めたが、一九七七年春、民放労連と職場・地域の仲間の支援の輪が広がる中で私は二年ぶりに職場に戻った。写真は二人のJCJ会員（私と大西五郎君）が解雇撤回、職場復帰を果たした日のCBC東玄関前の一コマである。

機関紙活動で「着眼大局」

今井 精一
(神奈川支部)

私は、民間の小さな労働組合の支部で、「日刊紙活動」という機関紙活動に関わっています。そんな私が、JCJという組織に関わることになるのは、かつては思ってもいませんでした。

神奈川支部の清水さんに誘われ、私のような者でも入会できることを知り、神奈川支部が結成された直後くらいに入会したと記憶しています。職場での活動や、機関紙協会の活動があつて、

ふだんの活動にはなかなか参加できません。それでも、一二月集会や六月集会に参加することは大きな楽しみになっています。

ふだんは、民間企業の製造現場にて、そこで労働組合の機関紙活動を中心に活動していますが、視野が狭くなることは否めません。最近の私にとって、この点を補ってくれる柱がJ C Jと機関紙協会になっています。

「着眼大局着手小局」という観点は、機関紙活動を始めたころに機関紙協会の大先輩から聞いたことばです。日々の労働と活動、そして生活の中で、現実に着手できるのは「小局」でしかありません。そんな私が「大局」を見直し、めざすべき地平線を改めて展望し直す上で、J C Jに求めるものは大きくなっています。

ジャーナリズムも機関紙も、その時代、その時点に対する責任を果たそうとすることが共通する役目だと考えてきました。たしかに、技術水準や組織的な力や影響力は違うでしょうが、共

通した性格もたくさんあります。だから、報道一般からではなく、J C Jとのふれあいから学ぶものはたくさんあります。

J C Jが属人的な組織であることも、魅力です。ジャーナリズムの現場にいる人たちとは、なかなか接触できませんが、それに近い人たちに会えること。学者や研究者だけでなく、ジャーナリズムに関心の高い人たちの話も聞けること。その人たちの人としての魅力に接しられること。これは最大の楽しみです。

最近、神奈川支部の取り組みで、在日米軍の「キャンプ座間」の現地見学と、米本国からの軍団司令部移転に反対している人たちとの交流会に参加しました。この時の成果を土台に、組合支部の機関紙で特集を組むことができました。組合の機関紙で、独自にこうした機会をつくることは簡単ではありません。おかげで、市民団体とのつながりもできました。

機関紙協会神奈川県本部では毎年、

機関紙コンクールを続けてきました。

かつては、県知事賞やいくつかの首長賞を出していたこともありましたが、受賞者が喜ばないこともあって、今はやめています。その代わりに、J C Jの神奈川支部が『賞』を出し、審査委員も派遣してくれるようになりました。受賞者にも喜ばれていますし、審査では新しいDNAが注入されて内容が充実してきました。機関紙協会の役員として、神奈川支部の協力を感謝しています。

平塚地域で、二〇〇三年の春から老舗の民間病院の閉鎖に反対する運動がありました。一年五ヶ月の運動で、別法人に売却して地域医療を残すという成果を挙げました。買い取った法人の経営姿勢もあり、問題も多く手放して喜べる実態ではありませんが、闘いの実績は実績です。この闘いの大事な節目に、J C J神奈川支部と機関紙協会県本部で共同取材ができました。「神奈川新聞」の支局からも参加があり、この取材がいくつかの媒体で生かされ

ました。
 こうした、J C J支部と機関紙協会
 県本部との共同も、発展させたいと思っ
 ています。J C Jの活動に「市民」が

加われる意義と、それによる可能性を
 生かすために、微力をつくしたいと考
 えています。

メディアの役割に大きな力

土倉 敬

(香川支部／山陽新聞OB)

私は山陽新聞記者として働いたのは
 一九五四年(昭和二十九)から一九六
 二年(昭和三七年)までの八年余です。
 この間、最も印象に残っているのは一
 九六〇年(昭和三五年)の一週間に渡
 る大闘争です。

不当に低い賃金の引き上げ、不当な
 移転をやめよ、嘱託などの社員化など
 についての要求がほぼ全面的に解決し
 ました。このストライキでは私が執行
 委員を務めていた香川県の高松支社が
 第一波に指名され、その任務をやり遂
 げました。この感激は生涯忘れること

がありません。

その後、危機感を抱いた経営者、日
 経連は第二組合を作り、百万都市の紙
 面づくりを批判した則武委員長ら五人
 の首切り、長期に渡る裁判闘争などは
 二〇〇三年(平成一五年)に完成した
 組合史『われら新聞労働者』に詳しく
 紹介されています。組合の力が強くな
 れば、真実の報道を目指す紙面づくり
 の上でも大きな力を発揮することを証
 明しました。

一九六〇年(昭和三五年)ごろ、会
 社側は「合理化」を進め、「頸腕症」

のような職業病が開始していました。
 この問題が連載企画「合理化」として
 取り上げられ、大きな反響を呼びまし
 た。また、一九六一年(昭和三十六年)、
 高松市で開かれた文部省の道徳教育研
 究会は日教組との全面的な対決の場と
 なりました。組合側に逮捕者も出た大
 闘争ですが、組合側は山陽新聞をもと
 に情勢判断しているとも言ってくれま
 した。これらのことは働く者の力、組
 合の力が強いことは真実を報道する紙
 面づくりと深く関わっていることを痛
 感しました。

現在、ジャーナリスト会議の一員と
 なっていますが、メディアの果たす役
 割の大きさを痛感します。NHK、歴
 史教科書、JR西日本の大事故などな
 ど。香川のジャーナリスト会議はNH
 K問題では元記者を講師に勉強、歴史
 教科書では県歴教協会長を講師に勉強
 し、これらは私の「語り部」活動の大
 きな力になっています。

香川のジャーナリスト会議の活動で
 特筆すべきは全国にも有名になった豊

島産廃問題です。今岡氏を中心に現地 ことなどがあります。まだ問題が全面 います。いま国内外で多くの問題が起
調査やシンポジウム、またジャーナリ 的に解決はしていませんが、解決の系 こつているとき、ジャーナリスト会議
スト会議全国交流集会を香川で開いた 口を開く上でも大きな役割を果たして の果たす役割は大きいものがあります。

〈寄稿〉 沖縄の地から

今ならまだ遅くない

徳吉 裕 (沖縄タイムスOB)

新たな「戦前」が始まろうとしているといわれる昨今の政治状況の中で、果たして日本の新聞は、戦争を止めることができるか、と問われれば、残念ながら否定的な答えしか出てこない。

このことを痛感したのは、日本の良心と知性を代表する九人の知識・文化人たちが、憲法改悪に反対する「九条の会」を立ち上げたとき、中央紙をはじめ全国の多くの新聞が、そのニュース価値にふさわしい扱いをしなかったことである。その後、各地で行なわれた「九条の会」の講演会も、広島中国新聞など一部を除き、ほとんど無視するか、軽視した報道しかしていない。

*「九条の会」講演会のタイムス紙面

沖縄でも昨年十二月一日に「九条の会」の講演会が行なわれた。会場的那覇市民会館には二千人余の聴衆が詰めかけ、会場からあふれた。私はこの講演会を沖縄の新聞はど

のように報道するのだろうか、期待と不安で見守った。

しかし、私の不安は杞憂だった。その報道ぶりは満足のゆくものだった。私は「沖縄タイムスの社報」Ⅱ二〇〇五年一月一日付Ⅱに「あつぱれ! わがタイムス」と次のようなエールをおくった。

『前略。講演会の翌日、いつもより早く起きて新聞を見た。「九条」の重要性強調―一面トップ。二、三面に小田実、奥平康弘、大江健三郎氏の講演要旨。さらに社会面には「九条のとりで、今こそ守りたい」と聴衆の反響。完ぺきな扱いだった。うれしかった。OBとしてわが沖縄タイムスを誇りに感じた。沖縄タイムスの大先輩たちは、戦前、大本営発表に加担したことをざんげ、二度と戦争のためのペンには取らないと誓い、沖縄タイムスを創立したといわれる。この精神は確実に継承されていることを喜びたい。戦後六十年、本土の新聞はまた変質しつつあるのだろうか。わが沖縄タイムスは、今後とも憲法を守り、平和のために

健筆をふるってもらいたい」

私がもう一つうれしかったことは、今年の「戦後六十年」企画で沖縄タイムスがJ C J賞を受賞したことである。後輩たちの健闘に敬意と拍手をおくりたい。

* 歪んだ沖縄社会の存在が新聞を規定

沖縄の新聞がまだ健全なのは何故だろうか。その背景には、日本の人口の1%、国土面積の僅か0・6%の地に日本の七五%の軍事基地が集中している軍事的、政治・経済的な歪んだ沖縄社会の存在が、沖縄の新聞のあり方を規定しているのではないかと考える。

悲惨な沖縄戦をくぐり抜けて復興へと立ち上がった沖縄住民の前には、まだ多くの壁が立ちはだかっていた。日本の施政からは切り離され、二十七年にわたる米軍の植民地支配が続いた。こういう困難な社会状況のなかで、新聞が果たさなければならぬ役割は、住民の立場に立った報道を行なうことだった。米軍の支配に抵抗し、日本への復帰運動をとともに闘った。言論・報道の自由を語るとき、必ず商業新聞の限界論が出されるが、沖縄の新聞は、いわば住民の要求と新聞社の経営の方向が一致して住民に支持され、新聞社は成長してきたのではないかと考えている。

かつて、「沖縄の新聞は何とかならんか」と愚痴った総理がいた。また、「沖縄の新聞は共産主義者に支配されている」といらだった政治家もいたが、イデオロギーの問題ではなく、沖縄の新聞は愚直に住民の立場に立った言論・

報道を貫いているのである。

* 中央紙の記者が支局長と一緒に取材したとき

一九六八年、嘉手納基地内でB52米軍機が墜落、大爆発を起こし、住民のゼネストにまで発展した事故を取材してきたある中央紙の記者が、沖縄タイムス嘉手納支局長と一緒に取材したときの話にショックを受けたことがある。

沖縄の新聞の基地報道に感動した中央紙の記者は、支局長にこう話したというのである。

「われわれの新聞社は大きくなり過ぎて、船首を左へ切ろうとすると、戦艦大和のように時間がかかる。物理的にムリだ。また、わが社には家族を含めると四、五万人おり、会社を潰すわけにはいかない。私の記事は出張旅費の領収書みたいなものですよ。沖縄タイムスは小回りがきくので、今までのような報道を貫いてほしい。潰されるかもしれないが……」

幸いタイムスは潰されずに済んできているが、このエピソードは、あるいは今のマスコミの状況を物語っているのかもしれない。しかし、今ならまだ遅くないとも思う。

* ジャーナリスト会議のみなさんとともに

昨今の政治状況は、憲法九条の改悪を進めると同時に、教育基本法を改正して「愛国心」を養い、国民保護法と称して言論・報道の自由を規制、共謀罪を新設して治安維持法的な法体制を企んでいることは明らかである。さらに日

米両政府が自治体の頭越しに合意して、沖縄・普天間基地の県内移設をはじめ、キャンプ座間へ米陸軍司令部を自衛隊司令部と一体化して移転させ、横須賀を原子力空母の母港とする計画など米軍基地の再編強化が急速に進められようとしている。このことを、新聞をはじめとするマスコミは、国民に正しく伝え、戦争を止めなければならない。

本土マスコミも、沖縄に次ぐ基地県の神奈川新聞が沖縄タイムスとの戦後六十年共同企画として米軍基地問題と正面から取り組んでいる。私はかつてタイムスの大阪支社に勤務し、JCJの会員はじめ多くの友人と知り合うことができた。創立五〇周年を迎えたジャーナリスト会議の役割はいよいよ重要になってきた。ともに頑張っていきたい。



VIII

若きジャーナリストたちへ

若きジャーナリストたちへ

秦 正流（元代表委員・故人）

―権力とジャーナリズム―

ジャーナリズムは多様な意見、多様性を持つのがいい。しかし、朝日が左ならおれは右だではなく、自分が考えているようにやる、これが多様性だ。よそはやっても自分はやらん、よそはやらんでも自分はやるの姿勢で報道に当たるべきだと思う。



秦正流氏（撮影・中村梧郎）

国民に本当に信頼される新聞を出し、放送をしていかなければならない。そのためには常に権力との間で緊張関係を持たねばならない。監視する野党の立場でなければならぬ。

自分たちが支持した政党が権力の座についたときも同様である。権力につくと墮落する危険は証明されているからだ。何でも反対するのではなく、賛成すべきものはなく、賛成するのはいい。賛成

するのは御用新聞と決めつけてはいけない。決めつけたいのもあるが……（笑い）。

だからジャーナリズムはいつも危険な立場にある。国家機密法ができたらどうなるか。推進者がいつている。（機密法は）日本国民が国家への忠誠心をどういう風にかけているかを問う踏絵だ。朝日新聞の背景にはソ連がいるとまでいう人もいる。冗談じゃない。

言論の自由がないと新聞記者はつとまらない。反対者はリストアップされている。隣家に行つて、「お隣は毎晩、帰りが遅いですか」などと聞く。隣家を監視人に仕立てる。あるいはひそかに送り込んだ人間に自首させて密告させる。問題は、防衛は市民が生きるうえで最大の関心事なのに、何も知らされなくなる。いまでも百何十万点か隠されているという外交、経済、技術にも網がかぶされている。国家の安全あつての言論の自由との論がある。民主国家を守るため非民主国家をつくるというのは、角を矯めて牛を殺す理屈だ。平和のための戦争の論理と同じだ。防衛のための軍備というが、攻撃のための軍備といった国があるだろうか。

政府は開かれていなければならぬから国民は情報公開法を望んでいる。アメリカやヨーロッパでは公開法は常識になっている。隠すのは憲法の精神に反する。

暴力には法律、官憲による暴力と個人、集団による非法な暴力とある。暴力は怖いのがこれにひるむならジャーナリスト志望はやめた方がいい。暴力は怖い、これとあえて闘う志を持つのがジャーナリストの本旨だ。

一方、ジャーナリストは常に自制しなければならない。ジャーナリストの傲慢は怖い。書かれたらその人の名誉は傷つく。

「犯罪報道の犯罪」などの自己批判精神が出てきたが、これがないとジャーナリズムは長持ちしない。言論に対し

て言論をとというが、その場を持たない人はどこに訴えたらいいか。

相互批判も必要だ。営業的な相互批判ではなく、真実を語るうえで相互批判である。

ジャーナリストを志すには勉強、見識、情報・ニュース感覚、真実を語る勇氣、取材先に突進する勇氣、ひるまぬ信念とともに自己批判、相互批判の精神が必要だと思う。

権力と闘う一方、国民の幸せにつながるあらゆる情報、ホノボノ情報、うん、そうかと思ってもらえる論文も必要。ジャーナリズムにはたくさんさんの機能がある。

(一九八七年五月十五日、JCJでの講話から抜粋)

戦争なき新時代への挑戦を

伏木田 照澄

(北海道支部／元新聞)

新聞社の大先輩から昨日、一幅の書
が送られてきた。作品は「人生は挑
戦の連続である。挑戦の気構え失った時
人生は終焉を告げる」の立派な文字
だ。手紙では九〇歳を迎える記念に、
とあり、北方領土返還のため一生を捧
げる決意が語られていた。

この挑戦に思った。町村信孝外務大
臣は平和のために頑張つて欲しい、と。
大臣の亡き父、町村金吾道知事(当時)
の訪ソ時にただ一人だけの随行者と

ヨット世界一周が、堀江謙一さん
(一九六六年)と斎藤実さん(七一)
によって成功、それぞれ世紀の大記録
を達成した。

二人は「若い人は勇氣と度胸でもつ
と世界に出てほしい」「一つの目標を
持ちチャレンジする素晴らしさ」と

「挑戦」の勧めを語った。

してクレムリンを訪れ、レニングラードでは、ターニャ・サビチェワの日記にお目にかかった。とても、とても悲しい日記だった。

一三歳の少女は対独戦の中で詩のようにメモット。「おばあちゃんが死んだ」「ジェーニャが死んだ」。美人通訳のオルロワさんの、流れる涙に耐える声が「一九四二年五月一〇日、午後四時ママ」「サビチェワ一家は死んだ。みんな、死んだ。残ったのはターニャひとり」と続いた。

終戦を前に警視総監として新潟県知事から赴任する父を長女遠山富士江さんが語っている。「死を覚悟していたのでしよう。汽車が発車する時、目に涙がありました」

その町村知事がオルロワさんの「ターニャは家族たちを追いかけるように死んだのです」の説明に奥歯をかみしめるように耐えていた。

ニクソン米大統領の現地での「ターニャの不幸を二度と繰り返さないように」と全世界への声明は、感動的だった。

だが、町村外務大臣も父の背に、ターニャへの涙を信じ、全世界へ「日本には憲法第九条があります」と胸を張ってほしい。

人は歴史に学び、新時代に挑戦しなければいけない。私の母は、北辺の警備のため入植した屯田兵の娘だ。日清・日露戦争に従軍した父、第一次、第二

〈二一世紀のジャーナリスト・JCJへ〉

やるべきこと果敢に

原 寿雄
(ジャーナリスト)

いまジャーナリズムは、デジタル革命の不安と世論・権力の挟撃による公的規制に直面している。問題は、現状のジャーナリズムが日本の民主主義

市民社会にとって、かけがえのない存在価値を人々に実感させているかどうか。カギはその一点にかかっている。

無責任で公共性を離れた情報全盛時代にこそ、批判的ジャーナリズムがま

次大戦と戦争の世紀を生きた自分の体験から九七歳の現在、「戦争だけはダメだ」という。私の母の最も大切な遺言だと思ひ、九条を守る連帯を強めた

いと思う。
そして、若い人たちに、そのための挑戦を期待したい。

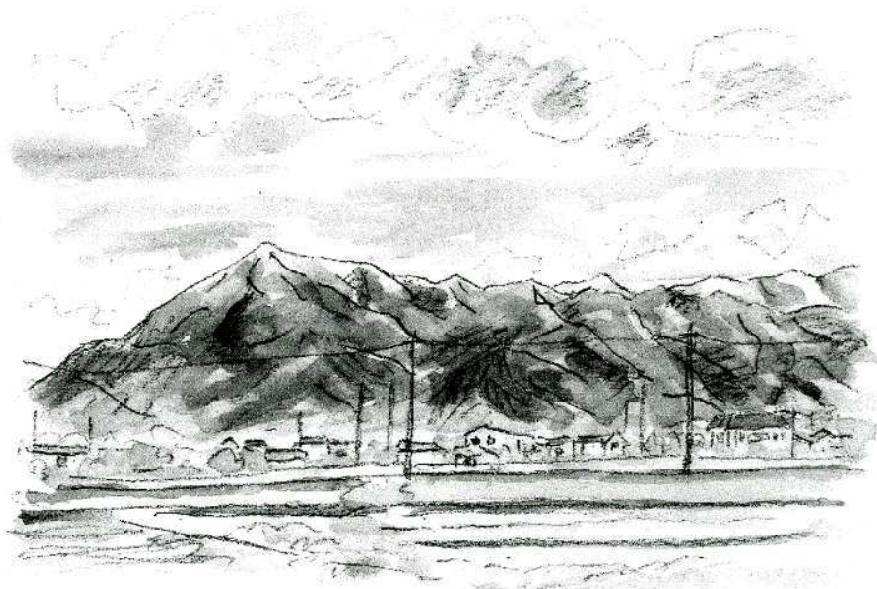
すまず重要になる。それが出来るのは、良質の取材力を持ち、利害にとらわれない独立・自由のメディアしかない。

その中身が現状のままでは、足下が揺らぐ。経営者に任せてはおけない。状況を変革するのもジャーナリストに不可避の仕事である。JCJはそのセンターになって欲しい。「いい環境になったら、いい仕事出来る」などと、



原 寿雄氏

いつも愚痴っている人間に未来はない。
世論を味方にして言論表現の自由規
制に抗するには、権力監視、社会正義
の追求など、メディアの存在価値を明
白に実証して見せなければならぬ。
ジャーナリストとしてやるべきことを
果敢にやることなしに、「べからず」
倫理の安全運転だけでは信頼は取り戻
せない。ジャーナリズムの明日を決め
るのは、今日のジャーナリズムの質で
ある。言論表現の自由を商業主義の隠
れ家にするなど、許されない。
〔「ジャーナリスト」二〇〇一・一・二五
号から〕



いつも仲間たちがいた



横田基地視察 J C J バスツアー (1984. 3. 30)



全国交流香川集会で。豊島のすさまじい産廃のつめあとを取材する (1997. 11. 8)



この笑顔！
長野・安曇野の全国交流集会で
(二九九八・九・二六〜二七)



斎藤茂男さんの遺影を囲んで (1999. 7. 4 日本青年館)

街頭でマイクを握る。「有事法案を廃案に！」
自由法曹団、マスコミ労組とともにリレート
ク(二〇〇二・六・八 有楽町で)



編集を終えて

J C Jでの一番思い出深い関わりは二〇〇〇年五月、サミット前の沖繩ツアー。学生や会員外の人も含めて五人の二泊三日、幹事の一人として憧れのバスガイドもやった。名護や辺野古での交流、やんばる探検、米兵も参加のハーリー船見学など、J C Jならではの楽しい企画だった。今、大きく変化する社会の動きにJ C Jは追いついていない、J C Jの行く末が見えないと感じ、そんな時はやはり来し方を確認することだと思った。

進むべき世界は見えている。しかし平和の中で育った私たちは、たちふさがる川の大きさ、山稜の険しさに戸惑っている。戦後の新しい局面を先輩方は、職場で街で多くの人々を巻き込んで創意と工夫で戦ってきた。来し方の戦いからヒントと力をいただいて、先輩にもあとひと踏ん張りしてもらって、「J C Jここにあり！」と叫ぼう！

皆さま、ご寄稿ありがとうございました。わけでも川田のしつこい呼びかけに応えてくださった支部・部会の方々に感謝。

〈川田マリ子〉

「J C J五〇年史」を出す場合は「人物往来史」のよななものを書きたいというのが、私の考えだった。初代議長の吉野源三郎氏はじめジャーナリズム界における日本の良心ともいえるべき人々が、何らかの形でJ C Jにか

かわってきていることを記録に残しておきたかったからである。

しかし、その時間的余裕もないままに川田さんから「私とJ C J」という手記募集の提案があり、生身の証言もよしと賛同した。集めるのには多少苦労したが、章をたてて整理してみると大きな流れが見えてきたように思う。

表紙は、住宅密集地に隣接する米海兵隊普天間基地の写真にこだわった。この現実にジャーナリストはどう向き合うのかと。大阪勤務で得た三十数年來の友、元沖繩タイムス編集局次長、徳吉裕氏を通じて同紙から写真を提供していただいたことに心から感謝したい。戦後六〇年の節目の年に大事な仕事をさせてもらったと思っている。

〈小島 修〉

編集作業の途上、お一人お一人の原稿を拝見しながら、J C Jの五〇年の歩みの重さに大きな感銘を受けていました。本書には、それぞれの分野でジャーナリストとして生きた、あるいは生き続けておられる九〇人の方々の軌跡が太く鮮明に記されています。

時代状況の厳しさの中にあって、あらためてJ C Jの存在が問われ、かつ期待されていることを深く思いました。

〈笹岡敏紀〉

■日本ジャーナリスト会議（J C J） （Japan Congress of Journalists）

1955年2月19日創立。日本ジャーナリスト連盟を前身とし、世界ジャーナリスト大会への日本代表派遣運動のなかで結成された。新聞、出版、放送、写真など各分野から横断的に会員が結集し、戦前、言論・出版にたずさわった人々が戦争に協力したという痛恨の体験から「再び戦争のためにペンを、カメラを、マイクをとらない」ことを誓いとした。初代議長は雑誌『世界』の編集長だった吉野源三郎氏。

言論・出版・表現の自由を守り、真実の報道を通して世界の平和に貢献し、国内外のジャーナリストと交流、連帯することを目的として活動してきた。1958年からは、年間のすぐれたジャーナリスト作品および活動を選定してJ C J賞を贈り続けてきている。2002年から「黒田清・J C J新人賞」、2003年から「J C J市民メディア賞」を設けた。

創立以後、ジャーナリズム研究者、機関紙誌、広告や、目的に賛同する市民運動家などにも範囲を広げるとともに、ジャーナリズムに関する職能団体として、ジャーナリストおよびその協力者の人権を守る活動や支援・救援活動も目標としている。

年間の主な活動として、「いま、時代を見すえる」6月集会、8・15集会、12・8集会のほか、各地方、分野別の支部・部会で例会や学習会などに取り組んでいる。全国各地で交流集会を開き、沖縄米軍基地、横須賀米海軍基地、豊島産廃現地、有珠山噴火現地などへ取材ツアーを行なっている。

現在、会員約800名。個人会員のほか、地方支部が北海道、新潟、埼玉、神奈川、東海、関西、岡山、広島、香川、北九州、福岡、宮崎にある。職場支部がいくつかと広告支部、出版部会、放送部会があり、かつて新聞・通信社にあった支部は新聞部会として再発足しようとしている。現在の代表委員は石崎一二、柴田鉄治、隅井孝雄、茶本繁正、橋本進、宮崎絢子、事務局長守屋龍一。日常の活動は運営委員会が統括している。

会費・月額1,000円、機関紙「ジャーナリスト」（月刊）年間購読料3,000円（送料込み。会員以外の購読者約300名）

ジャーナリストとして生きる

——証言でつづる J C J 50年の歩み——

2005年12月8日 第1刷発行

発行 日本ジャーナリスト会議（J C J）

〒101-0064

東京都千代田区猿樂町1-4-8 松村ビル401号

TEL 03-3291-6475 Fax 03-3291-6478

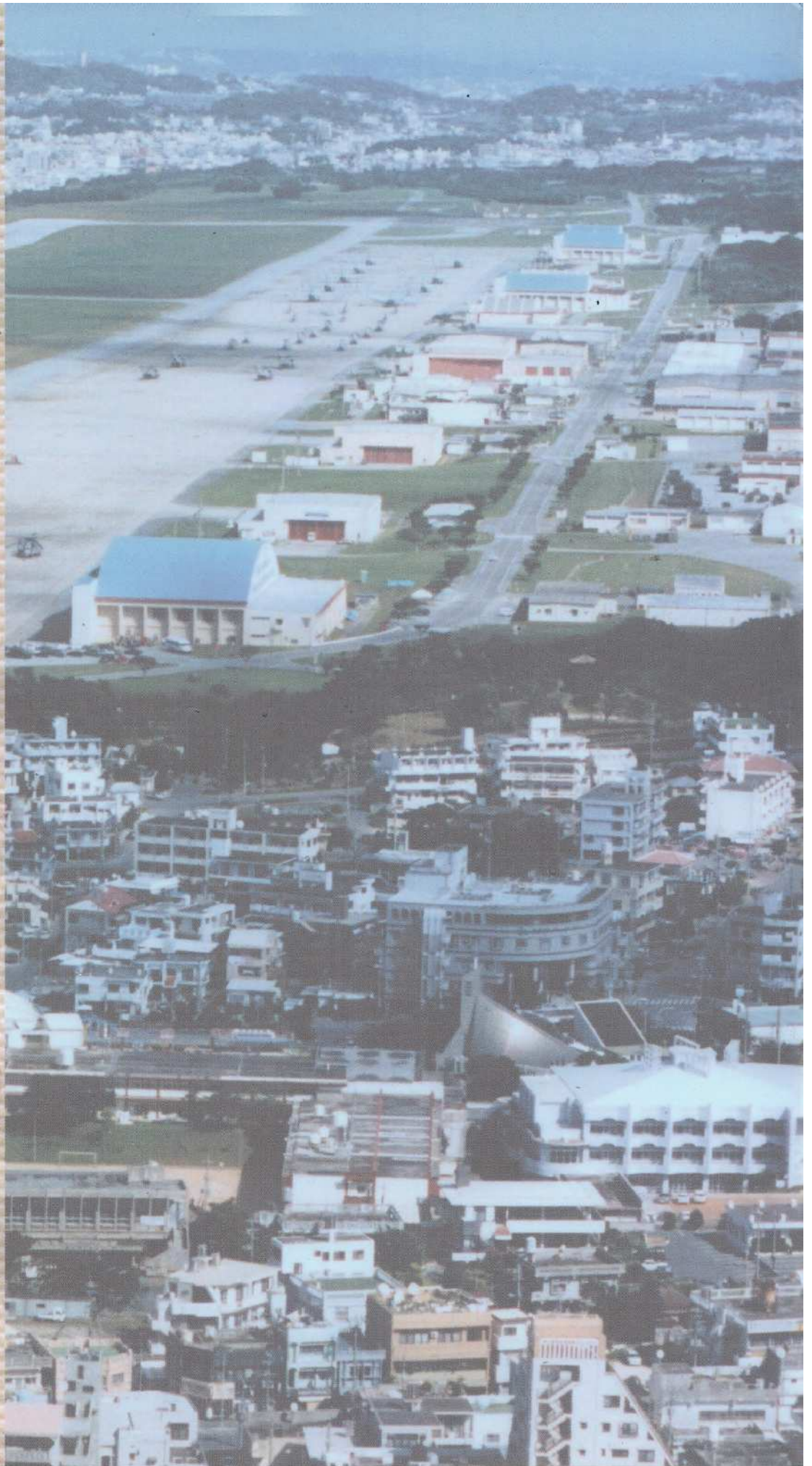
E-mail jcyj@tky.3web.ne.jp

URL. <http://www.jcyj.gr.jp>

編集 『ジャーナリストとして生きる』刊行委員会

組版 We b D（ウェブディー）

印刷 平河工業社



頒価1,000円